
スモーキー&ザ・ストレンジラバーバンド

あずまや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スモークキー&ザ・ストレンジラバーバンド

【Nコード】

N2535G

【作者名】

あずまや

【あらすじ】

金さえ払えばどんなものでも奪ってみせると自負する『スモークキー一味』は、チャンピオンベルトだの恋心だのと、わがままをいう依頼人たちに振りまわされながらも、今日も宇宙を駆けまわる。シリーズ作品

プロローグ ナオ誕生

1

宇宙船 ヘリオドール のコクピットは生ぬるい空気に包まれていた。窓の外には美しいアンドロメダ銀河が広がっているというのに、スタジャン姿の中年男は競馬新聞に耽り、タンクトップの少女はコンソールに山と積まれたチョコレートを貪り、白いスーツを着た年頃の男は腕組みして思案に暮れる『フリ』をしていた。

プライベートビーチで水着の女たちと戯れていたヘイズ・スモーク^{ジュニア}は、ハツと現実に返りブロンドの頭をふった。男はやがてシートから立ち上がると、世にも奇妙な『白い』サングラスのブリッジに手をやった。

「さて諸君、僕たちはこれから重要な話し合いをしなければなら
ない」

「なんでえ、いきなり改まって」

隣にすわるザルネル・ウレバスキンは、新聞を下ろしてシートを横に向けた。口ひげをぼりぼりとかき、『ベアトリックス』という筆記体のロゴが入った赤いキャップをかぶり直す。

「ん？ ど（ろ）したの？」

左端にいるシヨコラ・ビーメイは、もぞもぞと体をまわしてシート^の座面に膝立ちした。背もたれが高すぎるのか彼女が小さすぎるのか、溶けたチョコまみれの幼顔をやっとのぞかせる。

ヘイズは湿った声でつぶけた。

「僕らはこれまで数々の依頼をこなし、またずいぶん危ない目にも遭ってきた」

「それで？」とザルネル。

「このままでいいのだろうか」

「？」

ザルネルとシヨコラは顔を見あわせる。

「このままで、あの借金は返せるのだろうか」

「う……」

ザルネルは腹に一発食らったようにうめいた。

「このままで、あの国はかつての姿を取り戻せるのだろうか」

「あ……」

シヨコラは力なくうつむいた。

「このままで、僕は……」

「要するにその」ザルネルはさえぎった。「もうちつと割にあう仕事が出来てくれることだろ？」

ヘイズはうなずくと、口ひげオヤジを見て、チヨコひげ少女を見た。

「見た目はともかく、腕は上がった。そして名も上げた。それでも僕らには決定的に足りないものが一つある」

「女だ！」

ザルネルは吠えるように言った。

「いや、その、まあ……それもたしかにものすごく重要なんだけど……」

「むうう！」

ふくれ面のシヨコラがぐいぐいと自分の鼻を指す。

「やっぱり男所帯だと仕事の幅も限られてくるしなア」

「それもそうなんだが、もっと大事なことが……」

「ん！ んん！」

シヨコラは両手でさらにアピールした。

「この世にフェロモンとギャンブル以上に大事なことなんてあのかねえ」

「ううう……」少女はうなつたが早いか、シートを飛び越えると、タンクトップを全開にまくった。「ここにいるよ！ ここに！」

ザルネルはぶらぶら手をふった。

「いちいち脱ぐんじゃねえよ。運動不足のオタ野郎のほうがまだ『ある』だろうが」

「ぬう……じゃあ、これでどお？」

シヨコラはショートパンツを下着ごとずり下ろしていく。

「わかったわかった！　ったく軍人上がりの女ってのはそんな奴ばっかりか」

「どうだろ。ボクがいた部隊は女子一人だけだったし」

ヘイズは咳払いした。

「あー、そろそろ本題に戻ってもいいかな？」

「で、なんの話だっけ？」

口ひげとチヨコひげは、同時に白づくめの男を見上げる。

リーダーは額に手をやった。

ヘイズたちに足りないもの。それは運だった。条件のいい依頼にありつくには手腕も必要だが、それに劣らず『天運』も左右した。

「科学の塊の中心でこんなことを叫ぶのも妙だが、人にはもって生まれた動かしがたいものがあると、僕は信じている」

ヘイズはコクピット右端の、空いている席にちらと顔を向けた。

「運のいい人を新しく入れたいってこと？」

シヨコラの問いに男はうなずくと、誰もいないほうへ声を張った。

「ファイ。例のアレを頼む」

すると正面の窓ぎわに突如として、若い女のバストアップ写真とプロフィールデータの、半ば透けた画像が現れた。

「ほええ、なにこのゼロの数！」

シヨコラは『獲得金額』の欄に注目した。

「あやかriteえ」

ザルネルは透ける画面を引き寄せるように手をかいた。

「この娘を新メンバーに迎えたいと思う」

「いいのか？」とザルネル。

「勝手に決めちゃって」とシヨコラ。

「喜んで加わってくれるさ」

ヘイズは自信に満ちた顔で言った。

プロフィールの下のほうに、雇った情報屋が集めた女の近況が書いてある。

「ああ……」

二人は哀しげな吐息をついた。

2

サエコ・ケーシーは大きなアーチ橋の真ん中に立っていた。平日の出勤時間だというのに行き交う車はなく、カバンを背負う子供の列もない。あるのは肌を打つ冷たい風と、雪帽子をかぶった岩々の底を下る清流の音だけだった。山あいのひなびた村にしては不釣りあいなほど立派な橋だ。そういえば、村に大きな温泉がでたというニュースが駅の電子掲示板にあった。ぐずぐずしていると、この辺りにも人の目がどんどん入ってくる。急かされている感じが気に入らないけれど、かえってそのほうがいいのかもしれないと、ここに立ったときには思うようになった。

サエコは橋の欄干にもたれかかり、下をのぞいた。目がくらんだ。なぜこんなやり方を選んだのだろう。五階のオフィスの窓ぎわにさえ近づけなかったこの私が。

空の遠いところから轟音が近づいてくる。サエコは虚ろな目を上にやった。

宇宙船……か。くすんだ黄金色のクジラに翼をつけたような、一度見たら忘れられそうにない、おもちゃのような船。テレビ局の取材にちがいない。望遠でスクープでも狙っているのだろう。この世で最も幸運にして不幸な女のスクープを。

電車に乗れば色紙を突きだされ、断りもなく写真を撮られた。学生の頃はどんなに粧めかしたつもりでも、誰一人として目を向けてくれなかったというのに。

小さな島に逃げ隠れたこともあった。宿のお婆さんは冴えない一人のOLを捕まえると、女神のごとく崇め王女のようにもてなした。空港では監視の目が光っていた。国宝を死守せよと言わんばかりの、張りつめた沈黙が恐ろしかった。

サエコは籠の中のスズメだった。金の卵を産むことがやめられない、世にも珍しいスズメだった。困っている人々の感謝の声がどうしても耳から離れなかった。

「だけでもう……これきりです」

サエコは欄干の上に立った。

テレビ局の船が上空でうるさい。もう！ 最期のひと時くらいそつと……。

下を見た。や、やっぱり怖い！

そのとき、気まぐれな突風がサエコの背中を押した。

「あつ！」

と、口にしたときにはもう、足もとにはなにもなかった。

「いやああああ！」

耳が痛かった。自分がこんなに大きな声をだせるなんて……。

胸が痛かった。そこまで肺を使っただつもりは……。

「あれ？ 私……」

宙に浮かんでいる。両脇の下からゆつと誰かの手がのびてきて、細い体を支えていた。

サエコは思わず顔を上げた。二つの白いレンズと目があった。

「やあ」

男は微笑んだ。

この人はなぜ、こんなところに浮かんでる？ しかも逆さで。空の彼方に目をこらす。

「ウ、ウソ！？」

天からたれ下がる黒い糸をたどっていくと、男の足首に突きあたった。

あのテレビ局の船？ 雲の高さから？ バンジージャンプで？

のびきったゴムがみしみしと鳴きはじめた。

「そのままだよ、そのまま」

男が言うと、サエコはあっという間に空高く舞い上がった。叫ぶことさえできなかった。

記憶が飛んだ。気づいたときにはもう雲の上だった。

「命を粗末にするものじゃない」

男の逆さ顔が言うと、サエコはハッと我に返った。

たくましい二つの手が、左右の胸を力いっぱいつかんでいる。

「やああ！」

サエコは暴れた。

「こ、こら！ 下見て、下っ！」

雲のすき間から、模型のように小さくなった山村が目に入った。

「！」

ぎゅっと目を閉じて顔を反らす。

「君のことは調べさせてもらったよ」

男の声がはつきり聞き取れることに、サエコは今ようやく気づいた。たしか上空にはテレビ局の宇宙船があったはず。エンジンの轟音はどこへ？ ノイズキャンセラーというやつだろうか。そんなことより……。

人の不幸を心待ちにしては蠅のようにたかってくる、不潔な大人たちへの怒りがこみ上げてきた。

「放してください。映すのはかまわないですから」

「映す？ なにを？」

「テレビ屋さんでしょう？」

「そんな風に見えるかい？」

サエコは薄目をあけた。

風にたなびく金髪に甘いマスク。むしろテレビ屋を敵視する、スキャンダラスな俳優といった感じではあるけれど……。

「とにかく放して。私はもう一文も持ってません」

冴えない女と逆さづりの男はしばし見つめあった。

男はため息をつく。

「わかったよ。ただその前に一つ、折り入って頼みがあるんだが……」

「どうせまた私を辱めるようなことでしょ」

「君が今日まで立派に生きていたという証に、その靴がほしい」

「靴？」

足もとを見た。

「ひっ！」

サエコは顔を背け、生暖かい命綱を握りしめる。そうだった。ここはオフィスよりもアーチ橋よりもずっとずっと高い、雲海を見下ろす場所……。

「恐いかい？」

「恐くありません！」

声が裏返った。顔が熱くなる。

男は口もとを緩めた。

「それだけ君は生きたい、ということさ」

そうか……そういうことだったの。だから私、いろんな言い訳を見つけてあんなところまで来ちゃったんだ……。サエコは顔を歪めていくと、壊れた笛のような声を漏らした。

「私……もうどうしていいか……」

「今日、たった今から別の人間になって、別の人生を歩んでみたいとは思わないか？」

「え？」

水浸しの顔を上げるサエコ。

「僕らについてくるなら、それはきつと叶う」

「あ、あなたはいつたい……」

「正直に答えてほしい。君は……生きたいか？」

サエコはうなずく。

男は上空に向けて声を張った。

「上げてくれ！」

男と女は、天空に浮かぶ鋼鉄クジラの腹へ吸いこまれていった。

3

白メガネの男に促され、サエコはソファに腰かけた。左手の席には、なにかのスポーツのファンなのか、キャップとスタジャンの口ゴがおそろいの、固太り気味なひげオジサン。右手の席には雪のような肌を惜しげもなくさらしている真夏の少年……いや少女か。好奇にまたたく瞳の星々がびびしと頬を打ち、なんだか痛がゆい。

「僕はヘイズ、ヘイズ・スモーク^{ジュニア}だ」

男は正面にすわると、ザルネル・ウレバスキンとシヨコラ・ビーメイを紹介した。

サエコは訝しんだ。左右の二人はともかく、あの白ずくめの男、まるで魔物が世を忍んで活動するときに適当につけたような名前だ。それはともかく、空で耳にした男のひと言について、訊かずにはおけない。

「あの……私のことを調べた、と言いましたよね？」

ヘイズはメガネのブリッジに手をやった。

「十九の冬、君は宝くじを、三枚だけ買った」

「……」

サエコはくつと口を結んだ。

「そして君は、惑星アンケルでただ一人にしか当たらない『特等』を手にした。人生を三度は遊んで暮らせるほどの額だ。目立つことを恐れたのか、身分不相応と感じたのか、ともかく君は匿名をもって当選金のすべてを慈善団体に寄付した。そのおかげで助かった人々の数は知れないと、マスコミでは話題になった。気をよくしたのか、君は次の年も同じことをして、同じ額を受け取り、再び困っている人々に大金を分け与えた。信じられないことに、そんな奇跡が五年もつづいた。

だが五年目の冬、ある慈善団体の者がつい、君のことを口外してしまった。悪気はなかった。君の善意をどうしても世に伝えたいという気持ちが抑えられなかった。君はただのOLから一躍、その惑星^{ほし}で最も有名な女の一人になった。弱者からは救いの女神と崇められ、大衆からは妬みや羨望のまなざしを受け、君はどこへ出かけるにもカメラがついてまわるように……」

「もういい！」サエコは耳をふさいだ。「もう……たくさんです」「すまない」

ヘイズはまるでカウンセラーのように、落ちつきはらった声で詫びた。

「それで……私はここでなにをすればいいんですか」

「とりあえず、別人として生まれ変わってもらおうか」

その物言いに毒氣を感じたサエコは、両手でさつと顔を隠した。

「そんな可愛い顔に、メスなんか入れないよ」

優男は笑うと、懐から細長いケースを取りだし、中身をサエコに手渡した。

「メガネ？」

今どきメガネというのも珍しい。そういえば目の前にいるこの人、妙な色のレンズをしているけれど……。あんなに真っ白で、ちゃんと見えているんだろうか？

「まったく今まで通りというのもなんだからね。こういうことは雰囲気大事なのさ」

「は、はあ」

サエコは分厚いフレームのメガネをかけた。度は入っていない。シヨコラが口をまるくした。

「お、なんか賢そうに見えるよ？」

「そ、そうですか？」

気をよくしたサエコは思わずフレームに手をやった。

賢そうなんて……生まれて初めてかも……。

容姿はともかく、まず決めるべきはサエコの新しい名前だった。

どうやら集まった四人には命名のセンスがなかったらしく、ひねりだした案はすべて却下となり、談話室は重たい空気に包まれていった。「うーむ」と「むーん」の対峙が二時間もつづいた末、ザルネルがついに境界線を踏みこえた。

新たにタバコを取りだそうとして、ふっと箱の銘柄に目がいく。

「もうよ、これでいいんじゃないのか？」

ヘイズは言った。

「『ラオ・シーダー』か。悪くはないが……」

「『ラオ』は国の言葉によっちゃあ老人を意味する、って言いてえんだろ？」

「それ、言わなければよかった」

「やべ」

ザルネルは口を押さえる。

シヨコラは言った。

「じゃあさ、『ナオ』ってのはどう？」

「それだ！」

男たちは手を打った。

名字は実在する形にしたほうが都合がいいということで、サエコは今から『ナオ・シーダース』と名乗ることになった。

「お次は新しいIDだね。ファイ！」

ヘイズは誰もいないほうへ呼びかける。

ナオは首をかしげた。透明な召使いでもいるんだろうか……。

少しして、ナオの古いID、つまりサエコ・ケーシーの個人情報画面が、手前のテーブルの上にいきなり現れた。エアスクリーン、あるいはエアウィンドウと呼ばれているディスプレイ不要の投影方式だ。

顔写真だけを残し、サエコの歴史はすべて作られたものに変わっていた。その間、わずか十秒。

「これでもう、君は完全にナオ・シーダースだよ」

ヘイズの言葉に、ナオは頭がくらくらした。

「あ、あの…… たったこれだけで？」

「情報管理社会ってのは、これだから怖いねエ」

ヘイズはかぶりをふる。

ナオは左右の頬をばつと押さえた。

「これって、ハンザイなのでは……」

「法にかからない犯罪のほうが重いことだって、いっぱいあるさ」
大金を手にしてからの黒い記憶がいくつもよぎった。

「そう……ですね」

ナオ・シーダース。それが今日からはじまる私の新たな物語。
私の、第二章。

4

宇宙船 ヘリオドール は、そのずんぐりした体にもかかわらず、
風に乗ったツバメのように一息で宇宙へ舞い上がった。星々をつな
ぐ列車に乗った少年のような、旅立ちの感傷に浸っている暇などな
かった。航海長ザルネルは重力圏の燃費にうるさいのだ。

与えられた個室で控えていたナオは、丸窓のシャッターが下りて
惑星の小さな姿が見えなくなると、シャワールームに足を向けた。
ふるさと

気持ちのいいお湯がノズルから噴きだす。ここ数日のあいだ、終
末の地を求めてさまよっていたせいで、体を洗っていなかった。ナ
オは小さな幸せを満喫した。シャワーの水は宇宙に出ても丸くなら
ない。船の中では人工重力が働いているそうで、ヘイズがしくみを
簡単に説明してくれたのだが、もともと理科が苦手なナオには、な
にもかもエイリアンの言葉にしか聞こえなかった。

一通り汗を流したナオは、湯の滝を背に浴びながらぼうつとして
いた。

ふと、浴室の引き戸に目がいった。取っ手があるほうの小さなす

き間に、髪の毛が一本はさまっている。青みがかった金属のような光沢。はて、そんな髪の毛の色の人なんか、この船に乗っていたかしら？
「！」

ナオはハッと息をのんだ。その材質に見覚えがあった。勤めていた会社で扱っていた、ナノファイバースコープ……。

ロツクを上げ、扉をがごと横に引く。

片膝を立ててかがみこむ、ヘイズの姿があった。

「や、やあ……」

「なにしてるんです？ そんなところで」

「いや、なにつて、テスト……そう、テストだよ」

「テスト？」

「君がどのくらい敏感か知っておきたかったんだ。いざというとき、敵の監視を見破れないと困るからね」

「そんな『にへら顔』で、ですか？」

「えっ？」ヘイズはさっと口を隠した。「そ、そんなことより……」
白メガネ越しの視線につられて、ナオは下を向く。そこでようやく失態に気づいた。

私……今まで……全開で……。

「バカアアア！」

乾いた破裂音が通路に響いた。

ナオはダンと扉を閉じる。ゴスという鈍い音が外であった。

マスコミの次はヘンタイなんて……。

「私の第二章……一ページで充分です。本が薄くなってもいいから」
ナオは熱い湯を浴びながら祈りつづけた。

そうしているうち、だんだん気が遠くなっていった。

目が覚めたときは、バンザイの格好でショコラに引きずられていた。

何事かと男どもが通路を駆けてくる。

残念ながらショコラは気が利くタイプの人ではなかった。

獣じみた二組のスポットライトが、ナオの火照った肢体をサーチ

していく。

はいはい、これが人類の女の標本ですよ。
もう……好きにしてください。

第一話 引き裂かれた古札

1

宇宙船 ヘリオドール はこれというアテもなく、無限の闇の『どこか』を漂っていた。

夢の技術とされてきた『複次元航法』の発明により、人類の版図は格段に広がった。重力の影響が小さな空間であれば、虹の架け橋ならぬ『次元の架け橋』を使い、それまでは天体望遠鏡でしか見られなかった深宇宙へ、人々はわずかな時間で（浦島太郎にもならずに）行けるようになった。また、通信手段もそれに劣らず進歩を遂げ、今や星の光が届く『どこか』にさえいれば、人は孤独ではなかった。

五百年も前に実をむすんだこの史上最大の発明のことを、ナオ・シーダースが知ったのはわずか五分前のことだった。故郷の惑星^{ほし}のまわりは情勢不安がつづいており、一般の人々が最後に宇宙に出たのは、ナオがまだ七歳の頃だった。それに加えて理科の成績が十二年間つねに『下の中』だったとくれば、あんたの宇宙知識は中世の農奴並みだと言われてもしかたがなかった。

ナオの指定席はコクピットの右端にあった。船首に向かって並ぶ二つの席には、ナオの命を救った謎の団体の代表ヘイズ・スモーキー^{ジュニア}と、航海長のザルネル・ウレバスキ。そして左端には、男たちの目の前で全裸のナオをひきずった世間知らずの少女、シヨコラ・ビーメイがいた。

それぞれの席には特徴があった。シヨコラの席にはゲーム用操縦^{ツク}桿があり、ザルネルの席には大型トラック風のステアリングがあり、ヘイズの席には透けた天球儀のなかに浮かぶ千分の一スケールのヘリオドール があつた。

ナオの席にはなにもなかった。飾り気のない、事務机まわりのよ

うな形があるだけだ。難しいことをやらされるよりはマシかとも思えたが、どこことなく二軍にいるような感じが気に入らなくもあった。予備の席なので、そのうち改造するかもしれないとのこと。

そんなことより、ナオにはまず知っておくべき問題があった。

「あの……私たちっていつたい、なにをする団体なんですか？」

白スーツの優男は、スタジャン中年やタンクトップ少女としばし顔を見あわせ、怪しげな『白』メガネに手をやった。

「うーん、ひと言で説明するのは難しいんだけどね……」

シヨコラは笑顔で言った。

「雇われの強盗ゴトウだよお」

「！」

ナオはすくと立ち上がる。

ヘイズはあたふたした。

「こ、こら！ 人聞きの悪い！」

「だって、そうじゃん」

「ま、ひと言でいわねえならここを爆破する、ってんならそうなるわな」とザルネル。

「強盗なんかやるくらいなら、スラムで体を売ったほうがマシです！」

ナオがコクピットの出口に足を向けようとすると、ヘイズはさつと腕をつかんだ。

「ま、落ち着いて。基本的に僕らは、金目のものや人の命には手を出さないんだ」

ナオは男の手をふりはらう。

「そのどこが強盗なんですかっ！」

「うーん、だからひと言で説明するのは難しいと……」

どのみち宇宙にいる間は逃げられないのだ。「そのうちわかるよ」とシヨコラになだめられ、ナオはひとまずどかっ到着席。

そのとき、船が大きく震えた。

「な、なに！？ 地震？」

ナオはとつさに机の下へ隠れた。

シヨコラがぷぷと吹きだす。

そうだった……ここは宇宙だった。ナオは真っ赤になってもぞもぞ這いだした。

「依頼の通信さ。ファイ！」

ヘイズはどこへともなく声を張った。

着信のたびに船がぶるぶるするなんて……ナオはこみ上げる笑いを必死にかみ殺した。

ヘリオドール につめこんだ機器類を統べる人工知能（ＡＩ）、それがファイだった。パソコンにＯＳがインストールしてあるように、宇宙船を買ったときにはＡＩがついてくるのが当たり前だった。船舶系のＡＩは設定されたキャラクターの立体映像があれこれとしやべりまくるのが一般的なのだが、なぜかファイは起動した直後に原因不明のバグが暴れだし、対話機能が著しく損なわれてしまった。コミュニケーションの問題をのぞけば頼れる仲間なのだと三人はいう。

コクピットの前方に、無色無質の画面『エアスクリーン』が現れた。

画面に映った白髪の男はフランツ・ヴィルトールと名乗った。歴史博物館のスタッフがこぞってほしがりそうな骨董家具の数々をバックに、スーツ姿の老紳士は挨拶もそこそこに本題に入った。

『さつそくだが、君たちに奪ってもらいたいものは、これだ』

ヴィルトールは一枚の古びた札を、よく見えるよう両手で掲げた。

「！」ナオは目を剥いて立ち上がった。「やっぱりただの強盗じゃないですか！」

「こんな大事な時期に……」

ヘイズが背もたれにどつと崩れると、ザルネルが代わりに応えた。

「あのなあオッサン、どこで俺たちのことを耳にしたか知らねえが

……」

ヘイズは咳払いして言葉を継いだ。

「僕らのポリシーは、メンバー一人一人の顔より広く伝わっているはずだよ」

老紳士はうなずいた。

『もちろん知っていると。そのメガネのお嬢さんが私の話を最後まで聞いていれば、誤解が広がらずにすんだのだがね』

皆の視線が集まり、ナオは下を向いた。

「す、すみません」

冷静に思いたすべきだった。世に出回るお金は、その九割以上が電子化されており、旧来の銀行強盗は今や絶滅の危機にあるのだ。

ヴィルトールはつづけた。

『私の不注意で、これと同じ絵柄の札を何者かに盗まれてしまった。それを奪い返してもらいたいのだ』

ヘイズの『白い』サングラスが光った。

「ウチの相場は知っているね？」

『十倍出そう』

たかが一枚の古札に額面の何万倍も！？　これはやはり……ナオはじろりとヘイズを睨んだ。

優男は肩をすくめた。

「残念だが、他を当たってくれないか」

『少ないというのかね？』

「僕らは『コワイおじさんたち』とは関わりたくないんでね。どう見てもこれは彼らの仕事だよ」

ヴィルトールは笑った。

『たしかに希少という意味では、ダイヤモンドや古美術品のようなものかもしれん。だがおそらく、この札には一銭の値打ちもつかないだろう』

「？」

ヘイズは眉をひそめた。

『電灯一つなかった時代につくられたというこの札は、我が家^けに代々伝わる護符のようなもの。はじめからこの世に二枚しか存在せず、

貨幣としては一度も流通していないのだから、市場価値などあるはずもない』

「価値のないものが盗まれるわけではないよ」

『実をいうとここ三百年の間に、二枚のどちらかが六回も盗まれているのだが、時を同じくして、我らが惑星アゲートは人口の半数を失う厄災にみまわれた』

「なるほど。そういう価値か」

「厭世家かテロリストか、それとも一族から追われた奴の陰謀か…」

ザルネルは口ひげをさすった。

「僕は神仏の類は信じないタチなんだが……」

こっそりファイに調べさせておいた惑星アゲートの歴史に目をやると、ヘイズは硬い笑みを浮かべた。

「偶然にしては出来すぎている」

名家の末裔は言った。

『受けてもらえるかね?』

「タイムリミットはあるのかい?」

『雄札と雌札が引き離されたとき、三日三晩の末に災いは起こるといふ』

「よし、十倍で手を打とう」

契約が決まったのはいいとして……ナオは小首をかしげた。そういえばシヨコラの声を聞かない。いるのはわかつているけれど、小さいので背もたれに隠れてしまっている。具合でも悪いのかと思っ

て呼びかけると、シヨコラはくるとシートをまわした。

「ちよつと待って、今いいトコ……あっ!」

天を仰ぐ少女。

「で、なに?」

シヨコラは年代物の携帯ゲーム機を閉じた。

「いえ……ごめんなさい」

古札の真価を知っている人間は限られている。盗んだのはいったい誰なのか、依頼人には二三の心当たりがあった。ヘイズはA I Fアイに命じ、ネット上に散らばる依頼人の血縁や交友関係の情報をあたらせた。するとヴィルトールの甥にあたる一人の大学教授が浮かび上がった。

「惑星科学の第一人者、ジャン・ジャック・ジャブイーユ。ある時期『人類失敗作説』で学会を沸かせたが、科学界はもとより宗教界からも激しい批判を受け、しだいに表現の場を奪われていった」

「ジャジャジャジャーン！」

ザルネルはクラシックの名曲を口ずさむ。

ヘイズは眉を八の字にした。

「言うと思ったよ」

「しゃあないしゃあない」シヨコラは肩をすくめた。「そうでもして脳を鍛えてないと、おじいちゃんはおアタマ腐っちゃうからねえ」

ザルネルは赤いキャップのつばを上げた。

「ンだとコラ！　じゃあ、さっきのやつタイトルを言ってみろ」

「そ、それは……」

シヨコラは目をそらす。

「アニソンしか聴かねえガキよりは全然マシだろうが」

「ちゃんと聴けばいい曲いっぱいあるよ！」

「耳が腐る！」

「アタマはもう腐りかけてるんだから大して変わらないじゃん」

「てめえ……」

二人は席を立ち、じりじりと間合いをはかりはじめた。

「それで、人類失敗作説というのは？」

ナオはヘイズに訊いた。

「すべての生き物は互いに調和を保つようにつくられ……」

「@ %!」「×××!」

シヨコラとザルネルは汚い言葉で罵りあう。

「え?」

ナオは聞き返した。

「自然環境がよく人体と……」

「レロレロ! ここまでおいで!」とシヨコラ。

「え?」

「だから自然環境が……」

「そんなに宇宙そとに放りだされてえか、あ?」とザルネル。

それからしばらくの間、コクピットでは罵声や物や鉄拳が飛び交った。ナオとヘイズはシートの影に隠れて話をつづけようとしたが、無駄な努力だった。

「いい加減にしてくだ……」

ナオが立ち上がって抗議しようとしたときだった。

べちよ!

シヨコラが握りつぶした容器には、ハチミツのラベルが貼ってあった。

会議は一時中断。ナオとシヨコラは浴室でシャワーを浴びながら、小さな反省会を開いた。シヨコラの額に暗い筋が立ったのはじめて見たと、男たちは畏怖の目でのぼせ気味の新人ルキを追った。

ナオが自分の席に戻ると、ヘイズは最初からやり直した。

「すべての生き物は互いに調和を保つようにつくられている。自然環境がよく人体と比べられるのはなぜか。わずかな調和の乱れが不健康、場合によっては死を招くことがあるという意味でよく似ているからだ。ジャブイーユ教授によれば、自然の調和を乱そうとする人間は、惑星生物圏ガイアという大いなる肉体を侵す悪質な『病巣』、別の見方をすれば『進化上の失敗作』なのだそうだ」

「つまりその、彼は……」

「確証はない、が少なくとも教授は自然に対する人間の立場を変えたいと思っているはずだ。これまでにない思想や哲学、政策によつ

てか、あるいは……」

「いつそ滅ぼしてしまつか」

ナオはぼそと言った。

「おお、恐い恐い」

ザルネルは身震いした。

残された時間はすでに二日を切っている。古札を持ちだした後、教授はどこへ逃げたのか、絞りこむ必要があった。

ヘイズは訊いた。

「ナオ、君ならどうする？」

「私なら……宇宙の彼方へ逃げますね。厄災には巻きこまれたくないし、軍の追っ手もふりきらないと」

「五十点……というところかな。例の古札はこれまでに六度盗まれたわけだが、六度ともヴィルトール家に帰ってきた。逃げ切った犯人は一人もいない」

「犯人の野望を叶えてくれる、引き離されたお札の効力には距離の限界がある、と？」

「そのようだね」

「だとすれば、惑星アゲートのまわりにある三つの衛星のどこかに隠れるしかないでしょうね」

ヘイズはナオの手を取った。

「よかった。『君とは』うまくやっていけそうだ」

「なんだよお！」「俺はそんなに役立たずかよ！」

シヨコラとザルネルのブーイング。

ナオは男の手をふりはらった。

「私、強盗なんかやりませんよ。たとえ盗まれたものを奪い返すためだとしても」

「かまわないよ。ずっとそこにすわっていてくれればいい。君は僕らの幸運の女神なんだから」

「……」

心の隅っこにチクつときた。街角にすわって新築住宅案内のプラ

カードを立てているだけで高給がもらえるとしても、私はきつとやらないだろう。

「とにかく時間がねえ、順番にあたるぜ」

ザルネルはアクセルを踏んだ。

3

第一衛星カルノーは、宇宙研究施設が建ちならぶ、高度に地球化された広大な学園都市だ。ジャブイーユはその中心にある大学に長く在籍していた。

ヘリオドールは、空港によく似た地上型宇宙港に着陸すると、まるで駐車場のような気軽さで翼を休めた。船を出た一行はさつそく、カプセルのような形をした直通の地下鉄——車輪はついていないが名前だけ残った——に乗ってその大学を訪れると、学生に化けて教授の手がかりを探ることにした。

適任はナオだった。ヘイズもまだまだいけそうな年格好なのだが、例の怪しい白メガネは外すと大変なことになるからといって、真っ先に候補から降りてしまった。

大変なことつてなによ。そんなに素顔に自信があるってこと？

っていうか、いきなり大学生をやれっていわれても、私、高卒だし……。ナオは全身の筋肉が骨になってしまったような思いで『惑星科学棟』をうろついた。『ジャブイーユ研』には鍵がかかっていた。廊下にいた学生や通りがかった講師にそれとなく訊いてみたが、教授のプライベートについて知る者はいなかった。

新米兵隊の行進のようにギクシャクと棟を出ると、玄関先の木陰でヘイズたちが笑いをこらえていた。

ナオはムツとして向きを変え、正門のほうへすたすた歩いていく。三人はあわてて追いかけて、ヘイズが呼びかけた。

「いやあ、すまない。あそこまで固くなるとは思っていなかったん

でね。で、収穫は？」

「ありません！ 少なくともここでは模範的な先生だったそうです」
ヘイズはためらいがちに言った。

「その……さっきのはちよつと、目立ちすぎたかな。この次は、もう少し普通に、というか……」

「私は普通です！ 宇宙理論も知らなければ、大学キャンパスも知らない、たまたま宝くじが当たったというだけの、普通の元OLですから！」

ナオは一人でずんずん歩いていった。

「NGワードが一つ、増えたかな」

ヘイズは頭をかいた。

4

第二衛星ゼノは資源の星だ。特に宇宙船や兵器の素材となる鉱石が多く採れることで知られていた。荒っぽい男が行き交うこの星では、女子供がうるちよろしているとすぐに目を引いてしまう。そんなわけでここは僕らの出番だと、ヘイズとザルネルは女子供を宇宙港に残し、商業区ドームのほうへ消えていった。

ヘリオドールの留守番を任されたナオは、コクピットの窓から剥きだしの地平を眺めていた。必要なところにだけ半球形のドームが点在し、ドーム間は太い管で結ばれている。あとは岩がちな砂漠とクレーターがあるばかりだ。上空は宇宙にいるときと変わらない、永遠の夜空だった。

男どもを待っているうち、ナオはだんだんと落ち着かなくなり、狭い空間を行ったり来たりした。

大学の購買で手に入れたバタークッキーを口いっぱい頬張りながら、シヨコラは訊いた。

「ど（ろ）したの？ おし（ひ）っこ？」

「ちがいます！ なにかしてないと不安なんです」

「ゲームやる？」

ナオは携帯ゲーム機『^{デイエスファイト}DSF』を受け取った。
「ど、どうも」

見たこともないほど古い型の機種だ。博物館なら重要文化財の札がかかっているもおかしくはない。けど……すごい。まるで新品のようにメンテしてある。どこで手に入れたんだろう。スタートボタンを押す。これまた年代物の2Dシューティングゲーム。この手のゲームは決して得意ではないけれど……いともあっさり最終面をクリアしてしまった。か、簡単すぎる。シヨコラはいつもこのゲームをクリアできずに天を仰いでいた。ナオの頭に一つの仮説が浮き上がった。

「あ、あの……シヨコラさんて、もしかして……」
「ん？」

「デジタルアレルギーですか？」
「もがつ！？」

シヨコラはクツキーを喉につまらせた。

図星か……。彼女はああ見えてもただ遊んでいたわけではないようだ。それにしても、ヘイズはなぜ骨董品で訓練しなければならぬような、不器用な子を拾ったんだろう。

船が小さく揺れた。ヘイズたちからの定時連絡だ。正面の窓ぎわに『サウンド・オンリー』の文字が浮かぶ。

やけにまわりが賑やかだ。歓楽街にいるのだろうか。

『おらっ！ 大人しくしてねえと小遣いやんねーぞ！』

ザルネルのダミ声。

『おみやげはなにがいいかなー？ ナオたん！』
ヘイズが高らかに笑う。

ナオは頭痛に襲われた。なにしに行ったの、あの人たち……。

「あーあ、またおネエちゃんたちに飲まされたね」

シヨコラは口で言うほどあきれてはいない。これが彼らの日常なのだろう。

『らーいじょうぶらって。つかむもんはつか……うえっぷ』

『おいおい、こんなところで吐^ゃつちまったら色男が台無しだぜ』

ナオはため息をついた。

『どうせ女の胸でもつかんできたっていうんでしょ？』

『誤解されては困るよ、ナオきゅーん。これは捜査の一環としてらね……』

『いつからケーサツ官になったんですかつ！』

そのとき、ヘイズの居所からそう遠くない廃鉱地区の無人ドームで異変があった。爆発とともに天井が吹き飛んだのだ。

『今の、見えたか？』

ヘイズは正気を取り戻した。

『は、はい！ あ、いえ、煙が多くてなにが飛びだしたのかまでは……』

『チツ、迂闊だったぜ』

ザルネルは悔しがる。

『あの爆発はいつたい……』

『店の女のなかに教授と通じているのがいたらしい。手洗いに立ったとき、気づくべきだった。すぐに帰る。以上』

ヘイズたちは、逃げた教授を追って次の衛星へ向かった。

5

ヘリオドール は第三衛星スコロウの上空を漂っていた。ナオたちに残された時間はアゲート標準時であと半日、つまり九時間しかない。

方々の圧力によって学会を追われたジャブイーユ教授は、しばらく行方をくらませた後、名家当主の甥という立場を利用して鉱業関係者と近づきになった。高級な宇宙素材が格安で手に入るようになると、資源もなければ空気もないとアゲート人が見捨てたこの不毛

の星に地下基地を作り、チャンスをつかがった。叔父フランツ・ヴィルトールのパーティーに招かれるたびに、教授は屋敷の大金庫の暗号を探り、そしてある晩、ついに古札の片割れを持ちだしたのだ。ヘイズとザルネルがバーやクラブの女から引きだした情報はそんなところだ。

クレーターの底にずらりと顔をだしたレーザー砲や地対空ミサイルは、すべてヘリオドールを狙っていた。船が小さく揺れた。

回線をつなぐと、縮れた栗色の毛をした細面の男の姿が浮かび上がった。ジャン・ジャック・ジャブイーユは成績のいい学生を讃えるような口ぶりで言った。

『三日三晩のうちに私を見つけたすとは、大したものだ』

「そりやどうも」

肘掛けに頬杖をつきながら、ヘイズは応えた。

『だが、君たちの活躍はもはやこれまで。今から援軍を呼んでも、やって来た頃には時間切れだ。風は渦を巻いて暴れまわり、山々は火の玉を噴き上げ、大地は八つに裂けるであろう』

惑星アゲートにも立派な宇宙軍はあるのだが、古くさい軍律が彼らの腰を重くしていた。ヴィルトールがスモークー一味に期待したのは、事件の犯人が身内である可能性が高い上に、こういった事情も含まれていたのだろう。

「援軍など必要ない、と言ったら？」

『星の彼方の誰とも知れぬ人間のことで命を落とすこともあるまい』
「それもそうだな」

ヘイズは冷たく光った二つのレンズをシヨコラに向けた。

少女はうなずき、ジョイスティックを握った。コンソール上にアーケードゲームのような画面が起ち上がると、安っぽいドット絵のヘリオドールと標的のクレーターを、横から見たものが映った。次いで船首の下がぱつくりと開き、二連式の砲座が現れた。

例の携帯ゲームよりはうんと難易度が低そうだけど……ナオはそ

れでも不安だった。

目標に向かってまっすぐのびていった光の筋は、見えない壁に当たってちりぢりに砕けた。

『無駄なことを』

教授は笑った。

シヨコラは表情一つ変えずに大きく息を吸うと、目にもとまらぬ速さでスティックを動かし、横のボタンを押しまくった。

数十基はあった防衛兵器があつという間に灰になった。

点で狙ったというより面で圧したというべきか、とにかく人間業とは思えない手数で、シヨコラは敵のシールドをぶち破ったのだった。

『待ってくれ！ 私を殺せば、札の保管場所は永久にわからなくなるぞ！』

ジャブイーユ教授は、例の古札は手元にはないのだと告白した。それを駆け引きと判断したのか、ヘイズは話に乗っていかなかった。

「あいにく、宝探しは得意なほうだね」

教授は両手をコンソールに突いてうなだれると、うめくように口を開いた。

『かなり複雑な場所だ。ひと言では伝えられないから、しっかり記録しておくんだね』

教授はどの街の、どのビルの、どの階の、どの区画の、どの机の、どの引き出しの、どのケースの、どのポケットにあるのかを、のろのろと口にした。

ヘイズは鼻でため息をついた。

「ハメられた……かな」

教授はうつむくと、小さく震えた。

『フフ……ククク……』

突如、船が大きく揺れた。

ヘイズの前にある透けた天球儀がオレンジ色に点滅する。船にな

にか取りついたと、物言えぬファイからの警告だ。船外カメラはヘリオドールの背中に『人型機動兵器』^{アームドモビル}を見つけた。出力を極小に抑えていたのか、こちらのセンサー網に引っかからなかったようだ。

ヘイズのこめかみに汗がにじんだ。

「ベルグ宇宙戦協定で禁止されているはずだが……」

「私は軍人ではないのでね」

「ザルネル！」

「チイツ！」

ザルネルはギアを入れ、アクセルをベタ踏みして、ステアリングをきる。

アームドモビールのサーベルは空を切った。

「ハッハッハ！ そんな太っちょでどこまで逃げられるかな！」

「見た目で判断されては困るね。特にこのオジサンの方」

ヘイズの言ったとおり、ザルネルは機動力で数段劣る宇宙船を左右にふり、『戦場の鷹』と呼ばれた凶器の執拗なビーム攻撃をかわしていった。

航海長の神がかった腕も大したものだが、相手は高度なAIが人間以上の働きをする恐るべきテクノロジーの産物だ。巨人の脳はザルネルの癖を早くも学習して、ヘリオドールを追いつめていった。

猛禽と野兎の残酷なショーに興奮したのか、ジャブイーユは口走った。

「いいことを教えてやろう。君たちが探している宝物はその小鳥のなかだよ。さあ、もっと楽しませてくれ！」

ヘリオドールとアームドモビルは同じ空域をぐるぐるまわりつづけ、ザルネルの集中力と残り時間だけが虚しく減っていった。

このままでは埒があかないと、ヘイズとシヨコはコクピットから飛びだしていった。

「あ、あの……私はどうすれば」

ナオが追いかけてようとすると、ザルネルは声を荒げた。

「嬢ちゃんはずわってな！ 今のあんたは『見守る』ことが最大の仕事だ」

「私、置物なんかじゃありません！」

「ならあのバケモンがどこにいるか、しつかり見張ってな！」

ナオは隣のヘイズの席に腰かけると、透けた天球儀に張りついた中心に ヘリオドール、後部上方に赤い点が光っている。

それはわかる……。でも、位置情報の読み方がわからない。ナオはヘルプボタンを押し、コンソール上に現れたマニュアル画面を一から読みはじめた。

ビーム砲の光が、窓の右に左に走る。

ナオはかるうじて初歩を学び取った。

「右舷一七五、仰角十二、距離五百！」

ザルネルはナオの情報と、バツクミラーならぬ後方カメラの映像だけを頼りに、攻撃をかわしていった。

普段は賭場にたむろしていそうなむさ苦しいオヤジだが、このときばかりは街中でカーチェイスを繰りひろげるベテラン俳優のように、ナオの目には映った。

機体が大きく揺れた。アームドモビルが再び ヘリオドールの背中に取りついたのだ。船外カメラは引きつづき敵機の動きを追っていた。四つん這いの赤い巨人は、くすんだ黄金色のクジラを串刺しにせんとサーベルを抜いた。

「ああっ！」

ナオはなすすべもなく両手を口にやった。

そのとき、別のカメラが二つのスリムな宇宙服姿を映しだした。小さいほうは巨人にひるむことなく、バズーカのような筒をかまえている。

画面いっぱい光が広がった。

と思ったら、巨人の右腕はもう吹き飛んでいた。

『ふう、追尾装置禁止だったから、ちよっとプレッシャーだったよ』

お
」

シヨコラの明るい声。

どこかに当たればいいというのでは、思わぬ誘爆を招くことがある。古札を探すためにもピンポイントで狙う必要があった。

『おいおい、まだ終わってないぞ』

ヘイズは右手のレーザーライフルで敵頭部の機銃を壊すと、左手のずんぐりしたマグネットアンカーを発射。低い音がして円盤が貼りつくと、ワイヤーを巻き上げ、巨人に取りついた。

その間、ザルネルは舵をAエファイに任せ、シヨコラの席のジョイスティックでロボットアームを操っていた。

左右の骨っぽい手に捕らえられた巨人は、そこから逃れようと背中の中のブースターをこれでもかと噴かしまくる。

『やばいかも。思ったよりパワーあるよ』

シヨコラが言ったそばから、ロボットアームはぼろぼろと崩れだした。あと一回の噴射に耐えられるかどうか。

赤い装甲にへばりつく男は非常用開閉ボタンを探り当てると、コクピットハッチを片手で開けた。

『うー！』

とのけぞった上空に、光の糸がばつと咲き乱れた。

中は箱形のレーザーガンでいっぱいだった。建物の通路などを守る自動制御のやつだ。

その間も、アームドモビルは噴かしつつける。

『アーム腕が保たないよ！ 離れて！』

シヨコラが叫ぶ。

『フェアな契約ならとくに逃げてるさ！』

一瞬、ナオの胸がくつとつまった。フェアな契約じゃない……そうだった。この仕事の成功には何億もの命がかかっていたんだ。

ヘイズは拳銃を撃っては伏せ、撃っては伏せをくり返す。

コクピットから煙が上がり、セキュリティーの狙いが甘くなった。隙をみてヘイズは中へ飛びこみ、古札の入った透明ケースを計器

から引つpegすと、背中の中のロケットを小さく噴かした。

巨人は残った手でビームガンを男に向ける。

そこへシヨコラが砲弾をぶちこむと、大きな左手は砕け散った。爆風に押されたヘイズの姿は、あっという間に見えなくなってしまう。

巨人は両腕を失いながらも猛然とブースターを噴かす。

『げ！ 体当たりで道連れにする気だ！』

「ひっ！」

ナオは両手で顔を覆った。

「そうはいくかよ！」

ザルネルはスティック横の黄色いボタンを押した。

すると船体背部のハッチが開き、二連式の副砲が躍りでた。

男は狙いも定めずビーム砲をぶっぱなした。

二発、三発と頭や足をかすめ、巨体が宙返りしたところで、とどめの一発が背中から胴を貫いた。

ヘリオドールは最大加速で誘爆を逃れた。ＡＩファイは主たちを見事に守ってみせたが、その中に真の主は含まれていなかった。

「ヘイズさんはっ！？」

ナオは天球儀に飛びつく。

小さなヘリオドール以外、光る点はなかった。

「そんな……」

航海長が自分の席に戻ったというのに、ファイの操縦はなぜかつづいていた。数分後、ファイは無限の闇を漂っていたヘイズを見つけたし、船体下部のハッチから回収した。

通信機は爆発のショックで壊れ、救難信号は送られていなかった。ナオはコクピットに帰ってきたヘイズやシヨコラにどうなっているのか問うたが、ザルネルも含めて皆は「さあ」と首をかしげるばかりだった。ファイには他のＡＩにはない、奇妙な能力が潜んでいるらしいのだが、それがいつどのようなにして発動するのは、誰にもわからなかった。

四人が自分の席についたときにはすでに、クレーターの底は二つに分かれ、脱出艇が飛び去った後だった。契約内容に直接関係ないとはいえ、危険な男を取り逃がしてしまった。この先またどこかで鉢合わせそうな気がしてならないと、腕の立つ三人は眉をひそめた。ヘイズは透明ケースから古札を取りだすと、「初仕事の記念に見ておくかい？」とナオに手渡した。

この世に二枚しかないお札……そう思うとナオの手は震えた。珍しい札を手にすると人は透かしてみたくなるもの。ナオもその一人だった。

両手でしっかりと掲げようとするのだが、緊張して手もとが定まらない。

今にも笑いだしそうな顔で、皆はこっちを見ている。

ナオは恥をかくのがいやで、どうか収まってと手に力をこめた。ビリッ！

コクピットの面々は、時間が止まったように動かなくなった。

「ハ……ハハ……」

ヘイズがだらしなく口を開けて笑うと、針は再び時を刻みはじめた。

シヨコラとザルネルは顔を見あわせる。

「や、やばくない？」

「全市民に移住を働きかけたほうがいいんじゃないか？ 別の惑星によ」

ナオは見るものすべてが真っ白になっていった。

やっぱりあの時、橋から落ちていたほうがよかったんだ……。

6

約束のタイムリミットまであと一時間。

ヘイズたちは古札の修復に全力をかたむけたものの、破れた紙を

百パーセント元通りにすることはどうしてもできなかった。

ヘイズはうなだれた。

「ここまでだ。正直に話そう」

「で、でも、でもお！」

ナオはつぶれた灯油缶のような顔で食い下がった。

「これから避難命令をだしても間にあうかどうか」とザルネル。

「パニックになっちゃうね」とシヨコラ。

「お願い！ 強盗でもなんでもしますからあ！」

ナオはヘイズにすがった。

男はナオの頭にそつと手を添えると、力なく言った。

「わかったよ。ギリギリまで粘ってみよう」

それから彼らは、知っている限りの専門家と連絡を取りあったが、解決策はついに見つからなかった。

日付が変わり、タイムリミットを十五分まわった。

今度こそ正直に話すというヘイズの言葉に、ナオはうつむいたままうなずいた。

「つないでくれ」

正面の窓ぎわにヴィルトールの上半身が現れた。

古札を取り戻しはしたが誤って破ってしまったことを、ヘイズは告げた。

「……」

当然ながら老紳士は浮かない顔だ。

「違約金は払う。早く避難命令を……」

「それが、どうも妙なのだ」

「えっ？」

『記録によれば、厄災は四日目の午前〇時きっかりにはじまるはずなのだが……』

ヘイズたちは自分の腕時計を見た。もう二十分も過ぎている。

『そうか！』ヴィルトールは手を打った。『いやあ、まさか君たちが積年の謎を解いてくれるとは』

「？」

四人はわけがわからず眉をひそめた。

『私はこの 呪われた古札 の力を永久に消し去り、あるがままの惑星の姿を取り戻したいと、幼い頃から思っていた。こんなものに自然がコントロールされるなど、あつてはならないことだ。なにか良い方法はないかと今の今まで考えつづけていたのだが……いや、よくやつてくれた。まさかこんなに簡単なやり方だったとは』

ヴィルトールは部屋の大金庫から古札の片割れを取りだすと、ためらいもなく二つに裂いてみせた。

ヘイズたちは一瞬びくつとしたが、それからどれだけ待っても被害の報告は入ってこなかった。その代わり、小さな噴火や嵐は惑星各地で起こった。それまで呪いの力で一手に凝縮されてきた災いが、まんべんなく散ったのだらう。

数日後、再び回線をつなぐと、ヘイズは老紳士に媚びた笑みを送った。

「ま、とにかく惑星市民の命は救われたわけだし、報酬は五十パーということ……」

ヴィルトールは笑った。

『ご冗談を。契約書にはなんと書かれていたのかね』

「古札を無事に奪い返したら、成功報酬を、支払……」

ヘイズは声を萎ませていった。

『他には？』

「ないようだね」

『ではそういうことで』

男が通信を切ろうとしたとき、ナオは立ち上がった。

「ひどいじゃないですか！ 私たちは命がけで……」

ヴィルトールはさっと両手を広げた。

『もちろん！ 君たちの活躍を忘れたわけではない。スモークーと彼の忠実なる戦士たちは、伝説の救世主として永遠に語り継がれる

よう、取りはからう所存だ。しかし……」

男はぱたりと手を下ろした。

『それとこれとは別の話だ』

ほどなくヴィルトールの姿が消え、前方に青い惑星が広がった。致命的な調査不足だった。あの星は、うつろう人情よりも、動かぬ決まり事を重んじるお国柄だったのだ。

大きな魚を逃し、落胆を禁じ得ないスモーキー一味であった。

後日、ナオが破った札を、古銭マニア向けのネットオークションに出したところ、ヴィルトールと交わした契約金のちょうど半分の額で落札された。一度も市場に出回っていないなくても、こういう類の人たちはしっかり情報を集めて値をつけてしまうものらしい。

気を取り直したヘイズは、入金があつたその日じゅう、密かに録画してあつたナオの映像をくり返し船内に流しつつけた。

『お願い！ 強盗でもなんでもしますからあ！』

自室のドアにロックをかけ、ベッドにこもったナオは、枕の下で思った。

もう……後戻りできないかもしれない。

第二話 永久チャンピオン

1

ナオ・シーダースは宇宙船 ヘリオドール のコクピットで一人、相容れない思いたちの間で苦しんでいた。ついこの前まで普通の〇しをやっていた自分が、なんの因果か奇妙な強盗団で働くことになってしまった。金目のものや人の命には手をださないという変わったこだわりがあるとしても、やはり人からなにかを強奪することには賛成できない。かといって、橋の上から身を投げた冴えない女を拾ってくれた彼らに、恩を返さずして足を洗うことなど到底できそうになかった。

どれほどの稼ぎをすれば納得できるだろう。私の命の値段って…。

「どしたの？ ナオちゃん」

気づくと目の前に、カスタードクリームで化粧した少女の顔があった。

「わっ！？」

ナオはシートの背もたれにのけぞった。

両手に三段重ねのシュークリームを装備したタンクトップの少女は、シヨコラ・ビーメイ。ナオより頭半分も小さなこの大甘党は、こう見えても武器の扱いに長けた元軍人だ。

「顔ぐれえ拭いたらどうだ。ここは託児所じゃねえんだぞ」

航海長席にすわる口ひげの男は、ザルネル・ウレバスキン。キャップにスタジャンというスタイルを年中貫くこのオジサンは、どう見てもコクピットより競馬場のほうが似合いそうな感じだが、いったん舵を握らせたら人が変わったように働きだす、逃げることにかけては超一級の航^{パイロット}宙士だ。

「いーじゃん、誰にもつけてないんだから」

「バツキャロー！ 仕事場に乳臭せえ空気をまき散らすなっつつつてんだよ！」

いつもの口論がはじまった。この狭い空間のなかでしょっちゅう暴れる二人をなだめてきた一団のリーダーに、ナオは同情せずにいられなかった。

つばを飛ばしあっていた二人はやがて席を離れると、少女のほうには左脚をふり上げ、オヤジのほうは右拳を突きだした。

と、ここでコクピットの出入口がさつと開いた。

「ごふ！ げぶ！」

ヘイズ・スモーク^{ジュニア}愛用の白いスーツは、鼻血と軌跡で台無しになってしまった。

背中を丸めて自席に帰っていく二人。

若い男は白光りする奇妙なサングラスがずれていないことを確かめただけで、ナオとザルネルの間の指定席に腰かけた。

ヘイズは鼻血を拭くと、ナオに微笑みかけた。

「どう？ 少しは慣れたかい？」

「あなたの『のぞき』以外は」

「あ、あんまり根にもつとお肌によくないよ？」

「もっかい血まみれになりたいですか？」

ブーン！ ブーン！

ヘリオドールの船体がぶるつと揺れた。依頼の通信が入ったのだ。

ヘイズは真顔に戻ると、虚空に声を張った。

「ファイ、つないでくれ」

スモーク一味をサポートする人工知能（AI）、ファイは寡黙な優等生だ。彼女は一級の計算力を誇りながらも、対話機能に解析不能のバグを抱えており、先のような妙なアラームなどによってどうにかコミュニケーションをはかるうとしていた。

窓の外の宇宙をバックにエアスクリーンが起ち上がり、厳つい体をしたスキンヘッドの黒人が映った。男はアーネスト・バルボアと

名乗った。宇宙最大最強といわれる格闘技団体『UFX』の主宰だ。ヘイズは浮かない顔で言った。

「拳一つで白黒つけたいような人たちが、僕らのような小賢しい連中に用があるとは思えないけどね」

バルボアは眉根一つ動かさず訊いた。

『ソルティ・レイを知っているか？』

「ああ、子供でも知ってるさ。UFX宇宙無差別級の王座に君臨すること二十五年、先日、連続防衛記録を九十九にのばした、立ち技宇宙一の男」

「殴つてよし、蹴つてよし、無限大のスタミナ。衰えるつてことをまるで知らねえ、自他共に認める『永久チャンピオン』よ」

ザルネルがフォローした。

「ボク、そんな人知らないよぉ？」とシヨコラ。

「ニユースも見ねえでゲームばっかやってっからだ！」

ヘイズは咳払いして話をつづけた。

「で、そのソルティ・レイがどうしたつて？」

「その男が必ず勝つと決まっていたら、君はその勝負を楽しみにするか？」

「有力選手は彼との対戦を避けて他の団体に流れ、客もどんどん離れていく、と」

「半分は正しい。だが、ソルティが宇宙最強の格闘家であることは誰が見ても明らかだ。マネーや娯楽性を取るか、プライドを取るかで客も選手たちも揺れている」

「まあ、それはプロの格闘技界じゃよくあることだし……」

「と、いうのは数年前までの話だ。UFXは今や存続の危機にある。そこでだ」

「まさか……」

ヘイズのこめかみに一筋の光が伝う。

バルボアはカメラに迫った。

『チャンピオンからベルトを奪ってもらいたい！』

「ち、ちよつと待ってくれ！」ヘイズは両手を突きだした。「いくらなんでも、ソルティの相手をできる奴なんかこの世にはいないでしょ」

『そこを頼んでいる！報酬はイベント当日の全入場料ということかどうか？』

「マ、マジですか？」ヘイズは生唾を飲みこんだ。「一人当たり一万ドラ（一ドラ＝約一円）として、アリーナが満員だと十万人だから……って無理むりムリ！」

『そうか……』

黒いスキンヘッドはうなだれた。

「悪いけど、こっちも万能じゃないんでね」

『俺たちに奪えないものはない、というのが売りであり誇りであると聞いていたのだが、そうか……私はその情報屋に騙されたというわけか』

「……」

ヘイズは斜めにうつむき、くつと歯がみする。

「その話、受けます！」

ナオは立ち上がった。

「お、おい！」

「商売というのは信用が第一です。一度でもそれを失ってしまったら、たとえ目先の利益はあったとしても、そのレールは輝ける未来にはつながっていない！」

ヘイズは半顔をひきつらせる。

「ナ、ナオさん？」

「彼らは破産覚悟でお願いしているんですよ？最後の砦に追い込まれても諦めずに戦おうとする勇士を、あなたは見捨てて逃げだすというんですかっ！」

「い、いや……それとこれとは……」

『よくぞ言ってくれた！』バルボアはカメラを指さして叫んだ。『君ほど素晴らしい気概を持った戦士は、我々UFXのなかにもそう

はいるまい!』

「ありがとうございます!」

『試合の手はずは万事任せてくれたまえ。君たちは世に埋もれた猛者を雇うなり、自らグローブを手にするなりして、戦うだけでいい』

バルボアの姿が消えると、男たちは頭を抱えた。

一方、ナオは自分の意外な弁才ぶりにうっとりとしていて、しでかした事の大きさにまだ気づいていなかった。

2

「シッ! シッ!」

シヨコラはリングの上で一人、シャドウ打ちをつづける。

ソルティ・レイに対抗できる男を発掘するという案は、はじめから眼中になかった。彼を素手で倒すことは、まともな人間には不可能だと、専門家も言っている。

ナオは船倉の隅っこで、タオルを抱えながら仮設リングを見守っていた。

「じゃあ、シヨコラさんはまともじゃないっていうんですか?」

ヘイズはうなずいた。

「彼女が生まれ育った惑星環境は僕らとは少しちがう。見た目で判断しないほうがいいよ」

過酷な自然条件に適応していった結果、シヨコラの星の民族は背が小さくなった分、なんらかの能力が増した、ということなのだろう。

ナオは声を明るくした。

「勝算はあるんですね?」

「まったくなければ、君がどう言おうと断っていたさ。とはいえ、あまりに分の悪いギャンブルだ。シヨコラ一人には荷が勝ちすぎる」

「そんな……」

ヘイズは顎をさすった。

「チャンピオン陣営がアレを認めてくれるといいんだが……」

「アレって？」

「ともかく、君も準備しておくんだよ」

「な、なにをですか？」

フダイトウェア
「試合着さ」

「わ、私に出ろっていうんですかっ！」

「こういうことはチーム全体の士気が大事なんだよ。ほら、野球やサッカーのサポーターだってユニフォームを着てくるじゃないか。自分も選手になったつもりで試合に参加してほしいんだ。肌を見せるのが嫌ならTシャツで隠したってかまわない」

ナオはため息をつく。

「実はコスプレ目的だったとか、ナシですよ？」

ヘイズは手を打った。

「ああ、そういう楽しみが！」

次の瞬間、ナオは持っていたタオルを男の口に突っこんだ。

タラップを上っていくナオを、ヘイズは呆然と見送る。

「んんん（そこまで）、んんんんんん（おこることないのに）」

「シッ！ シッ！」

シヨコラはリングの上で一人、シャドウ打ちをつづける……。

3

スパarringの相手が見つかり、シヨコラはとあるジムで練習試合を重ねていた。その間、ヘイズは王者ソルティのジムへ出向いてルール変更について話しあい、ザルネルは船のコクピットで留守番しながら敵の弱点をビデオで研究、そして……。

ナオは洋菓子店の化粧箱が山盛りとなったショッピングカートのろのろ押していた。

「ハア……私、なにやってんだろ」

予定の試合会場からそう遠くない郊外の住宅地の真ん中に、巨大なアウトレットモールがある。ナオは宇宙港からそこまで、毎日のように通っていたのだった。

「いらつしやいませ」

妖精界から飛びだしてきたような、ひらひらでいっぱいの制服を着た店員が、カウンター越しに微笑んだ。

ナオはぐつと下を向くと、カラフルな冷菓子が並ぶショーケースを、見もせずに指し示した。

「これ全部一つずつ、く、ください」

「か、かしこまりました」

ひらひら娘の顔が一瞬ひきつったことをナオは見逃さなかった。無理もない。昨日もおととも、その前の日も、同じ時間に同じものを頼んだのだから。

白い箱を次々と手渡しながら、店員は訊いた。

「あの……パーティーでもなさるんですか？」

「いえ……たぶん主食でしょう」

「は？」

「ど、どうも」

ナオはレシートを手にとると、急行列車のようにカートを押していった。

少し行ったところで、親の手を離れた幼子たちが駆けまわっているのを見かけた。ナオは通路をふさぐ障害物をタイミングよく避けようとしたが……子供の動きほど先の読めないものはない。五歳くらいのそばかす娘が、口止め料としてつぶれたケーキを要求してきた。ナオは従うしかなかった。

『ショッピングモール内では走らないよう、お願い申し上げます』
館内放送が入った。

子供たちは聞く耳持たず駆けまわる。びくつとしたのはナオ一人だった。

若いママたちの冷たい視線が集まる。

いや、私も悪いですけど、その子たちはいいの？

ナオはこの世の行く末に漠とした不安を抱きつつ、明るいうへカートを走らせていった。

『ショッピングモール内では……』

4

アリーナの選手控え室は殺気に満ちていた。

相手は史上最強のキックボクサー、様子見など論外、1 Rラウンドから殺すつもりで行ってこい……などという激励は塵ほどもなかった。では、いったいなにが緊張の糸を引いているのかというと……。

「シヨコラ君……君は、女の子だ」

ヘイズは両手を広げて出口に立ちはだかった。

「うん」

シヨコラはバンデージまみれの拳を揺すっている。

「公式ファイトウェアには上下がある」

「それで？」

「そのままでは試合に出してもらえない」

「えー、だって動きにくいんだもん！」

シヨコラはブラをつけずに試合に挑もうとしていた。首にかけた大きめのタオルがうまい具合に『問題』を隠しているから今はいいようなものの……。

「古今東西、野獣のような女子レスラーでさえ、最後の恥じらいだけは捨てていなかったぞ？」

「ふーん、そうなんだ」

まるで手応えがないと言いたげに、ヘイズはため息をつく。

ザルネルがしびれを切らしたように口を開いた。

「新聞の健康欄に載っていた話なんだが、胸をさらして冷やしてるとな、デカくなるもんもならねえらしいぜ？」

「そー！」

ナオが反論しようとする、ヘイズがダツシュしてきて口をふさいだ。

シヨコラは丸い目をして訊いた。

「それ、ほんと？」

ザルネルはうなじをかく。

「ま、菓子とゲームと銃^{ハシキ}にしか興味ねえお子様^{ハシキ}にや、どうでもいいことかもしれないが……」

言い終わらないうちに、シヨコラはナオの手から奪ったブラをもうつけていた。

ザルネルが目配せすると、ヘイズはぐつと親指を突き立てた。

ケンカするほどなんとやらとは言っけれど……ナオは内心おかしくてたまらなかった。

シヨコラは青いグローブをつけて部屋をでると、三人のセコンドを引き連れ、まばゆい光の中へ歩いていった。

5

リングアナウンサーがマイクを揺らす。

『赤コーナー、二七〇パウンド四分の一、モハメドジム所属う、UFX宇宙無差別級 永久 チャンピオン、ソルティ・ザ・パーフェクト・レーイー！』

歓声とブーイングが同時に沸く。

『青コーナー、八十九パウンド二分の一、スウィーツジム所属う、UFX宇宙無差別級第一〇一位、シフォン・クラッカーボンボン・モンブラン！』

失笑の大波小波が行き交う。

「なんかうまそうだな、オイ!」「オジサンがいいところれてったるでえ!」

客のヤジに爆笑の嵐。

シフォン・モンブランことシヨコラ・ビーメイと、永久王者ことソルティ・レイは、レフェリーに促され、リング中央へ歩み寄った。生クリームのように色白の少女は、微笑をたたえながら黒い山脈を見上げる。

全身筋肉の鎧と化した大男は、伏し目がちに山裾の小動物を見下ろす。

『なんという体格差でしょう。こんな不公平な戦いはUFXはじまって以来のこと。会場の興味はソルティの百回連続防衛よりも、最短KO記録の更新にありそうだ!』

実況の声とは裏腹に、ソルティのスキンヘッドはじつとりと湿っていた。

互いにグローブを合わせ、赤コーナーに戻ると、ソルティは肥えたセコンドにひと言つぶやいた。

「今日は楽しくなりそうだ」

サウンド
1Rのゴングがなった。

両者はリングの中央で対峙した。

シフォンは出方をうかがっているのか、こちらを見据えたままなにもしてこない。

とにかく上背もリーチもない相手だ。脚をだせばどこにでも当たる。

チャンピオンはシフォンの腹めがけて『低く』脚を繰り出した。シフォンはそれをハードルのごとくひょいと飛びこえる。

「!」

ソルティはがく然とした。こいつ、獣並みの反応しやが……。空振りキックでバランスを崩したところに、シフォンは跳び拳をジャンピングブローあびせる。ソルティはかろうじて手首でブロック。

会場がどよめく。

シフォンが着地したところに、男はすかさずジャブの連打をふり下ろす。少女はすばやく体をふってこれをかわす。相手の背中が丸まったところでソルティは再びキックを出した。

強豪たちの内臓をことごとく破壊してきた必殺の中段蹴り（ミドルキック）が、こめかみ（テンプル）に当たってしまったとは……。せめて即死であってくれと、ソルティは祈った。

しかしまたしても空振り。後ろにまわったのか、相手の姿はない。獣『並み』という評価は少々甘かったようだ。

ふり向きざまに裏拳をぶち当ててやろうと、一瞬、後ろに首を傾けた。

いない！？ どこだ！

王者が前を見直したとき、シフォンの跳び拳はもう目の前にあった。

『おーっと、これは驚いた！ オープニングヒットはなんと挑戦者！ こんなことは実に二十四年ぶりです！』

どうでもいいことまでよく調べてやがる、と思いつつソルティは強引に距離をつめた。引つついてロープがコーナーに追いこめば、あのうるさい脚は使えまい。

黒いタワーの股をくぐって、シフォンはこれをかわす。男がふり返ったところに機銃のような連打。シフォンは一跳びの間に七発も放っていた。

珍事だらけの会場はやんやの歓声。

その後もシフォンは動きに動いてラウンドを有利に進めていった。精密機械と呼ばれてきたソルティの攻撃はかすりさえしなかった。ゴングがなった。

赤コーナーに戻ったソルティは、丸イスにすわると、肥えた男に低く言った。

「挑戦者は誰の娘だつて？」

「菓子屋だ」

「調べた奴を今晚、救急病院に送って差し上げろ」

「信用ある男だったはずだが……。じゃあどんな娘だったんだ」

「あれはな……戦場の血筋だ」

「なんだって？」

ソルティはジムの若手が差しだすマウスピースをはめた。

「楽しんでいる場合じゃないな」

一方、スイーツ陣営。

「ハアハア……やっぱタフだね」

汗だくのシヨコラの口に、ヘイズは水筒ボトルの水を差した。

「実際見て驚いたよ。とても五十の肉体じゃあないね」

タオルをふって風を送るナオも、同じことを感じていた。ソルティという男……なにかがおかしい。とはいえ、あの自然な筋肉美は、素人目にみても増強剤ステロイドを使っているように思えなかった。

四角いボードを手にしたきわどい水着の女が、体をくねらせながらリングを一回りする。

2 Rのゴングがなった。

6

2 R、3 Rと、挑戦者は圧倒的なスピードでチャンピオンを攪乱した。一発でも入れば試合が終わってしまいそうなものだが、縦横に飛び跳ねるスーパーボールを、ソルティは捕まえきれない。

3 R終了のゴングがなった。

ソルティが丸イスに腰かけると、すかさずセコンドは言った。

「あんな調子でやらせておいたら、万が一の判定じゃあ負けちゃうぞ、え？」

口に含まんだ水を漏斗に吐きだすと、王者は笑った。

「奴があのまま10 Rまで動けるといふのなら、俺に勝ち目はない」

さ」

「おいおい、三十年無敗の男がこんな序盤でなにを弱気な……」

「心配するな。よく見てみる」

チャンピオンは青コーナーに向けてあごをしゃくった。

「なるほど」

スイーツ陣営の頭上には、鉛色の雲がたれこめようとしていた。

「ハアハア……」

シヨコラは青コーナーに帰ってくるなり、頭からヘイズにもたれかかった。

「ハアハア……ボクの軽いパンチやキックじゃ……ポイントは取れ
ても……」

「しゃべるな。ポイントはもういい。この先、何Rまでなら逃げら
れる？」

シヨコラは男の背中を二度タップした。

ナオはたまらず口を開いた。

「そこまでもったとして、その後はどうするんですか？」

ラウンドガールが大きな胸を揺らして、しゃなりしゃなりと歩いていく。

ヘイズはリングに向けてあごをしゃくった。

「あの娘こに聞いてみようか」

「……」

ナオはヘイズの首にタオルを引っかけると、リングから引きずり下ろした。

4 Rのゴングがなった。

7

追うソルティ、逃げるシフォン。

緊迫した序盤戦とはうってかわって、4 R、5 Rと、リング上は猫とネズミの果てなき茶番劇の様相を呈してきた。会場は笑い声や怒声で沸いたが、選手たちのほうは真剣だった。

酸欠で顔は青ざめ足は酔っぱらいのようだというのに、勝負はわずかに一発で決するというのに、男の速射砲は皮一枚の差でかわされつづけた。

ソルティの腕には鳥肌が浮き立っていた。やはりこいつ……生への執念がちがう。互いのグローブがもしサバイバルナイフだったとしたら、形勢は逆だったにちがいない。

残り十秒を知らせる短いベルがなった。

シフォンはマウスピースを吐きだした。打たれたからではない。体の消耗に呼吸が追いつかないのだ。

ソルティはシフォンをコーナーに追いつめた。

窮鼠の虚ろな瞳……その奥に潜む黒い光を、男は見逃さなかった。勝負を急いではならない。生きるための本能はそうささやいたが、戦う男の本能が妥協を許さなかった。

王者は渾身の右フックを繰り出した。

腕が半分のびたところで、5 R終了のゴング。

赤いグローブの先には安堵する挑戦者……ではなく、コーナーポストがあるだけだった。

ふり返ると、少女は捨て身のカウンターキックを打ちだそうと待ちかまえていた。

ソルティはうつむき加減で赤コーナーへ帰っていく。

シフォンは真夏のソフトクリームのようにマットへ崩れた。

海で溺れた子供のようにぐったりしたショコラを両手で抱え、ヘイズは青コーナーに戻ってきた。

ナオはえぐえぐ泣きながら、タオルをリングへ——試合放棄の意思を表す——投げこもつと腕を引いた。

すかつ。空振り。

タオルはザルネルの手に渡っていた。

ナオはキツと睨んだ。

「ザルネルさん！」

「まあまあ嬢ちゃん、勝負はこれからよ」

「だって……」

「ま、見てなつて」

ザルネルにつられてリングサイドに目を向けると、ちょうど王者の肥えたセコンドがこちらへやってきたところだった。

「やれんのか？ え？」

男の問いに、ザルネルは首を横にふった。

「オプシヨンの適用を頼む」

セコンドが赤コーナーへ帰ると、チャンピオンにマイクが手渡された。

ソルティはグローブのままマイクを持つと、客席に向かって立ち上がった。

『私は……今日ほど戦いを楽しんだ記憶がない。そして今日ほど挑戦者を尊敬したこともない。残念ながら私のライバルは体格に恵まれず、拳で勝負を決する前に力尽きてしまった。だが、スイーツジムには彼女に次ぐ戦士がいると聞いている。この戦いは、はじめからフェアとは言い難いものがあつた。体格の差は人数で補ってもらいたいと私は思うのだが、どうだろう！』

会場は大歓声に包まれた。

『永久チャンピオン』ソルティ・レイは、宇宙最強の格闘技団体UFXの顔であるばかりか、もはや法律でもあつた。

「さて、ナオ君。僕は可愛いナースでいっぱい病院を希望しているから、救急車を呼んだときはよろしく頼んだよ」

いつの間にかトランクス一丁になっていたヘイズは、さっそうとロープを飛び越えた。

「え？ あの……えーっ!？」

ナオは見送った男の背中から目が離せなかった。まさか優男自ら

出撃とは……。でも彼つて、着やせするタイプなんだ……。

セコンドにまわったシヨコラが虚ろな目でナオを見上げる。

「はれ……ナオちゃん風邪ひいた？」

「へっ？」

ナオは思わず頬に手をやった。なんで熱くなってるのよ、もう！
リングアナウンサーが再び現れ、渡された紙切れを読み上げた。

『青コーナー、一六八パウンド四分の三、スウィーツジム所属う、U
FX宇宙無差別級第一〇二位、ガトー・ザ・メルティキス・フ
オン・バウムクーヒエーン！』

黄色い歓声が上がった。

「あんないいオトコ、UFXにいたア？」「ヤバす、マジヤバす！」

「キヤー！メガネ取つてえ！」

ナオはなんだか胃のあたりがじりじりしてきた。

6Rのゴングがなった。

8

ガトーことヘイズ・スモーク^{ジュニア}は、アスリート並みの立派な
体つきをしている。それでもスパーヘビー級のソルティの前に立
つと、まるで売れていない頃のお笑い芸人のようだった。

実況が声を張る。

『これは驚きました。異例のピンチヒッター、ガトー選手、なんと
白いサングラス……というべきでしょうか、とにかくメガネをかけ
たまま戦いに臨む^{のそ}つもりようです。怒りを露わにしているのは古
くからの格闘ファンでしょうか、まるで神への冒瀆であると言わん
ばかりのものすごいブーイング！』

野太い声援に応えるように、ソルティは猛然と前にでた。

ガトーは足を使って距離を取り、王者の高速ジャブを右左とかわ
していく。

ラウンドの前半は、間合いの主導権をめぐる小競り合いがつづいた。互いに小さなパンチやキックを繰り返すも、ソルティは頭をふり、ガトーは手足でブロックしてクリーンヒットさせない。互角の展開かと思われたが、体躯や経験に宿る圧力の差がしだいに目だつていき、ソルティはガトーをコーナーに追いつめていった。

右、左、右、左と重い砲弾を打ちこむ王者。

ガトーは両腕を盾にして顔を堅守する。

打ちあぐんだソルティは不意に攻撃をやめると、ニツとマウスピースをみせた。

「思ったよりやるじゃないか。誰に格闘を教わった？」

ガトーは貝になったまま答えた。

「さあね。昔のことはよく覚えていないんだ」

6Rはソルティの優勢に終わった。

ここまでの採点の結果が会場に流れた。シフォン（シヨコラ）が3Rまでにかせいだポイントは、次の3Rで帳消しになってしまった。

7Rもソルティは、その神がかったタフな体でガトーを袋小路に追いこんだ。

挑戦者の固いガードにも、王者はかまわず打ちこむ。

「そんなにそのメガネが大事か、え？」

ガトーは低く言った。

「あんたを死なすわけにはいかないんでね」

「ハハ！ 毒霧ドクキリでも仕込んであるのか、な！」

空いていたガトーの腹に、ソルティの鉄拳がめりこんだ。
「ぐ！？」

ガトーの体はくの字に折れまがった。

王者は相手の腹を執拗ボテイに狙っていった。

スタミナを失ったガトーは足がおぼつかなくなり、よたよた逃げまわるのが精一杯だった。

そして8R。

『ダウン！ 健闘したガトー選手でしたが、ついに力尽きたかった！』

ボディによるダウンは、この世で最悪の苦しみの一つであるというのが格闘技界の定説だ。

だが、無名の優男はカウント8（エイト）で立ち上がった。

ガトーはそこから驚異の粘りを見せ、酔ったカンフー使いのごとくのらりくらりと、王者のとどめの一発をかわしていった。

ゴングとともに拳の猛打をとめたソルティは、バフバフとグローブで拍手を送った。

「見事『だった』ぞ。地獄から帰ってきた男よ」

青コーナーに帰ってきたヘイズは、どかっと丸イスに腰かけると首を落とした。

「ハアハア……すまない。僕は……ここまでのようだ」

ナオはえぐえぐ泣きながら叫んだ。

「もう充分ですよ！ タオル、投げても……」

「後の2Rは、ザルネルに託そう^{ふたつ}」

「え……だって、その歳じゃ……」

ナオは失言だったかもと、左右に顔をふった。

ザルネルの姿はどこにもなかった。

「トイレ行きたいってさ」

シヨコラはアリーナの『Cゲート』を指した。上に『出口専用』とある。

「薄情者め……」

疲れ切っていたヘイズは、それ以上の悪態を口にすることはなかった。

「どうする？ 試合ホーキする？」

シヨコラの声に、ヘイズの肩がぴくつと跳ねた。

「仕方ない。タオルを……」

ナオは男の背中に例えようのない悔しさを感じ取っていた。史上最強の男を相手にまだ三ポイント負けているだけだというのに、ここで諦めるというのはなんだか……なんだかもう……。

ナオはリングサイドに下りると、ばつとTシャツを脱ぎ捨てた。

「私が戦^やります！」

ファイトウェア、迷ったけど着てきてよかった。

「だ、だめだめ！」シヨコラはぶんぶん首をふった。「お嫁に行く前にフランケンにされちゃうよう！」

「シヨコラ、早くタオルを」

ヘイズが言ったが早いか、ナオは持ちこんだタオル全部を物欲しげな観客に放り投げた。

押し合いへし合い、哀れなタオルは四つ八つと小さくなっていった。

ナオは下のジャージも脱ぎ捨てると、シヨコラに両手を差し出した。

「バンデージとグローブ、お願いします」

ヘイズが諦めたようにリングを下りると、シヨコラは言われた通りにした。

「と、とにかく、つかまならないように走って」

スイーツ陣営の様子を見ていたリングアナウンサーは、「またかよ」という顔で光の中へ上がった。

『えー、本日二度目の選手交代です。青コーナー、一〇九パウンドジャストお、スイーツジム所属う、UFX宇宙無差別級第一〇四位、ドリアン・レッドバター・ババローアー！』

今度はどんな奇人か変人かと観客はざわめく。

ナオはロープをくぐると、真っ赤になってコーナーポスト脇の二人を睨みつけた。

なんで私の体重！ しかもリングネーム決まってるし！ 血まみれ（レッド）バターってなによ！ っていうかドリアンって！ い

くら万が一だからって、そんな悪役レスラーみたいな名前にしなくたって……。

ヘイズとシヨコラはずっと下を向いていた。

9Rのゴングがなった。

セコンドの指示などどこかへ行ってしまったナオは、半べそをかきながら黒い巨艦に向かって突撃した。

ソルティは色のない表情で突っ立ったまま、女を待ちかまえている。

ぺふっ。

ナオの『渾身』のストレートが王者のボディに入った。

巨艦はびくもしない。

そして、私は砲身のような太腕で撲殺された。せめて一度くらいはお嫁に行っておきたかった。こんな哀れな私を、神様は天国へ送ってくださるかもしれないけれど、放射能をあびて腫れ上がった末開星人のような顔では、天界の人々に水晶の石を投げつけられるだけ。絶望した私は雲海の崖縁から身を投げ……。

おそろおそろ目を開けると、そこは火の海でも針の山でもなく、四角いリングの上だった。

ナオはのびきっていた細腕をすつと引く。

天地を隔てていた黒い障壁に、灰色の錆が広がっていった。

永久チャンピオンは目を剥き、マットに沈んだ。

『チャンピオン、ダウン！ これはどうしたことが、デビュー以来初のダウンだ！』

9

ドリアンことナオ・シーダースはにじり寄る。ソルティはたじと退く。

ナオはわあっと攻める。ソルティはひいっと逃げる。

9 Rは終始そんな調子で、あつという間にゴングがなった。

「ハアハア……」

ナオはただ走りまわっただけなのに、息も絶えだえだった。放ったパンチはゴング直後の一発だけ。手応えなどなかった。チャンピオンにいたいなにかあったというのか。

コーナーポスト脇でセコンドの仕事をつづけながら、シヨコラはヘイズに小さく言った。

「どう思う？」

ヘイズは赤コーナーをじつと見つめ、やがてつぶやいた。

「そうか……わかったぞ」

「えっ？ なになに？」

ヘイズが耳打ちすると、シヨコラは傷ついた顔でうなだれた。

「ひ、ひどい……ひどすぎる」

ナオは疲れ切っていて、内緒の話をとがめる気にもならなかった。ともかくソルティは調子を崩している。それだけはたしかだ。

10 R——最終ラウンド——のゴングがなった。

ナオは息のつづく限り王者を追いかけまわした。

野獣のような体のくせに虫が嫌いなプロレスラーのごとく、ソルティは情けない声をまき散らしながら逃げまくった。

そして、試合終了のゴング。

「ハアハアハア……なんとか（はんほは）、最後まで（はひほはへ）

……」

そこまで言ってナオは、駆け寄るヘイズの腕のなかへ崩れた。

「よくやった。君はもう、僕らの立派な仲間だ」

リングアナウンサーが採点結果を口にしようというとき、ナオはコーナーポストを支えにマットにすわりこんだ形で目覚めた。

憶測のさざ波が漂うなか、集計用紙を持った正装の男はリング中央で咳払いする。

『両者、ドロー！ 規定により、UFX宇宙無差別級チャンピオンは、ソルティ・ザ・パーフェクト……』

10

ナオと二人のセコンドが選手控え室のベンチでうなだれていると、依頼人のUFX主宰、アーネスト・バルボアが入ってきて皆に声をかけた。

「惜しかったな」

「違約金は……払うよ」

ヘイズは力なく言った。

「その必要はない」

「え？」

三人は顔を上げた。

「たった今、チャンピオンは引退を表明した」

ナオは事態が飲みこめず、ぽかんとするばかりだった。

一方、試合中に内緒の話をしていたヘイズとシヨコラはパツと顔が晴れた。

バルボアはつぶけた。

「9Rと10Rでみせた、チャンピオンの異状についてだが……」

「闇の禁止薬物、エイジングストップバー老化停止剤の副作用」

ヘイズは言った。

「知っていたか……」

「検査的な証拠が残らないだけに、ゲイの男にはもってこいの妙薬だった」

「ゲイ？」

ナオは思わず反応してしまった。特にBLボーイズラブが好きというわけじゃないけれど……。

属性はともかく、ソルティは王者の栄光にしがみつきたいがため

に、裏社会とのつながりを持つてしまったようだ。

「それにしても、本当に女を最前線に出してくるとは、陣営も思わなかったようだな」

バルボアはナオを見た。

「私？」

「君が試合に出ていなければ、我々はソルティの黒い疑惑に確信が持てないまま、あと二十年は彼の王座を認めつづけていたことだろう」

ヘイズがその理由^{わけ}を語った。

「エイジングストッパーは若い肉体を長く維持できる反面、極度の女性恐怖を引き起こすという副作用がある。ゲイの方々には使えるかもしれないが、普通の男にはとてもとても……」

「なんか実感ももってますね」

「いやあ、ハハハ」

ヘイズは頭をかいた。

「でも、ちょっと待つてください。そしたらシヨコラさんだって……」

……

「あの薬がまわった男が拒絶するのは、成熟した女性だけなのさ」

「うっ……」

涙目のシヨコラはブラをめくって自分の熟れ具合をたしかめようとする。

そこをナオがとっさに引き止めた。

バルボアは話をつづけた。

「君たちはソルティ・レイからベルトを奪うことができず、契約を果たせなかった。しかし、彼が引退したことで、UFXは破産の危機を免れたといえるだろう。これでチャラといきたいところだが……」

……

主宰は言いづらそうに咳払いした。

「今日の試合は実に……その……我々イベンター^{アンチ}や反ソルティ派にとつて痛快だった。そこで、ファイトマネーとして契約金の十分の

一を贈りたいと思うのだが、どうだろう」

「！」

ヘイズとシヨコラは涙目になって立ち上がると、正装の黒人男にちぎれんばかりの握手を求めた。

バルボアの背中を見送った後、ナオはふとした疑問を口にした。

「そういえば、ザルネルさんはどこへ？」

「さあ？」

ヘイズとシヨコラは首をかしげた。

一方のザルネルは……。

本当にトイレの便座でいきんでいた。

「クッ……期限切れの生菓子なんか、くすねるもんじゃねえな……」

第三話 王女とハートゲージ

1

「嬢ちゃん、あんたがウチに来てから、がらつと運が向いてきたよ
うだぜ」

ザルネル・ウレバスキンは東洋式に手を合わせ、メガネの女を崇
めた。

「そりゃあ、前よりは大きな契約が舞いこむようにはなつたんでし
ようけど、その分、危ない目にも遭つてるじゃないですか」

ナオ・シーダースはコクピット右端の指定席で紅茶をすすった。

「危ねえのはなにをやっても同じよ。複次元航法を駆使する、俺た
ちのような人種は特にな」

『複次元航法』の発明以来、人々は時空の『架け橋』を使って、宇
宙の至る所へ短い時間で行けるようになった。だが、技術の輝きは
その大きさに比例して影の部分も色濃くしていった。ちよつとした
設定ミスや、ちよつとしたプログラムのバグのせいで、宇宙ステー
ションや地上都市のど真ん中にワープアウトした船が、数万の命を
一瞬にして奪うことも稀ではなかった。

「そうまでしてお金を稼ぎたい理由って、なんなんですか？」

「ん、あー……」ザルネルは赤いキャップをかぶり直した。「そう
いうことについて、お互い干渉しないことにしてる。まあ、その
うちわかるだろうさ」

「はあ」

危険を冒してまで大金を手にする必要など、ナオにはまったくな
かったのだが、ザルネルたちにはお金ではとても買えない『借り』
があるため、日々宇宙のどこかでひいひい言わねばならなかった。

「さて、幸運の女神様よ」ザルネルはパンパンと手を打った。「お
次はもうちつと楽に、そいでもうちつと儲かる話を、どうかお一つ」

「そんなことばかり言っていると、そのうち罰が当たりますよ」
その後、ザルネルが女神の言葉を重く受けとめるようになったのは、今回の依頼がきっかけだったのかもしれない。

2

「たしか……ここのはずだが」

ヘイズ・スモーキー^{ジュニア}は、白いスーツの内ポケットから小さな端末を取りだし、電子地図とまわりの景色を見比べた。

広大な森の奥深くにぼつかりと口を開けた、小さな湖の畔。依頼人はそこで直接会って交渉したいと希望してきたのだった。

「あつちに誰かいるよお？」

シヨコラ・ビーメイは額に手をかざし、対岸を見つめた。

この肌寒い北国の秋に、少女は可愛いリュックを背負い、タンクトップ一丁ではりきっている。まるで田舎の子供の遠足だ。

「さ、寒くないんですか？」

ナオは厚手のコートをしっかり着てもまだガタガタ震えていた。

ザルネルはスタジャンのポケットに手をつこむと言った。

「こいつとは比べねえほうがいいぜ、嬢ちゃん。氷河をぶち割って生まれてきた新種だそうだからな」

「つたく、何回同じ話すればいいんだよ。こーれだからおじいちゃんはやんは……」

シヨコラは肩をすくめた。

「ンだと！」

「ボクは行軍中に落つこちたクレバスの底から、這い上がったただけだよ」

「ああ、思いだしたぜ！　そこに住んでいた雪男に育てられたんだっけな」

「勝手に話つくるなっ！」

ちっこい娘と口ひげオヤジは、互いにファイティングポーズをとった。

ともかく……シヨコラは極度の暑がりだった。

湖の向こう岸で、馬に乗った誰かが手をふっている。依頼人らしき男は供を一人連れているようで、二頭でこちらに向かっていた。

しばらくして、スーツ姿の老人と乗馬服の女が草深い小道を歩いてきた。白髪の紳士は依頼人のオーレ・ヤーゲ氏とナオは知っていたが、すぐ後ろを行く美少女ははじめて見る顔だった。

二人が並ぶようにして立ちどまると、ヤーゲは悪気のない顔で言った。

「遅れて申し訳ない。城を抜けだすのに少々手間取りましてな」

ヘイズは怒っているのか笑っているのか、口をむずむずさせている。『白い』サングラスのせいで感情は一部しか読み取れない。

「真の依頼人はそちらのお姫様のほうかな？」

金色の髪を束ねて三つ編みにしたその顔には、王族独特の気品がうつすら漂っていた。とはいえ、まだ若すぎるためか、飾り気のない乗馬服を着た限りではどこぞの屋敷のお嬢様くらいにか、ナオには見えなかった。

「ハンメル王国第三王女、カーネリアンです」

少女が言くと、ヘイズはさっと片ひざをついて頭をたれた。住んでいる国はおるか惑星^{ほし}もちがうのだから、そこまで固くなることはない、王女は男を立たせた。

「では普段通りに……。今回はどのような依頼で？」

カーネリアン王女は思いつめた表情で、スモーキー一味に歩み寄った。

「私の心を、奪ってほしいのです」

秋の冷たい風が一つ、吹き抜けた。

ガアガアと水鳥が浅瀬でたわむれる。

「つくちん！」

ナオのくしゃみで、ヘイズはようやく我に返った。

「そ、そういった相談は、どこぞの国の王子様にでもなさったほうが……」

「あなた方には奪えないものはないと聞きました」

それを言われると話を聞かないわけにはいかない。

王女の教育係を務めるヤーゲが事情を語った。

「事はよくある世継ぎの問題です。我らハンメル王国には三人の王女がおりまして、通常ならば第一王女が女王の位を継ぐはずなのですが、これがどうも、その……」

老人が渋い顔で言葉を濁そうとすると、ザルネルが代わりに言っ
た。

「どうしようもねえアホで困っていると」

無礼な発言に、ヘイズとナオはキツとにらむ。

ザルネルはどこ吹く風と、タバコのを赤くした。

「ま、ありていに言えば、そういうことですな」

教育係は冷たく言った。

第二王女もこれまた手のつけられない遊び人で、ちょっと目を離すともう、国外の盛り場を供もつけずにほったき歩いているという。女王は古くからのしきたりを重んじる性格で、世継ぎには当然ながら長女を推していた。それに対し重臣たちは、国の将来を思えば、気立てもよく俊才でもある末娘カーネリアンしかいないと力説していた。このままでは王位をめぐって血みどろの争いを引き起こしかねないと、依頼人たちは顔を曇らせるのだった。

カーネリアンは言った。

「私は女王の位などには興味ありません。街を行き交う人々のように、自由に生き、自由に恋をして、子を産み育て、そして王国の土へと還りたい」

ナオは王室の恥を事もなげに語る教育係や、それをとがめようとしない王女にいささか疑念を抱いていた。

「あの……これはあくまで素人の常識ですけど、よほどのことがない限り、王女ほどの位の方が一般庶民の人と結ばれることはない」と

思うのですが……」

乗馬服の王女は黒い帽子をとって老人に手渡した。天の恵みを受けた光の草原が風に揺れ、その下の青い瞳がナオを見据える。

「これは我が王国独特の風習なのですが、王位継承権第三位以下の王女が平民の男と恋に落ちてしまった場合、その愛が嘘偽りでないことを証明できれば、その人は王族から抜け、庶民として生きることとを許されるのです」

王族でなくなれば権力争いで命を狙われることもない、か……あまりにロマンチックな異郷の文化に、ナオは頭がくらくらしてきた。でも本当だろうか……少し意地悪な質問を試してみたくなった。

「その愛が本物であると、どうやって証明するのですか。演技を磨けば嘘をつくことだってできると思いますけど」

王女は微笑んだ。

「おつしやる通り、おとぎ話のように、情に訴えるだけでどうにかなるほど現実には甘くはありません。そこで、これの登場です」

カーネリアンは懷からハート型のペンダントを取り出した。

「これはハートゲージという、王家に代々伝わる秘宝です。持ち主の愛情の値をメーターのように表すことができます」

狐につつまれたような顔でいるスモーキー一味に、王女はクスと笑いかけた。

「ではまず、ヤーゲで試してみましよう」

王女は教育係を見つめた。水晶のように透き通っていた貴石は、下の方から少しずつピンク色の光に染まっていき、やがてちょうど半分のところで落ち着いていた。

「五十パーセント……身に余る光栄でございます」

ヤーゲはハンカチをそつと目にやった。

ハートゲージは半分も光れば良いほうで、友愛や敬愛の値としては最高であることを意味していた。

カーネリアンは次にヘイズやザルネルを見つめた。ハートの下っ端がちよつと赤くなっただけだった。ハートゲージが反応するには

多少なりとも持ち主が育んだ愛情が必要であると、少女はつけ加えた。

ブロック型の栄養食をもさもさ食べ終えたところで、シヨコラがようやく口を開いた。

「よーするに、それが真っピンクになる人を探せばいいってこと？」
王女はうなずいた。

「もし私の夢を叶えてくださるのなら、私の宝物のうち最上のもものを選びすぐっておきましたので、それを差し上げます」

ヤーゲは懷から小さな宝石箱を取りだし、フタを開いた。

「こ、これは！」

ヘイズの白メガネが光った。

『ボーデの涙』……今知られているなかでは宇宙で五指に入る大きさの、世にも珍しい菖蒲色の（アイリス）ダイヤモンドだ。

「い、いいのかい？ お釣りはでないよ？」

王女は満面に笑みをたたえた。

「これで自由が買えるのなら安いものです」

無論、成功報酬なので宝石はヤーゲの預かりとなった。

老先生はハンカチをふって王女を送りだした。

「カーネリアン様、お達者で」

3

スモーキー一味とカーネリアン王女を乗せた宇宙船　ヘリオードー
ルは、『いい男』を探して星から星へと飛びまわった。若き王女はその美貌に加えて胸の目だつ体型をしていたので、地味な色合いのワンピースに着替えても、ナンパしてくる男が後を絶たなかった。まともだと思った男には、素性を隠して近づいたことも何度があったが、肝心のハートゲージはうんとともすんともいわなかった。

「ハア……城の外にはこんなにも男の人がいるというのに、上手く

いけないものですね」

王女は紅茶を口にした。

『王女の殿方選りご一行様』は、惑星フォークスのとある海辺の街を訪れていた。そこは縁結びの街として古くから知られる観光地で、一行は期待を高めてやってきたのだが、やたら坂が多くて王女が歩き疲れてしまったので、高台のオープンカフェで一休みすることにしたのだった。

ワイシャツ姿で昼食をとるビジネスマン風の男、石畳の道をぶらつく少年、古ぼけたビルの上階の窓からのぞく禿頭。皆、カーネリアンを見ている。美人なら他にもたくさんいる。男は鈍感だとよく言われているけれど本当だろうか……あまり男を知らないナオにはわからないことだった。

王女の隣にすわっていたシヨコラが、不意にもじもじやりはじめた。

「お、おしっこ！」

少女はドリブルの名手のごとく、客や店員を次々とかわしながら、小さなビルのなかへ駆けこんでいった。

それを見送ったヘイズは、空いた席にひよいと腰をずらした。

カーネリアンはカップを置いた。

「なにか？」

「お姫様、あなたは重要な人物を見逃している」

「重要な人物？」

ヘイズと王女はしばし見つめあった。

王女はそのまま紅茶を口にする。

優男は髪をいじったり、スーツの襟を正したりと、そわそわはじめた。

王女はカップを置くと手を打った。

「ああ、そうでしたね」

そう言いつと、懷からハートゲージを取りだし、改めてヘイズを見つめた。

貴石は下から四分の一ほどしか光っていないとわかった、ヘイズはしょんぼり黙りこんでしまった。

この寸劇を見ていたザルネルは大笑い、ナオも思わずコーヒーを嘔いてしまうところだった。

「じゃあ次は俺だ」

ザルネルは珍しく頭のキャップをとると、記念写真でも撮るかのようニツとピースした。

カーネリアンは視線を落とした。

「ごめんなさい」

今度はヘイズがこらえきれなかった。ナオはタイミング悪くむせてしまった。

「マ、マジに答えなくてもいいじゃねえかよ！」

ザルネルは赤くなると、キャップを深くかぶり直した。

そのとき、トレーを手にした給仕の男が近づいてきて言った。

「お下げしてもよろしいでしょうか？」

ナオはむっと男を睨んだ。ランチも飲み物もまだ残ってるじゃない。たしかに昼時で混んではいるけれど、それにしただってこの態度はひどすぎる。なにか言ってやりたい、けど……この人なんか……恐い。

カフェの店員というより地下カジノのディーラーといった風の銀髪の男は、ベストのポケットから身分証明^{バッジ}を取りだすと、静かに言った。

「星間警察機構（ISPO）のロッシだ。ハンメル王国第三王女誘拐の罪で、おまえたちを連行する」

ナオの後ろの席にいた長い髪の女がふり返り、スカーフをかぶせた右手を突きだした。

ヘイズは小さく両手を挙げると、ぼそとつぶやいた。

「教育係め……しくじったな」

王女の不在を女王にどう言い訳するか……ヤーゲ氏はこの重任を果たせなかったようだ。

薔薇柄のチュニツクを着た浅黒の女は、カールした赤毛をかき上げると楽しげに口を開いた。

「城までお送りしますので、こちらへ」

王女はがっかりした様子で席を立った。

ロツシは残りの三人に店を出るよう命じた。「おまえたちは包囲されている。余計な仕事をさせるなよ」と脅しながら、男はヘイズたちを人気のない路地裏へ追いこんでいった。

ナオは恐怖に震えていた。捜査官のなかには正当防衛と称し、一味のうち重要でない者を次々と射殺していく過激なサディストがいる、と聞いたことがある。この後、真つ先に風穴を開けられるのは……。

ナオの口から今にも命乞いの言葉が飛び出そうかというときだった。

ヘイズはこらえるように笑った。

「なにがおかしい!」

ロツシは不意に立ちどまると、古びたりボルバーの撃鉄を引いた。

「王女にはいくらかかってるんだい?」

「な、なんのことだ」

「ISPOの刑事は鉛弾^{デカ}なんか使わねえよ」

ザルネルも笑った。

「チツ……なにか忘れてると思ったが、銃^{ハジキ}のことだったか。まあいい、時間は稼がせてもらった。王女は無事に送り届けてやるから安心しておけ」

強面の男は厳つい銃をかまえつつ、表通りのほうへ退^ひがっていった。

なんだかわからないけど、とにかく助かった……ナオは灰色の壁にどうともたれかかった。

ザルネルは曲がったタバコを一つ吹かすと、言った。

「賞金稼ぎ……か」

バリス・アズーリは高らかに笑うと、偽造したバッジをコンソールへ放った。

「あれが噂のスモーキー一味だつて？」

宇宙船 ペリドット の機体をモニターでチェックしていたヴィアン・ローズは、近所のボス猫のように低く言った。

「浮かれるんじゃないよ」

「なんだよ、怖い顔しちゃって」

「なにか…… なにか大事なことを忘れている気がする」

「王女様は客室に閉じこめたし、連中はこの船を知らない。手落ちはなかったと思うが」

アラートが短くなった。エアスクリーンが起ち上がり、そこに映ったおかつぱ頭の女が山も谷もない表情で言った。

『発進準備、完了しました』

ガーネットは ペリドット にプレインストールされてきた標準的なAIだ。人に近い思考をもち会話する彼女は、拡張プログラムでさらに人間らしくすることもできたが、この船に女は一人で充分よとヴィヴィアンが断じたので、初期設定値のままと^{デフォルト}なった。

バリスは席につくと操縦桿を握った。前方の窓には宇宙船がずらりと横並びした姿、その向こうに地上型宇宙港の滑走路——軍用船以外は港内での垂直離着陸が禁止されている——が広がっている。

ペリドット は発進船の行列につくべく、宇宙船の群れからゆっくりと抜けだし、九十度右に曲がって通路に入った。

そのとき、AIガーネットが鋭く言った。

『船内に不審者発見！ 船倉を映します』

ガーネットの画が小さくなり、別のエアスクリーンが拡大していく。

「あーっ！」

ヴィヴィアンが突きだした人差し指の先には、コソ泥のようにつま先を立てるシヨコラの姿があった。

女の殺気を感じたのか、カメラに気づいたシヨコラは舌を出した。

『もう見つかった？ んじゃ、こっからは競走ね』

バリスとヴィヴィアンは、金づるである王女を確保することに気をとられ、まんまる顔の小娘が一人席を外していたことをすっかり忘れていた。

二人がコクピットを飛びだし、狭い通路を駆けて客室前にたどりついたとき、シヨコラはすでにドアを小型爆弾でぶち破り、王女の手を引いて逃げようとするところだった。

「野良猫め！」

ヴィヴィアンは赤鬼のような顔でハンドレーザを連射する。

「よせ！」バリスは銃身をつかんでそれを制した。「王女に当たったら、ギロチンどころか火あぶりの刑だぞ！」

「ク……」

ヴィヴィアンは歯がみして銃を収めた。

「まあ落ち着け。おそらくあのガキは、トイレを出した後、異変に気づいてそれを物陰でやりすごし、おまえを尾行^つしたんだろう。そして船体下のハッチを開けて中に入ろうとしたとき、すばやく忍びこんだ」

「解説なんかいいから！」

駆けだそうとする女の手首を、バリスはつかんで引き止めた。

「忘れたのか？ ハッチは俺たちにしか開けられない」

「そ、そうだった……」

ヴィヴィアンは眉間の険を緩めた。

「あれは宇宙機雷にだって耐えられる装甲だ。万が一あのガキがプロの戦争屋だったとしても、そう簡単には逃げられやしな……」

突然、耳をつんざく爆音がして二人はよろめいた。階下の船倉からだ。

分厚い鋼製扉を開けると、二人はタラップを駆け下りていった。上ってくる煙をかき分け、船倉に下り立ったバリスは、あり得ない光景を前に力なく膝をついた。船体下の開閉口にぽっかり円い穴が空いていたのだ。

ヴィヴィアンはどんよりした瞳で言った。

「機械化人の前線基地をたった一人で潰した英雄が、一味に紛れてるって噂……まさか、あの小娘のことをいってたワケ？」

バリスは四つん這いに両手をついた。

「この装甲……高かったのに……」

5

宇宙港に駐^とめてある　ヘリオドール　に戻ったヘイズとザルネル、そしてナオはシヨコラの帰りを待っていた。通信機が故障したのか、連絡もなければ位置情報も入ってこない。念のためにカーネリアン王女にも同じものを持たせてあるのだが、故障でなければ、連れだったあの赤毛の女に見つかって壊されたにちがいない、やはりなんの音沙汰もなかった。

三人はコクピットの窓や船外カメラの映像から、不審な船が飛び立ったりしないかと、滑走路を見張っていた。腕時計に仕込んだカメラでヘイズが密かに撮った写真から、あの二人はバリスとヴィヴィアンという、その道ではちよつと知られた賞金稼ぎであることが判った。ただ、どういうわけか、彼らの船　ペリドット　の情報はネット上ですぐには見つからず、船の発見は勘に頼るしかなかった。ナオは自分の席でそわそわしていた。バリスから解放されてカフェに戻ったとき、シヨコラの姿はなかった。彼女は『わかっている』から探す必要はないというので、黙って従ったけれど……。

「そんなに心配しなくてもいい。たぶん、僕らの見張りは取りこし苦勞に終わるだろう」

ヘイズは微笑んだ。

「それはどういふ……」

「シヨコラのアレは警報みたいなものだからね」

わけがわからず、ナオは眉をひそめた。

そのとき、船外カメラは駐船場の通路を走る二人の影をとらえた。
シヨコラとカーネリアンだ。

「ほうらね」

誇らしげなヘイズ越しに、ナオは逃げる二人の窮地を見ていた。

「あ、あの……笑ってる場合じゃないと思いますけど？」

「へ？」

ヘイズは窓のほうへふり返る。

シヨコラと王女のさらに向こう、レーザー銃を乱射しながら、ものすごい形相で追いかけてくる銀髪の男がいた。

カメラが音声を拾う。

『弁償しやがれ！ クソガキが！』

バリス・アズーリだった。

ヴィヴィアン・ローズはそのずっと後方、ブチギレた男の勢いについていけず、諦め顔でたらたら走っている。

王女の脚がおぼつかず、今にも追いつかれそうだったが、ザルネルがタイミングよく船体下のハッチを開閉して二人を拾い上げ、狂^{バカ}戦士^{サイカー}を閉めだした。

『地獄の果てまで……』

男が捨てゼリフを吐こうとしたときだった。

小さくうなった ヘリオドール は、滑走用の車輪をのろのろ走らせた。

『こ、こら！ 危ねえじゃねえか！』

ほんの五秒前までシヨコラを撃ち殺そうとしていた人がよく言うわ……ナオはぐったりとシートに沈んだ。

惑星フォークスを後にした一行は、宇宙空間を漂いながら、次は

どの星域へ行くべきか考えていた。

カーネリアン王女はなかなか寝つけないといって、ナオを客間のベッドサイドに呼びつけた。恐ろしいことがつづいたので心身の興奮が冷めないのだろうと、はじめは同情的になっていたのだが、王女の饒舌ぶりを見ているうち、ナオはしだいに違和感を覚えるようになっていった。

どうにか王女を寝かしつけたナオは、コクピットに戻ってシヨコラの顔を見たとき、ふと思いだしたことがあった。彼女は危険を察知すると『おしっこ』に行きたくなるそうだが、『普段』はどうなのだろうか。

ヘイズとザルネルが王女にふさわしい男について談義している一方、シヨコラは相変わらず骨董携帯ゲームデイエスフアイトDSFに夢中だった。ナオが自分の席についたとき、少女は突如としてゲーム機を二つに閉じ、猛ダツシュで部屋を出ていった。

「もる！ もるう！」

ナオはびくつとして辺りを見まわした。危険はやってこなかった。あーもう、なんてまぎらわしい特技なのっ。

脱力したところで、ナオも下腹が急にむずむずしてきた。王女の世話に集中していて気づかなかったのだろうか。まずい。今すぐ行かないと……。

「もー！」

ナオは恥ずかしい言葉をとっさに手で押さえつけると、トイレ目指して駆けだした。

ここは名もなき惑星の赤茶けた峡谷。この世に人類が誕生するずっと前から、そしてこの世から人類がいなくなった後もずっと、変わらぬ静寂がすべてを支配する、はずだったのだが……。

狭くうねった谷の空中を、二機の宇宙船が爆走していった。

先に行くのはおなじみ ヘリオドール、そのすぐ後ろを草色の
鍔やじりのような ペリドット がびたりとつけている。

王女を奪還し一度は巻いたと思った賞金稼ぎの二人は、ヘイズたちがどこにワープアウトしてもしつこく追ってきた。ナオとシヨコラは王女の体を念入りに調べたが、敵の発信器は見つからなかった。なにか飲み物を口にしなかったかとヘイズが訊くと、赤毛の女がハーブティーをすすめるので一口含んだと王女は答えた。ヘイズは「やられた」と嘆いた。おそらくそのお茶には、量子信号を発するナノマシンが含まれている。王女の体から老廃物として出ていくまでは、どこへ逃げても似たようなものだ。そこで腕に覚えのある航海長ザルネルが、莫大な出費に怒るバリスに対し、一計を案じたというわけだった。

万里の峡谷も中間点にさしかかった頃、切通しのような左右の絶壁がさつと広がっていき、見晴らしが良くなった。

ペリドット はすかさずビーム砲を乱射する。

ヘリオドール はやたら運動神経のいいデブトレントのごとく、
ずんぐりした図体を自在に操ってこれをかわした。

テール・トウ・ノーズ——前のマシンの後部と後ろのマシンの先端が触れそうなほどの接近戦——をくり返す二機。大きな直線区間ストレッチを駆け抜けた後、サーキットのシケインのような鋭いS字の谷にさしかかったとき、事故は起こった。

左ウイングが岩壁をこすり、ペリドット は大きくバランスを崩す。

やがて、遙か下界の涸れ川ドライリバーに砂塵のドームができあがった。

「あばよ、イタリアの『瞬間湯沸かし器』君！」

ザルネルはシフトレバーを上げる。

ヘリオドール は雲一つない空へ舞い上がった。

カーネリアン王女の殿方探しは突如として終わりを告げた。王女のハートゲージが真っピンクに染まったのだ。そのお相手は帝国の王子でもなく、富豪の息子でもなく、銀幕の貴公子でもなければ、リングの若獅子でもなく、なんと競馬漬けのヒゲオヤジだった！

席にいたザルネルは競馬新聞をパサリと取り落とすと、コクピットの小さな広場に立つ王女に言った。

「じよ、冗談だろ？」

「いいえ、ほら」

王女はザルネルを見つめる。

ペンドアントの光メーターは見事にふり切った。

賞金稼ぎを荒野に葬った——あれでくたばるとは誰も思っていないが——ザルネルの活躍を、カーネリアンは客間のモニターですつと見守っていた。王女は胸が熱くなるのを感じた。ハツとしてペンドアントを取りだしてみると、スタールビーのように輝いていたというわけだ。

「いきなりそんなこと言われても……なあ」

ザルネルが熱い視線を送ると、ヘイズは助け船をだした。

「彼のストライクゾーンは、少なくともハタチよりは上だからねえ」

シヨコラは串団子をもぐもぐしながら言った。

「^{にい}ヘイ兄が相手だったらよかったのにね。ついてるもんついてれば、青くても萎びてても、もがつ！？」

ヘイズは飛んでいって少女の口を封じた。

王女は潤んだ瞳で声を震わせた。

「ザルネルさん、私はあなたのことをまだよく知りません。でも、この秘宝ハートゲージは未来を含めた真実を語ります。私はあなたに身も心も捧げるつもりでしたのに……」

足もとにぼつぽつと落ちるものがあった。

ザルネルは席を立った。

「い、いや、その、全然ダメってわけじゃねえんだ！」

「ほんとう？」

王女は顔を上げた。

「その……あんたはまだ若すぎるっていうか……もう少しその……男つてえものを……」

「では成人するまで私が待てば、もらっていただけということですね？」

「あ、いや、それは……」

「うれしい！ 愛する夫と煌めく自由を同時に手に入れられるなんて！」

カーネリアンは両手で顔を覆うと、感激のあまりしゃがみこんでしまった。

ヘイズは呆然とする中年男に近づくと、小声で言った。

「水ものの女より、炎のギャンブルって言ってたクセに」

「ど、どうするよ？」

ザルネルは涙目で訴えた。

「部屋はあんたのを二人で使えばいい。ああ、でも夜中に大きな声をださないでくれよ？」

「そういうことじゃねえって！」

「いいじゃないか。王家の女といったって正式に『元』のお墨がつくんだから」

「そういうことでもねえ！」

感涙に疲れてふらふらになった王女を、ナオとシヨコラが客間に連れ立っていった。

コクピットの自動ドアが閉まると、ヘイズはすかさず言った。

「僕の勤ではあのお姫様、たぶんすつごく嫉妬深いよ？」

「だから、どうするよ！」

ザルネルは一人の女に縛られて満足できるタチの男ではなかった。だが、これほど若くて素直で美しい妻は、世界中の女を虜にする笑顔を持っていたとしても、銀河中に散らばる黄金を集めたとしても、

なかなか手に入るものではない。崇拜する幸運の女神ナオがもたらしたであろうこの縁^{えにし}、結ぶべきか、結ばざるべきか……。それからしばらく、ザルネルはタバコを口にするのも忘れて、ため息ばかりついていた。

8

ヘリオドール はハンメル王国空軍の警戒網を巧みにかいくぐり、人気のない休耕地へじかに着陸した。船を下りた一行は、鬱蒼とした森を歩いて横切り、先日出会った小さな湖の畔に抜けると、城の裏門へつづく小道へ足を向けた。

宇宙港に車を呼びつけて、堂々と入城するわけにはいかなかった。女王はカーネリアンを誘拐されたと思いこんでいる。説明する間もなく大騒ぎになって、この縁談はなかったことになるだろう。そんなことになる前になんとかして城へ忍びこみ、見事に染まったハートゲージを、女王の目に直接触れさせなければならなかった。

ところが一行のもくろみは、木陰から現れた十数人の衛士たちによつて阻まれてしまった。

銃で武装した男たちが一行を取り囲むと、王女はザルネルの傍らで震えはじめた。

団長らしき角刈りの男は言った。

「素直にカーネリアン様を引き渡せば、命だけは助けてやろう」
ヘイズは肩をすくめた。

「僕らはお姫様の依頼で、一緒に夫^{ダンナ}の候補を探していただけだよ」
「戯れ言をぬかすな！ 要求はなんだ！ 我が国に恨みでもあるのか！」

「だからあ……」
そのときだった。

王女はザルネルのもとを離れ、衛士団長のほうへすたすた歩きだ

した。

「力、カーネリアン様？」

団長は眉を段にする。

王女は懷からペンダントを取りだすと、ペロツと舌をみせた。

「ごめんなさい。ちよつとやりすぎたわ」

「またそんなオモチャで！」団長は額に手をやった。「女王に知れたら、ただ事ではすみませんよ！」

「少なくとも一ヶ月は、北の塔のてっぺんで暮らさねばならないでしょうね」

少女は事もなげに言い放った。

ヘイズとザルネルは魂を抜かれたように立ち尽くしている。シヨコラはしゃがんで足もとの虫と戯れている。そして……。

ナオは渴ききった口からどうにか声をもらした。

「あ、あの……」

「楽しかったわ」

少女の笑顔がすべてを物語っていた。

あの娘は単に、王室の堅苦しい毎日への気晴らしがしたかっただけなのだ。いつの間にか現れた教育係のヤーゲによれば、次期女王は賢明なる第一王女が来年の春にも即位することになっていたし、カーネリアンの婚約者も五歳のときに決まっていた。幸いなことにその王子様とは幼い頃から仲が良く、許嫁のことで悩んでいたわけでもなかった。

王女は騙していたことを詫びると、約束だった菖蒲色の（アイリス）ダイヤモンド『ボーデの涙』を、このとき唯一まともに話ができそうなナオに手渡した。

ナオはむっとして、最後になにか言つてやろうと息を吸いこむ。そこへカーネリアンの手がさつと伸びた。

「荒野の追いかけつこのとき、彼にちよつとだけときめいたのは、本当よ」

ナオはちらとザルネルを見た。

今はどう言葉を尽くしてなぐさめても無駄だと思った。

王女たちと別れたスモーカー一味は、森の外にヘリオドールを放置したまま、城下町の歓楽街にくりだし、ザルネルのくだ巻きに朝までつきあうことにした。

哀しき宴もたけなわの頃、ナオたちはべろべろになりながらも、ゲットした超希少ダイヤモンドの時価を調べるべく、酒場の隅っこにあるネット端末を囲んだ。目的のサイトがなかなかつながらず皆がイライラしていると、画面右下に緊急ニュースの動画が割りこんできた。

『本日未明、惑星ハンメリアンをとりまく四つの衛星の地下深くで、アイリスダイヤモンドの大鉱脈が発見され……』

第四話 夢魔ローグバラン

1

ここは惑星シャモンのある総合病院。

ナオ・シーダースは『4401』と書かれた病室の前に立っていた。依頼人パトリック・チャノは、このドアの向こうで救世主たちの到着を心待ちにしていることだろう。東洋人の血を引く生真面目そうなその青年については、特に注意すべきことはなかった。問題は患者である彼の恋人、リディア・ペトレスクのほうだ。

「どうしたのさ、早く開けよう」

すぐ後ろにいたヘイズ・スモーキー^{ジュニア}は、いそいそとブロンドの髪を整えはじめた。

ナオは『白い』サングラスの男をじろりと睨んだ。

「好みなのはわかりますけど、リディアさんにはちゃんとした婚約者がいるんですからね！」

「式を挙げるまでは、わからないさ」

ヘイズは懷から手鏡を取りだすと、左、右、正面とキメ顔をつくる。

ナオはため息をついた。会って話がしたいと依頼人から通信があった後、交渉役を買ってでたのは正解だった。我らが代表ヘイズは才気あふれる仕事人なのだが、いい歳して中高生のように一年じゅう発情しているという、困った体質の持ち主だった。ナオは以前、この白スーツ男に浴室をのぞかれたことがあったのだが、今でもどこかに小さなカメラが隠されているのではないかと、服を脱いだときは警戒せずにいらなかった。

「いくら美人たってよ、植物状態じゃあなア」

ザルネル・ウレバスキンは、ひそかに吸っていたタバコを携帯灰皿に突っこむと、スタジャンのポケットに隠した。二つとなりの病

室を出た若い医師とナースが、デートの約束を交わしながら通りかかったのだ。

「僕の顔を見たら、彼女の頭のなかに雷が落ちて、正氣に戻るかもしれないだろ？」

「ハ！　たいした自信だぜ」

シヨコラ・ビーメイは一階の売店で手に入れた、今どき珍しい極厚マンガ雑誌を閉じると、表紙の魔法少女そっくりな丸い顔を上げた。

「ねえ、人間なのに植物ってどういうこと？」

「てめえは黙ってそれでも読んでろ」

ザルネルは言い放って、すぐに背を向けた。

「教えてくれたっていいじゃん」

少女はむきだしの細腕で男の上着の裾を引っばる。

「バツ！　触んじゃねえ！」ザルネルはシヨコラを押しのけると、古びたスタジャンを大事そうに着直した。「医学マンガでも読んでりゃ、そのうちわかるだろうよ」

シヨコラは再びマンガ誌を開いた。

「……あ、ほんとだ」

悶着がおさまったところで、ナオは病室のドアを開けた。

医療機器に半ば包囲されたカプセル型のベッドが一つ。中は透明な液体で満たされており、色白の美しい女がパジャマを着たまま底に沈んでいた。

カプセルのそばに若い男が一人、丸イスにすわり、悲しげな顔で物思いに耽っている。一重まぶたの切れ長の目。依頼人のパトリック・チャノだ。

パトリックはハツとして顔を上げると、小さく微笑んだ。

「ああ、すいません。気がつかなくて」

ナオは挨拶もそこそこに本題を切りだすことにした。ヘイズの視線が、眠れる水の妖精、リディア・ペトレスクに釘づけたからだ。

あんな獣ケタモノに交渉を任せたら、なんとかして彼女が手に入るよう、奸

知をめぐらすに決まっている。

「ご依頼の件ですけど……リディアさんから夢を奪ってもらいたい、
というのはいったいどういうことでしょうか？」

依頼人は壁ぎわの長イスを四人にすすめると、大きなため息をも
って悲話の幕を上げた。

「僕とリディアは三年前、この街で知り合いました。僕は商社の営
業で、彼女は取引先の受付嬢。特に変わった出会いではなかったと
思います。つき合いはじめてからちょうど一年、幸せな時間を過ご
してきた僕らは、結婚の約束を交わしました。それから数日後のこ
とです。リディアが突然、植物状態になってしまったのは」

パトリックは街や郊外の医者という医者を訪ね歩いた。名医と聞
けば、惑星の裏側まで飛んでいたりもした。だが、返ってきた答
えはただ一つ、現代の医学ではどうにもならない、というお決まり
のセリフだった。

「僕らがいつたいたいなにをしたっていうんです！ 八百万の神にだっ
て、恨まれる覚えはない！」

「お、落ち着いて……」

ナオはそうなだめるのが精一杯だった。

「ああ、すみません」

男は両手で顔を張って一息つく、話をつづけた。

医者は頼りにならないと悟ったパトリックは、ネット世界に身を
投じ、どこの誰とも知れぬ者たちに手当たりしだい聞いてまわった。
そんなある日、おまえの噂を聞いたといって、フードをかぶった口
ーブ姿の化身がたまり場に訪ねてきて、妙なことを口走った。

「その女はある魔物の名を口にしてはいなかったか、と彼は言うん
です」

「魔物……」

ナオは眉をひそめた。科学の話も苦手だけれど、そういう類の話
もあまり本気で聞く気にはなれない。

「たしかにリディアは、どんな呼びかけにも反応しないというのに、

たった一つだけ、誰かの名前らしき言葉を何日かに一度、口にしていた」

ローグバラン……その名を耳にしたローブの男は、かすかに口もとを緩めた。

「それは夢魔^{むま}というやつだ。女の悪夢のなかに入って、その名を与えられたモノを倒すことができれば、女は目覚めるであろう。ただし！」

「た、たただし？」

パトリックの迫真の口ぶりに、ナオはすっかりローブの男を前にした気分になっていた。

黒い髪の青年は立ち上がると、医療カプセルに両手をついた。

女の口から小さな泡が一つ、ゆらゆらと上っていく。

「夢魔は……取り憑いた人の記憶に、深い根を張りめぐらせるのだそうです」

「つまり」ヘイズは言った。「夢魔を倒すということは、すなわちリディアの記憶も多くが失われるということ」

パトリックは小さくうなづく。

ナオは叫んだ。

「そんな！ それじゃ、もし私たちが依頼を果たしたとしても……」

「いいんです。リディアが悪夢から目覚めてくれるなら、それでいい」

「でも、下手をしたらあなたが誰なのかだって……」

男はナオを見つめた。

「ナオさん。あなたは心の底から、誰かを愛したことがありますか？」

「そ、それは……」

ナオは小さく萎んだ。それを言われるともう、話をつづけられない。

ヘイズは白メガネのブリッジに手をやった。

「確認しておくけど、僕らの相場は安くはないよ？」

「そのことなんです……」

パトリックはいきなり土下座すると、実は分割でしか払えないことを深く詫びた。

「ダメだね。この話はなかったことにしよう」

「ヘイズさん！」

ナオは思わず怒鳴った。

「たとえ小さな事でも、人を騙すような男のために働く気はないよ」
ヘイズの冷たさに腹を立てながらも、ナオはその言葉のなかに一つの光明を見いだした。

「じゃあ、女のためなら働くんですね？」

「う……」

ヘイズはしまったという顔をしてため息をついた。

「パトリック、君はなぜそこまで彼女にこだわるんだ？」

男は伏せていた顔を上げた。

「その理由はさっき言いましたよ」

「じゃあたとえば、リディアちゃんが君のことを思いだせず、僕と結ばれてもかまわないというわけだ」

「彼女がそう望むのなら」

ヘイズはイスから立ち上がると、ニツと笑った。

「オーケー。じゃあ、しっかり『長生き』してくれたまえ。さあ諸君、仕事だよ」

白づくめの男は上機嫌で病室を出ていった。

「分割かよ」とザルネルがぼやきながらそれにつづき、マンガを読み終えたシヨコラがその後に行く。

ナオは立ち上がると、依頼人に向けていびつな笑顔を送った。
「ご心配なく。絶対^{ずえ}対、阻止しますから！」

依頼のことなどどこかに行ってしまったナオは、このときまだ、リディアという想像力あふれる才女を乗っ取った悪夢の恐ろしさを知らなかった。

スモーキー一味は、病室の医療機器をまるごと買い取ってリディアを退院させ、トラックで数百キロ離れた荒野へ運ぶと、それらを宇宙船　ヘリオドール　の下部ハッチから船倉へ搬入した。くすんだ黄金色のクジラは腹に空いた穴を閉じると、まっすぐ大空へ舞い上がり、さらに上昇して宇宙へ飛びだした。

医療機器やカプセルの調整が終わり、船倉の隅に仮設病室ができあがると、リディアの世話を恋人の男に任せ、四人は居住区に通じるタラップを上がっていった。

コクピットの席についたヘイズは　ヘリオドール　を陰から支えるAエファイに命じ、遙か別の銀河にいるセルジオをという男を呼びだした。やがて前方にエアスクリーンが開き、頭巾をかぶったひげがちな男の真剣な『横顔』が現れた。

『今、後半のロスタイムだから、もうちょっと後にしてくれ』

セルジオ・サントス・ゴメス・アル^{II}ジャベル博士。カナリア色の寸胴ワンピース（カンドーラ）に青い頭巾^{ガットトラ}、ラテンとアラブがちや混ぜになったようなこの初老の男は、珍妙な発明品を生みだすことで、一部の筋にはよく知られていた。

試合終了の笛が聞こえると、セルジオ博士はデスクから立ち上がり、観衆の勝利の歌声にあわせて体をくねらせた。

「むしろサッカー中毒^{バカ}として有名だ」

ザルネルは変な踊りに見入っているナオに解説した。

恍惚のダンスが終わると、博士は陽気な笑顔をやっとこちらに向けた。

『ああ、すまんね。それで？』

ヘイズはイラついた様子もなく、淡々と事情を語った。

博士は白いものが混じったもじやもじやのひげをさすった。

『フーム、それだとアレを使わねばならんな』

「アレって？」

ナオは訊いた。

『アレといえば君、アレだよ』

「ぜんぜんわかりませんけど？」

セルジオは発明品にちゃんとした名前をつけず、人々を混乱させることでも悪名が高かった。

『まあともかく、詳しい話は会ってからにしよう』

ザルネルは言った。

「先生よう、ごひいき『インテル・ガラクシア』の試合は来週までないんだろっな？」

『ん、あー、その、皇帝杯と銀河チャンピオンズリーグがな……』

博士はひいきクラブが負けると、面会不能になることでも有名だった。

ヘイズはため息をつくとき、試合のない日にあわせて跳躍準備をすすめるよう、皆に言い渡した。

3

ヘリオドールは『次元の架け橋』を渡り、MF銀河のとある宇宙空間にワープアウトした。『複次元航法』の発明のおかげで、数百万光年の跳躍でも、実際にかかる時間はわずかなものだった。とはいえ、『架け橋』を渡っている最中は、五感や第六感がおかしくなり、人によつては何日も何週もかかっているように感じたり、ご先祖のゴーストに出会ったりと、決して楽な旅ではなかった。

ナオの場合はよく視聴覚に関わる脳をやられた。ヘイズやザルネルの声がチェッカー柄の渦巻きに『見え』たり、シヨコラの顔がチップなゲームの効果音に『聞こえ』たりするため、ワープ後少なくとも一時間は席から離れられなかった。

他の三人はもう慣れてしまったらしく、目的地につくや、リディ

アたちの様子を見に船倉へ下りていった。

植物状態のリディアは、寝ても覚めても変わりなく、カプセルの液体の底で大人しく横になっていた。一方、依頼人の男はひどい頭痛を抱えてうなっていた。

ナオとパトリックが回復して人手がそろうと、五人は患者や機材を箱形の輸送艇^{ランチ}へつめこんでいった。全員がランチに乗りこみ、運転席でザルネルが命じると、AIFアイは船体下のハッチを開いた。ヘリオドールを出たランチは、少しの間なにもない静寂のなかを進んでいき、やがて翼の生えた青いサッカーシューズのような船ターコイズ 号の中腹に吸いこまれていった。

ランチを下り格納庫で待っていると、セルジオの代わりに縦縞のユニフォームを着た少女が現れた。少女はひと言あいさつをしただけで、大人たちにてきぱきと指示を出し、重たい医療機器を近くの実験室へ運ばせていった。プログラムの不備で人工重力は調節できないとのこと。

小さな体育館ほどもある実験室には、古今の発明家の例にもれず、異形のマシンの数々が所狭しと控えていた。長い黒髪をおさげにした大きな瞳の少女は、大汗をかいてうなる大人たちに先んじ、ガラクタを蹴り飛ばしてはスペースをつくっていった。

かつては模範的な文系人間だったナオの細腕がめりめりと悲鳴をあげはじめた頃、ようやく作業が終わり、少女は自己紹介をした。「博士のかわいい孫にして天才助手の、ティーコです。よろしく」本名は博士の五倍くらい長いので省略、愛称で充分とのことだった。

「ところでセルジオ博士は？」

ヘイズが訊くと、ティーコの瞳は泳いだ。

「あ、えーと、チャリティ親善試合があるのを忘れてた……とかで

……」

「あんのジジイ！」

ザルネルが実験室を出ていこうとすると、ティーコは大声で引きとめた。

「その……部屋に行っても今は誰もいないし」

「テレビ中継じゃないんですか？」

ナオが訊くと、少女はぎこちなくうなずいた。

「チ……チケット、キャンセル待ちのが手に入った……とかで……」
「罰金は避けられないな」

ヘイズが言うと、ティーコは両手を広げた。

「で、でも、すごい人気クラブだから、会員だつてめつたに取れないんだよ？」

「そついう問題じゃねえだろ！」

ザルネルの怒声にもひるまず、少女はつづけた。

「大丈夫。博士が帰ってくるまで、この天才少女ティーコさんがちゃんと引き受けます」

セルジオの孫娘は、たしかにマシンの操作には詳しいようだった。博士がアレと呼んでいた『タンスの長城』のような装置と、リディアの命をつなぎとめている医療カプセルとの同期にミスはなかった。それでもナオは、このお調子者の娘がなにをしでかすか、不安でいっぱいだった。

「まずい……心拍数も血圧も下がってる」

パトリックは浮かない顔で計器を見つめていた。

なにも感じていないようにみえていても、リディアは魂の深いところで環境の変化を敏感に受けとめているようだった。

「軽率だった。彼女の感じ方を、健康な人間と同じように考えてしまった」

ヘイズはミスを悔やんでいた。リディアはワープに耐えられる心身を持ちあわせてはいなかった。エサで釣って高くついたとしても、セルジオ博士を彼女の惑星へ呼び寄せるべきだったのだと。

リディアの体が今後回復するかどうかは、神のみぞ知るところだ。

ヘイズは決断した。

「責任重大だぞ、ティーコ」

「任しといて」

汚れない少女の笑顔が、ナオをいつそう不安にさせた。

スモーキー一味は、『タンスの長城』に沿って横一列に並んだイスにすわると、あちこちからコードを生やした、ハーフ型のヘルメットのようなものをかぶった。

「本当にこんなもので、人の夢のなかに入っていけるのかい？」

ヘイズが訊くと、ティーコは入力作業の手を止めてむっとした顔を見せた。

「爺ちゃんはいいい加減なところあるけど、人様に出せるような作品だけはちゃんとしてたでしょ？」

「たしかに」

それを聞いて少しだけ余裕のできたナオは、ふと左右に目をやった。

ザルネルは仕事前の一服をふかし、シヨコラは電算機の怪物にながれてどんよりしている。

四人がゴーグルのようなものをかけてすべての準備が整うと、少女の助手から解放されたパトリックはカプセルに張りつき、ティーコは『長城』の端にある大きなレバーに手をかけた。

「そっちの様子はこっちからだいたいモニターできるから安心してじゃ、いくよ！」

ナオたちは目を閉じ、リディアの悪夢の世界へダイブした。

そこは短い草でおおわれた高い崖の縁だった。下界には黒っぽい森や湿地が不気味に広がっていて、その先ではノコギリの歯のよう

に尖った山々が、幾重もの雲をつらぬいていた。

他人の夢とはいえ、この見晴らしにひと言くらい声をあげてもよさそうなものだが、ナオたちはそれどころではなかった。

「その」「かつ」「こう」「は？」

四人は同時に叫ぶと、すれ違い恋愛物語の相関図のごとく、架空の矢印で循環の輪をつくった。ナオたちは人間とはかけ離れた姿をしていた。

ナオは翼の先が燃えさかる朱い鵬^{あか おおとり}、ヘイズは前肢に鎌を生やした白い狐、ザルネルは雲の塊に乗った玄い亀^{くろ}で、シヨコラは千手の舌をもつ青い蛇だった。

四人が互いの姿を教えあつて狼狽していると、天の声があつた。

『リディアさんって、すごい想像力もってるらしいね』

かわいい声の主はティーコだった。彼女がパトリックに聞いたところによれば、恋人は趣味で絵や小説をよく書くとのこと。優れた右脳をもつ人が創りだす世界はなにが飛びだすかわからないから気をつけるようにと、博士の助手は言ってきた。

「ありがてえ忠告だこと」

玄亀^{げんき}　ことザルネルは、宙に浮いた体を雲の力でくるりとまわしてみせた。

朱鵬^{すおう}　ことナオは、炎の混じった吐息をついた。飛びだすもなにも、すでに自分たちのことで腰が抜けそうなんですけど。

機械につながれて元気のなかった青蛇^{せいじゃ}　ことシヨコラは、千手の舌で白狐^{こび}のヘイズをからかっているうちに、デジタルと融けあつた夢世界に少しずつ慣れていった。

「ところで、倒すべきローグバランとやらは、どこにいますか？」

ナオの問いに、天声はわざとらしいダミ声で答えた。

『それを探すのが君たちの仕事だろう』

大人たちは沈黙をもって少女を非難した。

『じよ、冗談だってば。えーと、パット兄さんによるとね……』

リディアはなにか悩みを抱えていたのか、ときどき性格に似つかわしくない不気味な絵を描くことがあった。その絵を思いだして突きあわせてみると、どうやら『ノコギリ山脈』の向こう側が怪しいとのことだった。

「向こう側って、簡単に言うけど……」

そもそも、この孤立した高い崖からどうやって下りるというのか。翼のある朱鵬ナオと雲のある玄亀ザルネルはともかく……。

「さあ、乗った乗った」

青蛇シヨコラは言いながらぴよこんと大亀の上に跳び、白狐ヘイズが後につづいた。

「ああ、なるほど」

朱鵬ナオも長い脚で地を蹴って、甲羅に上がった。

「てめえら……この貸しは高くつくぜ」

玄亀ザルネルはスライムのような痰を一つ吐くと、奇妙な三匹を乗せて空に舞い上がった。

「あの……もうちょっと低いところを飛びませんか？」

朱鵬ナオは甲羅のてっぺんでうずくまっていた。鳥の姿になったといっても、ナオは所詮ナオだった。

遙か下界には赤ワインがつまったボトルのような、暗い色の森が霞に煙っている。あんな瘴気に満ちた魔境には近づきたくないけれど、こんな高いところに比べたら……。

「……」

玄亀ザルネルは聞いていなかった。さっきから青蛇シヨコラが首にまわりついて、からかっていたのだ。

他の仲間を乗せている手前なのか、安全飛行をつづけてきたザルネルだったが、大人の堪忍にも限界があった。

「テーマパークじゃねえんだぞ、クソガキが！」

玄亀ザルネルは青蛇シヨコラをふり落とそうとして、平たい巨体を縦にした。ナオとヘイズのことなどすっかり忘れて。

白狐^{ヘイス}は前肢の鎌を甲羅の溝に引っかけ、青蛇^{ショコラ}はそのまま亀の首にまきついて落下を逃れたが、鋭い前肢もなければ足の爪もそう強くはない朱鵬^{ナオ}は空中であたふたした。

そうだ……私には翼があつたんだ。意を決して両手を広げる。

「お？」

ザルネルと彼にしがみつく二人は、騒ぐのを忘れてナオの炎の翼に見入った。

「私……飛んでる」

朱鵬^{ナオ}の体はグライダーのように空を滑り、あつという間に玄亀^{ザルネル}たちを引き離していった。

恐い恐いと怯えながらも、雄大な景色のなかへ溶けこんでいく感覚には、なんとも言えない快さがあつた。

「おーい！」

遠くの方から仲間の呼ぶ声。

ナオはハッと我に返った。そうだった。恐気^{こわ}持ちいい遊びに浸っている場合じゃなかった。戻らなきゃ。ええと翼を、翼をはばくのよ……。

「どうやって？」

朱鵬^{ナオ}はまだ巢から出たことのない若鳥と同じだった。翼をどうやって動かしたらいいのか、どうやって風をつかめばいいのか、さっぱりわからない。

「あああああ！」

朱鵬^{ナオ}は翼を広げたままなすすべなく、紙飛行機のようにゆるゆると森へ突っこんでいった。

5

一羽はぐれた朱^{あか}い鳥は、いびつな形に生い茂った木々の暗がりさまよっていた。

不時着したのが小さな沼の浅瀬で、体のほうはどうか無事だった。炎の翼は粘っこい水気などものともせず、ごうごうと燃えさかっていた。救援を待つべきか、自力で脱出すべきか。ナオは迷った末、ひとまず森へ入ることにした。沼のあたりは多少開けてはいるものの、ムカデのような巨大生物が宙を飛び交っていたり、触手を生やした水草が黒花の棺桶を用意して待ちかまえていたからだ。

未開惑星のような沼地とはうって変わって、森は静かだった。上空で想像したような瘴気じみた魔物はどうやらないようでほっとしたけれど、常に誰かに見られているような感じがどうにもたまらない。

針金のような細脚を、一步前に出すごとに速めていき、朱鵬^{ナオ}はついに走りだした。

じっとしていた気配は左右に分かれると、一定の距離を保ちながら忍者のように追いかけてきた。

逃げられないと悟ったナオは足を止め、震える声で叫んだ。

「わ、私をどうしようっていうんですかっ!」

気配たちはまた、じっとしてこちらを見ていた。

突然、掃除機かなにかで後ろに引っぱられる感じがして、朱鵬^{ナオ}はよたよた退いた^{そし}。驚いてふり返ったけれど、なにもない。

ざわっ! 湿ったなにかが頭をかすめた。

「ひああああ!」

恐怖が頂点に達したナオは、本能の赴くままどこへとも知れず逃げまどった。

枯れ草を踏みしめ、倒木を乗りこえ、しばらく走っていくとまわりが少し明るくなってきた。見上げると灰色の直線がずっと天空にのびている。その細長い曇り空が滑走路のように思えたナオは、決心した。

一か八か……飛んでみよう。今ならきつと、野生の力が私を導いてくれる。

上り坂のてっぺんで地を蹴り、朱鵬^{ナオ}は炎の翼を広げた。体が浮い

た感じがした。やった！ 私、今飛んで……。

べしゃ！

気づくと朱鵬^{ナオ}の長い首は、雪のような白花の畑に見事なランディングを決めていた。人並みに温室育ちのナオに、野生の力など引きだせるはずもなかった。

謎の気配は炎の鳥がドジを踏んだと見たのか、一気に迫ってきた。着地のシヨックで頭が朦朧としているナオに、なすすべはなかった。ああ、せめてどんな魔物にやられたのか、それだけでもわかれれば化けて呪ってやるのに……。

「きゃん！」

ところが、謎の気配は犬のような悲鳴をあげると、どこかへ消えてしまった。

なんだかわからないけど、助かった……と思ったのもつかの間、哀れな鳥は灼熱の壁にとり囲まれていた。種油でも抱えていたのか、白い花畑はあつという間に炎の海面と化した。

「そうか……私の翼……」

などと見ている場合ではない。

逃げ道を断たれたナオはもう飛ぶしかなかった。燃える翼を持っているとはいっても、体のほうはただの朱い^{あか}大鳥、不死鳥のように都合よくできていない。

ナオは言葉にならない叫びを発しながら、羽を上下に揺すった。今度こそ体が浮き上がった。若木の枝をかすめ、巨木の林冠を越え、森全体を見渡せるところまで上っていくと、恐ろしい光景に心が震えた。

さっきまで森だったところがもう、恒星のコロナのようなものすごい火柱に飲みこまれている。炎は呪われた大地をどこまでも焼き尽くしていった。

燃えるものがなくなって火が小さくなると、朱鵬^{ナオ}は少しずつ浮力を失って、ついにはむっとした焦げ臭い荒野に下り立った。

ナオは片方の翼を広げてじっと眺めた。炎と炎が磁石の同極のよ

うに反発した、という感じだった。そんなことより……。

「ああ……」

黒い骸骨のようになってしまった木々を目にしたナオは、首をたれ、疲れて膝が折れるまで泣いた。夢魔に取り憑かれていたとはいえ、あの森はリディアの心の一部だったのだ。

『そんなに悲しまないで。リディアはああ見えても、災害孤児という不幸から這い上がってきた強い人です。心が少し焼け落ちてしまったとしても、いつかまた新芽が吹いて再生しますよ』

パトリックらしき天の声があった。

孤独から救われたナオは、ほっとしてゆとりができると、怒りを露わにした。

「黙って見ているなんて、ひどいじゃないですか!」

『それは、あの……』

説明に窮した男に代わって、ティーコが応えた。

『ごめん。四人一緒に行動するとかばかり思ってたから、マーカーはヘイズ（しろいにいさん）にしかつけてなかったの』

あの火事がなければ、現実世界にいる二人に見つけてもらえず、一生リディアの悪夢に閉じこめられていたかもしれない。そう思うとナオはぞつとした。

「それで、みんなは今どこに?」

『ローグバランのお城』

「そ、そんな……」

見捨てるなんて、ひどい……。

『……に捕まってる』

「ええっ!?!」

亀と蛇のケンカの巻きぞえをくってナオが森へ墜落した頃、空飛ぶ魔獣の大群がヘイズたちを取り囲み、夢魔の居城へと連行していたのだった。

「ど、どうしよう?」

『そこからだとお城は、ノコギリ山脈を越えた先の、黄色い湖の中

島にあるんだけど……」

「私、燃えるものが下にないと、飛べないみたいです」

『山は崖だらけだし、湖は毒でできてるようだし、夢へ入る装置は満員だし、うーん……』

少し間があつて、ティーコは言った。

『しょうがない、あの手でいこうか……』

「あの手って？」

いやな予感がした。

『チクツとするけど、ガマンしてね』

少女が処置室のナースみたいなことを言った、次の瞬間。

「ひざいいい！」

ほとばしる電光に包まれて、ナオは気を失った。

ふと目覚めて長い首をもたげると、そこはヤシの木が一本だけの、絵に描いたような無人島だった。

『あちゃー』

不穏な天声を耳にしたナオは声が上ずった。

「な、なにか問題でもあったんですか？」

『んーん、なんでもない』

涼しい回答の裏になにが隠れているのか、現場が見えないだけにかえって不安が募る。

『今びくつと跳ねたぞ！ 君はリディアになにを……』

パトリックの怒声を最後まで聞くことなく、ナオは再び雷に打たれたように気絶した。

目覚めるとそこは、古代の公衆浴場らしき建物の廊下だった。

『あれ、おつかしいなあ』

「遊んでる場合じゃないでしょ！」

ナオは叫んだ。

すると、部屋から出てきた素っ裸の男たちが、いつせいにこちら

を向いた。

「おや？ 変な鳥がいるぞ？」

美術室で見たことあるような上も下もたくましい男たちは、そろそろとやってきて朱い鳥あかを取り囲んだ。

逃げ道を探しているうちに、目も脚もやり場がなくなってしまう。男慣れしていないナオは緊張のあまり、子犬のようにひきつけを起こし、視界がホワイトアウトした。

黄緑色に輝く地下洞窟に出たかと思えば、バトルアックヌウンドシールド戦斧と円盾でこつたが

えす小人たちの国境だったり、海底都市の窓をタコの化け物がぶち破って大騒ぎになったかと思えば、天界行きのエスカレーターで孤高のミュージシャンとすれ違ったりと、ティーコの秘策はことごとくアテが外れた。

「ハアハア……」

のっしのっしと草原を行く首長恐竜の背中で、朱鵬ナオは羽交いの乱れを整えた。

日曜作家リディアの頭の中って、いったい……。

「ハアハア……こ、今度こそ……」

ティーコの掠れた声。

「で、できればなにか別の手を……」

「いい加減にしないか！ 電撃で夢の構造を変えようなんて、無茶にも程がある！」

パトリックとティーコがガタゴトともみあっている音がする。

「あつ、そのボタン触っちゃだめ！」

「えっ？」

状況はなんとなく想像できた。足もとに広がっていく小さなブラックホールを眺めながら、ナオはつぶやいた。

「所詮は魔法使いの弟子なのね……」

ナオは闇の縦穴をどこまでも落ちていった。やがて、足もとの彼方に小さな光の点が見え、それがだんだんと広がっていったかと思うと……。

ガッシャーン！

堆く積まれた壺うずたかの山に突っこんだ。

「イタタタ……」

ガレキの中からもぞもぞと這いだしてみると、そこは歌劇場のような形をした、独房の団地だった。円筒を半分に割ったようなホルの一階部分が、ナオの落ちた場所だ。

朱鵬ナオは長い首を巡らしながら思った。たしかに造りは歌劇場のようだけど、座席はないし、きらびやかな装飾もなければ、天井の絵画もない。大まかなところまでは造ったものの、その後計画が変わり、牢獄にしたという感じだった。

ふり返ってみると、幕もセツトもなく剥きだしではあるけれど、舞台もちゃんとあった。

「んあ……なんだ？ 内輪もめでもやらかしたか？」

三階の元ロイヤルボックスの辺りから、聞き覚えのあるダミ声があった。

「ふああ……おやつ、まだあ？」

男の声があつたちょうど向かい、鉄格子のすき間に千手の舌が見え隠れしている。

「二人とも、寝ぼけている場合じゃないぞ。ナオが来てくれた」

二階の奥の鉄柵越しに、ヘイズが白い狐顔を見せた。

「いや、私は、その……」

ティーコと依頼人のもみ合いがたまたま旨いほうへ働いただけ、などとはとても言えなかった。それにしても……ナオは首をかしげた。ここには結界でも張ってあるのか、ヘイズたちは外の事情がわかっていないようだ。

朱鵬^{ナオ}は彼らをどう救えばいいのかわからず、ときどき牢屋のほうへ首を突きだしてみては、一階の広場を行ったり来たりした。

「そうか……やはり飛べなかったか……」

ヘイズの言葉に、ナオはうつと胸がつまった。

「ご、ごめんなさい」

「君のせいじゃないさ。僕らも与えられた能力を使いこなせないまま、あつという間に捕まってしまったからね」

「だが、それはもう過去の話よ」

玄亀^{ザルネル}は気合いもろとも頭突きして、鉄格子をぶち破った。

つついて青蛇^{シヨコラ}が干手の舌から酸の液を飛ばし、最後に白狐^{ヘイズ}が前肢の鎌を電動カッターのごとくまわして脱獄を果たした。

ナオはちよつとだけがっかりした。『来てくれた』というのは、助けに来てくれたという意味ではないらしい。彼らは獄中で密かに能力を磨きながら、時機を待っていたのだ。

ホール^{ナオ}の中心にいつもの四人がそろくと、朱鵬^{ナオ}は安堵のあまり膝が崩れた。

「おっと」

狐の尖った鼻先が、大鳥の引き締まった尾羽を下から支える。

「だ、大丈夫です。ありがとう」

朱鵬^{ナオ}が体を起こそうと踏んばったとき、翼の炎がぼつと増して、狐の鼻をかすめた。

「うあちゃちゃちゃ！」

白狐^{ヘイズ}は顔に広がった火が消えるまで、辺りを駆けずりまわった。

「どさくさに女のケツを拝んだつもりが、罰があたったというわけだ」

ザルネルは笑った。

「え？」

ちようどシヨコラが話しかけてきたところだったので、ナオはよく聞いていなかった。

「ハッハッハ、なかなか面白い人たちですね」

舞台の袖から男の声がして、ナオたちはふり返った。

能面から鼻と口を取り去ったような気味の悪い仮面をした、マント姿の男にスポットライトが当たる。

「あんたがローグ balan さんかい？」

狐は相手の力を押し量るように目を細めた。

「そうらしいですね」

「らしい、とはどういう意味かな？」

「フフ」

仮面の男は小さく笑うだけだ。

「リディアさんはどこにいるんですか！」

ナオは叫んだ。

男は舞台の中心へ歩きながら言った。

「どこにも、この世界そのものが彼女自身なのです。私はリディアという女神の創造物にすぎない」

なんとということだろう。リディアはウィルスや呪いのような、外からやってきたものに侵されたのだと思いこんでいたナオは衝撃を受けた。彼女は自分自身の葛藤のなかに、創造主の力を超えた怪物を生みだしてしまったのだ。

リディアの悩みの根源を知りたい。けど、その前に男の正体を知りたい。そう考えていたナオの心を見透かしたように、ローグ balan は仮面を外した。

「パ、パトリックさん！？」

仮面の男は依頼人にして婚約者の、パトリック・チャノその人だった。これにはさすがの豪傑三匹も言葉がない。

「ローグ balan とは、ある惑星の神話に出てくる悪魔が、切り札にしている分身の名前です。その悪魔は分身を使って相手の心に闇を植えつけ、自滅させることを得意していました。リディアは大学でそのことを少し学んで記憶の片隅にあったせいか、似たような存在に思えた私にそう名づけたのでしょう」

ナオは確信した。この男はリディアの悩みの種をそのまま形にし

た存在なのだ。彼女はそれを悪魔の分身の名で呼んだ。問題は自分の心の領地にあるというのに、リディアの精神の暗い面は、それを忘れさせてしまう力をもった恐ろしい摂政を生みだしてしまったのだ。

婚約したのに、それだけ悩んだということは……。

「リディアさんは、もしかして……」

ナオはそこまで言っただけで口をつぐんだ。パトリックが見ているかもしれないのだ。

パトリックの生き写しは微笑んだ。

「リディアが彼を愛していることに偽りはありません」

「う……」

また心を読まれた。地の利ではまったくこちらが不利のようだ。

「だが、結婚は望んでいなかった。雰囲気にもまれてプロポーズを受けてしまったものの、その意思が揺るがないことだけはたしかだった」

「そんな！ どうして……」

ローグブランはマントを高くふり上げた、かと思うと、瞬きする間もなくナオのそばへにゅっと現れてささやいた。

「リディアは生まれつき、子供を産めない体なのです」

「ああ……」

そのひと言でナオは打ちのめされた。

「そういう訳ですから、彼女の眠りの邪魔をしないでください」

偽パトリックは口もとを緩めると、懷に手をやった。

「させるか！」

白狐ヘイスは竜巻のように鎌をまわして男に飛びかかった。

マントの男は懷から虹色の卵を取りだすと、ひじで割った。すると煙とともにクモの糸を太くしたようなものがぱつと広がり、あつけなく狐をからめとった。つづいて玄龜ザルネルの頭突きを二個目の卵からふくらみ出た巨大なハンマーで叩きのめし、最後に三個目の卵から飛び出したブリザードで青蛇シヨコラの千手舌を凍らせていった。

「私を誰だと思っているんです」

夢魔は笑った。

現実世界にたとえれば、神をも超えた存在なのだ。勝ち目などあるはずがない。少なくとも力と力の戦いでは。

朱鵬^{ナオ}はギツと男を睨んだ。

「私たちをどうする気ですか」

「殺してしまってもいいのですが、そのせいで我が創造主のリディアが死刑ということになると、私も都合が悪いのでね。一生、この狂気に満ちた時空で遊んでいただくことにしましょうか」

ローグブランはマントをひるがえし、さっそうと舞台へ上がった。

「ではみなさん、ごきげんよ……」

「パトリックさん本人がどう思うか、聞いてあげればいいじゃないですか！」

ナオは叫んだ。そしてハッとした。彼に言っても無駄なのに、私、なんでそんなことを……。

男は足を止め、肩越しに小さく言った。

「彼も、彼の両親も、そのまた両親も、元気な娘息子をその手に抱くことを、あからさまなほどに望んでいる。そういう家系なのだよ」
「僕が悪かった！」

若者の叫びが天にとどろいた。

「君の苦しみをなにか一つ酌んでやれなかったなんて……情けない限りだ！」

「……」

ローグブランは口をつぐんだまま再び仮面をつけた。

心なしか夢魔の身が縮んだように、ナオには思えた。

「たしかに僕は子供がたくさんほしいと言った。でも、それは君と僕との間に生まれればこそという意味だったんだ！ だから、たとえ君の体が事情を抱えていたって僕は……」

「パット……」

夢魔の仮面にぴしりと縦筋が入った。ほどなくそれは二つに分か

れ、リディアの美しい顔が露わになった。

『サルベージ……開始』

ティークの鼻をすする音を最後に、ナオたちは現実の体へ引き戻されていった。

7

「結局ボクら、いいとこ全然なかったね」

シヨコラのひと言に、コクピットの面々はそろってうなだれた。

あれからリディア・ペトレスクは完全に目覚めて体調も戻り、改めてパトリック・チャノと結婚の約束を交わした。

「ああ……リディアちゃん」

ヘイズは力なくシートの背もたれに体をあずけた。

夢魔が握っていたリディアの記憶は愛の力によって守られ、色男の野望は勇者に敗れた魔城のごとく崩れ去った。

暗いムードのなかにあって、ナオは内心一人で上機嫌だった。あなたが夢魔に突っかかっていかなければ今の幸せはなかったと、リディアは宝物にしていた上等のイヤリングを密かにナオに贈ったのだった。でも、本当にうれしかったのは……。

ナオは席を立つと、腰に手を組み、落ちこむリーダーのもとへ歩み寄った。

「優しいんですね、ヘイズさんて」

窓の外に広がる青緑色の惑星と、ガラスに映ったナオが一つに重なる。

男はそれを眺めながら言った。

「いやだなあ、今ごろ気づいたのかい？」

優男は笑うと、ナオの尻にそつと手をのばした。

ナオは見切って手刀をふり下ろす。

席のアームに肘を強打したヘイズは悶絶した。

依頼人の力を借りなければ解決どころか全滅だった、プロとして失格だと、我らがリーダーは成功報酬を受け取らなかった。せっかく慰めてあげようと思ったのに、今のですっかりやる気が失せた。

ヘリオドールの船体がぶるつと揺れてエアスクリーンが起動すると、ターコイズのcockピットをバックに、ひげがちな頭巾男が現れた。

『いやあ、すまんすまん。勝つには勝ったんだが、サポーターの間で暴動が起こってしまったてね。信じられるかね？ 親善試合でだぞ？ それで定期便の宇宙船ふねに乗り遅れたというわけで……』

セルジオ博士はそこで口をつぐんだ。

ヘイズの肩から青白いオーラが立ち上っていたのだ。

「博士、この代償は高くつくぜ」

『な、なぜだ。ティーコはしっかりやっтарろう？』

「あの娘のせいで、僕らは今でも頭痛を抱えているんだ！」

ティーコのショック療法によってナオが幻想世界ツアーにふりまわされていた頃、結界の内側にいた他の三人は、ものすごい振動に揺すられて、独房の壁や天井に体のあちこちをぶつけていた。これが現実なら全身打撲で湿布だらけのはずだが、脳内世界でのことなので痛みが頭に集中してしまうのだった。

『そう怒るな。夢魔の結界に小さな穴をあけ、奴の言葉をすべて拾うように言ったのは、なにを隠そうこの私なのだ。そうでなければパット君はフィアンセの秘密を知ること、愛の叫びもなかったはずだがね』

セルジオ・サントス・ゴメス・アルジャベルは、スタジアムでサッカーを観戦しながらも、要所ではティーコの実況を通信機で聞き、対策を講じていたのだった。

「それについては感謝してる。だが……」

博士のとなりで下を向く小さな『10番』を一瞥すると、ヘイズはつづけた。

「ティーコが勝手をやったとき、あんたはなにをしていた」

『そ、それは……』

博士は片頬をひきつらせて口ごもった。どう見ても、言い訳になにかをでっち上げようとしている顔だ。

一方、良心の呵責に耐えかねたのか、少女はおそろおそろ事実を口にした。

『三十メートルのフリーキックが入って逆転したってわめいて、それからしばらく通信が切れちゃったの』

ヘイズの白メガネが光った。

「シヨコラ、ザルネル、わかってるね？」

二人の荒事師は小さく歯を見せると、バキボキ指をならし、それぞれの操縦桿を握った。

『ティ、ティコ、緊急ワープだ！』

セルジオの叫びに、ティコは眉をひそめた。

『例の 長城^{アレ} はワープ並みにエネルギー食うから、試合が終わったら補給屋を連れてくるって、言ってなかったっけ？』

『し、しまったあ！』

第五話 ブラウ・バイ・ワイアード

1

「ちょっと早く来すぎたみたいですね」

ナオ・シーダースは欄干に身を寄せた。

ここは惑星国家ストラトの首都、フェンデル・キャスターのとある海浜公園。夜のとばりが下りて七色のネオンに彩られた街は、内海を鏡にして対となり、仕事が板についてきたメガネ女を幻想的な気分^{いざな}に誘っていた。これであの旋律に満ちた対岸の喧噪がなければ、もっとムードに浸ることができたのだけれど……。

「フンフンフン……」

左右の耳たぶに小さなシールを貼ったヘイズ・スモーキー^{ジュニア}Jrは、そこから聞こえてくる音楽に興じているようで、ナオが問いかけても生返事するばかりだった。

ナオは鼻をならした。もう！ どうせ、最近デビューしたセクシ―アイドルの歌でも聴いてるんでしょ。あんなの顔と体だけで、音楽なんか成金プロデューサーの売れ筋パターンを使いまわしてるだけじゃないの。

甘党少女のシヨコラ・ビーメイは、ストラト名物の『調べ（チューン）パイ』——かじると名曲がなる——に夢中で、今話しかかれそうなのは、珍しく競馬新聞以外の冊子を手にするザルネル・ウレバスキンだけだった。

雑誌の表紙を飾るのは、エレキギターを手に両膝をついてのけぞる、ロン毛中年のライブカッタだ。

「誰なんですか？ この人」

街灯の頼りない光で読むのを諦めたのか、ザルネルは目をこすって本を閉じた。

「なんだ、知らねえのか。アンドロメダ『ギター四天王』の一人、

ジミー・リーベック様をよ」

「ジェフ・クリプトン、という人なら知ってますけど……」

音楽がどうというよりも、覚醒剤所持で何度もつかまってるから……。

「いいか嬢ちゃん、ジミーはな、この世に存在するすべての奏法を完璧に……」

ザルネルがうんちくを語りだし、引くに引けなくなったナオがうんざりしはじめた頃、依頼人らしき男が腕時計を見ながら小走りにやってきた。

「ふう、遅れたかと思ったよ」

後退しつつある前髪に、うつすら生やした無精ひげ。半袖のシャツからたくましい腕をだしている男はエリック・ホワイトモア。星間警察機構（ISPO）ストラト支部に属する中堅刑事だ。

男に気づいたヘイズは、耳たぶのイヤホンシールをはがすと言った。

「刑事さんからの依頼とは、穏やかじゃあないね」

事を内密に進めたいということで、一味はまだ仕事内容を一切聞かされていなかった。

エリックは物陰で愛を育んでいるカップル以外、深夜の公園に人気がないのをたしかめると、さっそく本題に入った。

「ストラト星域周辺で起こった、集団自殺事件のことは知っているな？」

「ああ、ニュースで見たよ。コンマと小数点を打ち間違えたのかと、あのときは思ってたんだけどね……」

今から三ヶ月ほど前、この惑星周辺のいたるところで同時多発的に自殺事件があった。実行者は推定五百万人という、恐るべき数字が打ちだされた。事件の原因としては、社会不安説、ウィルス蔓延説、新興宗教の儀式説などが上がったが、決め手となる共通点は見つからなかった。

「手がかりがないといえはない。あるといえはありすぎる。惑星市

民はいつやつてくるとも知れない死の宣告を恐れ、眠れぬ夜をすごしている。だが……」

エリックはハツとした顔で言葉を切った。いつの間にか声が大きくなっていったのだ。

「だが、みんなは大事なことを一つ見落としている。この惑星では当たり前すぎて、誰も疑わなかったことだ。なんだと思う？」

男の問いかけに、スモークー一味は顔を見合わせる。

ザルネルは言った。

「当たり前っていやあ……この連中は誰しも、音楽をこよなく愛しているようだがな……」

惑星ストラトは、楽曲ファイルの接続数がアンドロメダ銀河一を誇ることでよく知られていた。

「その通りだ。私はこの事件には音楽が関わっているとにらんだ。事件前後にあった音楽業界の出来事を洗っていると、一人のギタリストが浮かび上がった。犯人はおそらく……そいつだ」

エリックはザルネルが手にしている雑誌に向けてあごをしゃくつた。

「ジミー・リーベックだつて!？」

ザルネルは本の表紙をまじまじと見つめた。

「ギターの神様がなんだってそんなことを……」

ヘイズの問いに、広い額の男は顔をしかめた。

「たしかな証拠はないし、私だつて信じたくはない。だが、彼の新しいアルバムが発表されたその日から、この惑星^{ほし}の自殺者は急増した」

「偶然じゃないんですか？ それなら、同じ発売日の他のアーティストにだって容疑が……」

ナオが言い終わる前に、男は答えた。

「自殺者は例外なく、ジミーのニューアルバムを買っていた。気づいたのは私だけだったがな」

「じゃあ、彼のところへ行つてギターを調べれば……」

「事件後に私はジミーのライブを見にいった。新曲も聴いた。だが、その日はなにも起こらなかった」

「それでもジミーが犯人だと？」

ヘイズが言うと、エリックはうなずいた。

「少々危険だが、一つ実験を試みよう」

男は懐からコードのついた旧式のイヤホンを取りだすと、ヘイズに手渡した。

ヘイズはイヤホンを耳にする。

エリックは小さな音楽プレーヤーの再生ボタンを押した。

「フンフン……聴いたことないな。これがジミーの新曲ってやつかい？」

ヘイズはリズムに乗って頭を揺すっていた……かと思うと、さつと顔が青ざめ、自分を全否定するような言葉を口にしながら、内海と公園を仕切る欄干めがけてずんずん歩きだした。

ナオたち三人はあわてて男を取り押さえ、事なきを得た。我に返ったヘイズは、生きているのがなんだか急に罪なことに思えたとき、新曲の魔性を訴えた。

エリックは言った。

「安物でしかも年代物ときてるから音質が悪くてね。それに、暴れた拍子にイヤホンが外れてくれたんで、私も助かったんだよ」

ジミーのギターの魔性は生音では不活発で、デジタルメディアを通したときにはじめて発動する。ただし、音質が悪ければ悪いほどリスナーの自殺願望発作は軽い。エリックは自ら体を張ったおかげで、魔のスイッチが入る条件を解き明かすことに、誰よりも迫っていたのだった。

ダークな気分からまだ立ち直っていないのか、ヘイズは青い顔で言った。

「そ、それで、刑事さんの依頼というのは？」

「ジミー・リーベックのギターを直接手にとって調べたい。気づかれないように、盗^とってきてくれないか」

「で、終わったら、またこっそり返してこいと？」

「話が早いな」

「この頃のお客様は難しいことばかりおっしゃる」

ヘイズはため息をついた。

「ところで、払うべきもんは払ってもらえんだろっな？」

ザルネルは男を睨んだ。

「申し訳ないが、私の給料では即金というわけにはいかない」

「チツ……また分割かよ」

「完済まで私が無事でいられたらな」

「む……」

ISPOの刑事は、凶悪な宇宙海賊や国際マフィアを相手にすることが多く、他の仕事に比べて殉職率が高かった。

エリックは一つ提案した。

「じゃあ、こういうのはどうだ。もしジミーがシロだったら、ISPOの極秘ファイルを可能な限り流してやろう。はした金では買えない、貴重な資料だぞ？」

「クロだったら？」とヘイズ。

「報酬は三分の一、即金で出せる限度額だ。悪くない勝負だと思うが、どうかな？」

勝負と聞いて血が騒いだのか、ザルネルは笑った。

「あんた、それでも刑事^{デカ}かよ」

「どんなに決め事に忠実でもな、市民の安全を守れなければ、刑事^{デカ}とは言わんのさ」

男は連絡先が書かれた紙切れをヘイズに手渡すと、内海沿いの小道を歩いて街明かりのほうへ消えていった。

「いつの間にか依頼、受けることになってたよ」

ヘイズは呆然と言った。

「いいじゃん。たまには『らしい』ことしないと腕がなまっちゃうよ」

珍しく話を聞いていたシヨコラは、バキボキと指をならした。

一方、ナオは罪悪感にうちひしがれていた。ギターの神様から商売道具を盗むなんて……ついに私もホンモノの悪党の仲間入りをするのね。一味に入りたての頃だったら、盗みを働くくらいならいっそジミーのギターを聴いて私も……と思ったかもしれない。でも、今は……。

2

ジミー・リーベックは、あるギターを気に入るとその一本だけを肌身離さず使いまくるという話は、ファンなら誰でも知っていることだった。現在、ジミーが使っているのは『ボブソン・エスポール2488』という何世代も前の骨董モデルで、先日発売されたアルバムのレコーディング中に手に入れたものだった。ジミーがそのギターを使ったのは締め切り間際に一発録りした『ブロウ・バイ・ワイアード』だけだったが、アルバムの全十曲中それが最も人気だった。四十を過ぎたというのに未だ精力の衰えを知らないジミーは、アルバムが発売されてまもなく、ワールドコンサートツアーに旅立っていった。

そしてジミーは今、首都フェンデル・キャスターより千キロ北にある地方都市ヤママで、三日間のライブを行っている。

さすがに神様といわれるだけあって、ライブの最中は人目が多く、また警備も厳重だった。スモークー一味は、ジミーが一人きりになる時間を狙うことにした。

三日目のライブが終わった夜遅く。

ジミーはホテル最上階を独占するロイヤルスイートで、疲れ切った体をベッドに埋めていることだろう。事前の調べで、八十八階のエレベーター前や廊下には十人以上のボディガードがつくとわかっている。騒ぎを起こすわけにはいかないヘイズたちは、ホテル屋上

から外壁を伝って侵入する計画を立てていた。

旅客を装った四人は、八十七階でエレベーターを下りると長い廊下を歩き、湿った海風が吹きさらす非常階段にそつと出た。そこまではよかったのだが、上の階の非常口前にも一人見張りがついている——そこだけ調査と食い違っていた——ことが大きな障害となった。屋上に出るためには、どうしてもそこを通らなければならないのだ。

「じゃ、一芝居打つてくるとしますか」

ヘイズは白スーツの懷から小さなワイングラスを取りだすと、千鳥足で階段を上っていった。こんなこともあるかと用意していたらしい。他の三人は途中までついていって、踊り場の手前の壁に身を寄せ、息を凝らした。

「どうしました？　ここはロイヤルスイート以外、部屋はありませんよ」

ボデイガードの男は落ちついた声で言った。

「ああ、すまない。風に当たろ……思つて上り下り……たら、かえつて酔いがまわってしまったようで……おえっ！」

「あ、ちよっ！　しょうがないな……」

がさごそ音がして、男の口調が事務的なものに変わった。

「酔つて迷いこんだ客を一人トイレに連れていく。交代を頼む」

男は館内にいる同僚の了解を得たようだ。非常口のドアが閉まる音がした。

手はず通り、ナオたちは非常階段を駆け上がっていき、忌々しき奇才セルジオ博士特製の誤作動装置をドア横の保安機器にかざして最後の障害を切り抜け、屋上に躍りでた。

ヘリポートの中心でなぜかバンザイをするシヨコラを、「まだ終わってねえだろうが！」とザルネルが引きずっていく。一方のナオは、高みから望む美しい夜景に一瞬声をもらしたものの、すぐにここが地上三百メートルの崖上であることを思いだし、すぐるように二人を追いかけた。

気を抜くと高いところでは仕事にならない……ナオは置物扱いされないためにも、いつの日かこの恐怖を克服してやるうと心に誓った。いつの日かきつと……たぶん……気が向いたら……。

ナオとザルネルが見守るなか、シヨコラは身長の三倍もある金網を一息で乗り越えると、ロープも命綱も使わずに階下のベランダへ飛び降りていった。

十分たった。なんの連絡も入ってこない。もしか捕まったのではとこちらから発信すると、しっかり応答があった。

「大丈夫なんですか？ シヨコラさん」

ナオは小さな通信機を握りしめた。

『ん、あ、もうちょつと待ってて』

くちやくちやと柔らかいものをかみしめる音がした。

風で飛ばされぬよう赤いキャップを後ろ向きにしていた男のこめかみに青筋が立った。

「バツキャロー！ 菓子なんか漁ってる場合か！」

『だってさ、こんなにおいしいの初めてなんだもん』

ロイヤルスイートのプレミアムスイーツとはまた、思わぬトラップがあつたものだ。

なかなか説得に応じないのでナオがやきもきしていると、ザルネルが「もつとうまいもんおごってやるから早く上がってこい」と叫んで、ようやく事が進んだ。

「絶対だよ、絶対！」

ギターケースをかついだ少女はひょいと金網を飛び越え、二人のもとへ帰ってきた。

シヨコラの恐るべき運動能力を改めて目にしたナオは言葉がなかった。彼女の惑星（ふろさく）の人々ってみんなこんな感じなのだろうか……。

「後でな、後で」

ザルネルは『大人の常套句』で小さな戦乙女をあしらった。

ナオは天に向かって手をふった。すると、上空からISPOのヘ

リが『扇風機並み』の静かな音で下りてきた。さすがは国際警察、高価なノイズキャンセラーを使っているようだ。彼らは定められたコース以外の飛行を許されてはいるが、用もないのに何度も同じところをうろつきまわっていればさすがに怪しまれる。ヘリを使えるチャンスはこの一度きりだった。

ナオたちを乗せたヘリは一路、郊外のとあるモーターへ向かった。

3

工場建設予定の空き地に客を下ろすと、パイロットは迷惑そうな顔を残して上空へ去っていった。同乗していたエリックという男、仕事はできても人望のあるタイプではないようだ。

人気のない空き地を横切り、薄暗い街道を少し歩くと、太古のアメリカ映画に出てきそうな平屋のモーターが見えてきた。駐車スペースにはエアカーと四駆車がそれぞれ一台あるだけだ。

エリックは三人を部屋に通すと、さっそく手袋をはめてギターケースを開け、小さな端末を使って部品の一つ一つを調べ上げていった。しばらくして、ボディガードを罫にかけたヘイズがエアタクシードで乗りつけ、そろった一味は刑事の結論を静かに待った。

一通り調べきると、男はうめいた。

「バカな……」

「ジミー・リーベックはシロだった。賭けは僕らの勝ちのようだね」ヘイズは口もとをむずむずさせながら、エリックの落ちた肩に手をやった。ISPOの極秘ファイル見放題……慎むべき場面でも思わず顔に出てしまうほど、手にした魚は大きいということだ。

「そうと決まりや、さっさと返してこようぜ。神様が目覚めちゃう前だよ」

ザルネルは暇つぶしに手にしていた音楽雑誌——エリックが集めた資料の山の一つ——をベッドに放り投げた。

たまたま開いたページに、エリックは虚ろな目を向けた。

「うん？　ちよつと待てよ！」

男はオモチャを目にした子猫のように雑誌に飛びついた。

それはジミーのギター『ボブソン・エスポール2488』が少数しか生産されなかった謎について論じた記事だった。

「かー、なんてこった！」

無精ひげの男は汗ばんだ額に手をやった。

資料を集めるだけ集めておきながら、この刑事は細かい記事のチエックを怠っていたようだ。

エリックは興奮が抑えきれないのか、途中から口に出して読みはじめた。

「……このモデルは部品に使われた素材の相性が悪かったためか、時間が経つとチューニングがうまくいかなくなる気難し屋で、メーカー側は失敗作だったと発表、早々に販売を中止した。特にシリアルナンバーの若い初期ロット品は、関わった者が次々と不審な死を遂げたために、ほとんどのプレイヤーは気味悪がってこのモデルを処分してしまったということだ」

「ま、まさか……」ナオは一つの憶測を口にした。「初期ロット品のうち、処分されなかったギターが一本だけ残っていた……とか？」ヘイズは手にしたギターをおそろおそろ裏返した。『つまみ』のあるヘッドの部分にシリアルナンバー『BS24880003』とある。

「若いな」

エリックはニヤリと笑った。

「わ、若いね」

ヘイズはギターをそつとケースにしまった。

「明日、この記事の内容をふまえてジミーに話を聞く。彼がモーニングコーヒーを漬きだす前に、ちゃんとギターを返しておいてくれよ」

「へいへい」

ヘイズはうらめしそうに横目を流す。

ザルネルは火のないタバコをくわえながら言った。

「知らなかったのか？ 俺は生まれたときから正義の味方なのさ」

「ザルネル…… フィルターに火をつけると危ないぞ」

「えっ？」 ザルネルはあわててタバコをくわえ直した。「ハハハ……」

「ま、ともかく、ブツを返してくるまでが仕事だ。稼ぎは三分の二になっちまったが、^{キブアップ}放棄するよりはマシだろ？」

「仕方ない。九分の一ずつ『三人』で分けることにしよう」

ザルネルはむせながらつぶやいた。

「あんた、鬼だ……」

スモークー一味は、持ちだした時と同じ手口でジミーのもとへギターを返した。ボディガードたちは夜明け前の交代時間ですっかり入れ替わっていたので、企みに気づいた者はいなかった。ただ一つ違っていたのは、ヘリが使えないためにナオとザルネルは作戦に加わらず、仕事を終えたシヨコラが一人、リュックにつめこんできたパラグライダーを開いて脱出したことだった。

少女が空へ舞い上がったところまで、作戦は完璧だった。だが、その日のシヨコラはツイていなかった。この地域は一年を通して偏東の海風が吹いているのだが、年に数日だけ、夜明けに陸から海へ逆風になることがあった。とある小学校のグラウンドで薄暗い空を見上げていたナオとザルネルはあわてて棧橋まで走り、『拝借した』モーターボートを沖へ飛ばした。

船のデッキに引き上げられた新種の生き物を、おだやかな朝日が照らした。

ナオが手当をしている間じゅう、ザルネルは「どれがホンモノの乳だかわかんねえや」と腹筋を痛めるまで笑い転げていた。

全身をクラゲに刺されたシヨコラは、まるで醜い深海魚のようだった。ふくれた白い魚は口をぱくぱくさせながらなにか口走った。

「約束…… 忘れてないよね？」

「ああ？ なんのことだ？」

ザルネルはボートのステアリングをまわしながら言った。

「あの部屋にあったお菓子より……おいしいものおごるって……」

「わかったわかった」

シヨコラは安らかな顔で気を失った。

運が悪ければ中毒死だったかもしれないという時に、なにを言いだすかと思えば……ロイヤルスイートのプレミアムスイツって、そんなにすごいんだらうか。庶民上がりのナオには想像すらできなかった。

4

ジミー・リーベックはヤマハ市での公演を終えると、そのまま地元のホテルに留まり、つかの間のオフに入っていた。

ホテルへ足を運んだエリックは、マネージャーをロビーに呼びだして事情を話した。二人はエレベーターに乗ると最上階まで行き、スーツを着た厳つい男たちの間を進んでいった。

刑事の話聞き終えたジミーは、信じられないという顔で首を横にふった。チューニングが難しい繊細なギターであることは知っていたが、初期ロット品にそんな恐ろしい催眠効果があるなど聞いたこともないと彼は言う。

エリックは「一つ試したいことがある」といつて耳栓をすると、音楽プレーヤーの再生ボタンを押した。音質の悪い内蔵スピーカーから流れてくるジミーの新曲。ジミー本人やマネージャーの顔からさつと血の気が引いていったかと思うと、二人は自分の首をしめるような真似をした。苦しみから解放されたジミーは、その事実にひどくショックを受けたようだった。

彼はシロだ。エリックは確信した。それさえわかれば証拠の話などどうでもよかった。目の前の二人が芝居を打っているかどうか

どは疑うまでもない。彼は断じてシロだ。三日間ライブに通いつめたかつてのギター少年にはそれが『わかる』のだった。

刑事は質問を変えた。そのギターは人から買ったものだそうだが、いったい誰から手に入れたのかと。

それは先日発売されたアルバムのレコーディングをしている最中のことだった。音楽雑誌の記者を名乗る男が訪ねてきてこう言った。「知り合いに貸した金のカタに、珍しいギターを手に入れたんですが、どうも素人にはもったいない代物らしいと判りましてね。できれば優れた弾き手に譲りたいと思っていますよ」

ジミーは手にしたギターを一度かき鳴らしただけですっかり惚れこんでしまい、それを男の言い値で買い取ったのだった。

男の名はアラン・シェクター。特徴について刑事が訊くと、多少の絵心があるとジミーは言って似顔絵を描いてみせた。たとえば彼が道ばたにすわる無名の絵売りだとしても、金貨の二三枚は出してもいいと思える出来ばえに、エリックは満足した。

ジミーにはそのギターを二度と使わないよう、そしてマネージャーには楽曲の配信中止とデータ削除を管理会社に呼びかけるよう、刑事は指示した。最後にエリックは、かつて神と崇めた男と固く握手を交わし「犯人は必ず捕まえてみせます。これにめげず、またいい曲を聴かせてください」と笑顔を残してロイヤルスイートを後にした。

5

スモーキー一味と依頼人は、首都フェンデル・キャスターの夜の海浜公園で再び落ち合った。

エリックは内海沿いの欄干にもたれてタバコを吹かしながら、真犯人の手がかりをつかんだことを話すと、偉そうに言った。

「と、いうわけで、後のことは我々ISPOに任せてくれたまえ。」

「ご苦労だった」

「……」

四人は無言で互いの顔色をうかがっている。

ザルネルが沈黙を破った。

「なーんかな、こう、すつきりしねえ終わり方なんだよな」

「余計な感情は起こさないほうがいい。自分の仕事に徹するのがプロってもんだろう」

刑事は短くなったタバコを海へ捨てる。

ヘイズは言った。

「一応、見せてもらえないかな。ジミーが描いたというその似顔絵」
エリックは難しい顔をしたものの、懷から紙切れを取り出した。

「ま、君らの協力あってのお宝だからな」

栗色の縮れ毛をした、歳は四十代といったところの細面の男……

どこかで見たような顔だった。腕利きの三人はすぐには思いだせなかったようだが、ナオはちがった。

「こ、この人、人型機動兵器アームドモビルで私たちを襲った……」

「アームドモビルだって!？」

エリックの顔がこわばる。

ヘイズはハツとした顔をして取り繕った。

「あ、ああ、そうそう！ 模型屋の店長にそっくりだね!」

「模型屋?」

すかさずザルネルが話を合わせる。

「も、模型……そうよ、あそこの店長に『アームドモビル』のプラモのウンチクを語らせたら、そりゃもう災害が『襲ってきた』よ
うなもんだぜ」

「なんだよ、脅かすなよ」

エリックはほつと息をついて懷に絵をしまう。

ヘイズもほつと息をついて、そばにいたナオの懷に右手をしまおうとしたのだが……さっと引いた手には見事な爪痕が走っていた。

「ツツツ……もう長らく宇宙軍事協定で禁止されてるんだ。今じゃ

もう趣味の領域さ」

「そりやそうだ。おっと」

ぶるつと震えた腕時計を、刑事は見つめた。

「支部からの呼びだしだ。君らの報酬についてはまた後で連絡する。すまん」

エリックは街明かりの方へ走っていった。

四人は顔を見合わせると同時に叫んだ。

「ジャン・ジャック・ジャブイーユ！」

6

首都の郊外に広がる宇宙港。さまざまな色形の星船がずらりと並ぶ駐船場の一角に、ヘリオドールがたたずんでいる。そのコクピットでは、スモーキー一味が渋い顔を突きあわせていた。

自然の調和を乱そうとする人間は、惑星生物圏という肉体を侵す悪質な病巣にして、進化上の失敗作であるとする『人類失敗作説』

の提唱者、ジャブイーユ元教授。この一級の科学者は以前、呪われた古札の力によってある星の人々を滅ぼそうと企んだのだが、依頼を受けたヘイズたちが命がけでこれを奪還し、男の犯行を阻止したのだった。逃げた男は、それからしばらく行方をくらませていた。

「やはり、奴を捕まえそこなつたのはマズかったね」

ヘイズが言くと、ザルネルはシートに深くかけた。

「ま、ISPOが動いたってんなら、俺たちやポップコーンでも頼張りながら見守るしかねえさ」

「でも、あのもじゃ頭のおジサン、敵にまわすと手こずると思うよ」
シヨコラの意見に、ナオもうなずいた。

衛星のクレーターを一つ埋めつくすほどの基地を作り上げ、禁断の兵器アームドモビルまで手配した、あの男の手腕は決してあなどれない。

翌朝、ベッドでまどろんでいたナオは、代表の呼びだしにもぞもぞと起き上がり、はれぼつたいまぶたをこすりながら自分の部屋を後にした。コクピットの自動ドアが開くと、エアスクリーンに映った朝のトップニュースに食いつく男たちの姿が目に入った。テレビ画面はすぐに天気予報に切り替わってしまい、ナオは小さくうめいた。

「あの、なにかあったんですか？」

ヘイズは固くした横顔で言った。

「エリックが、撃たれた」

録画してあったニュースによると、昨晚遅く、例の海浜公園近くでISPOの刑事が何者かに銃撃され病院に運ばれたが、意識不明で重体とのことだった。

「そんな……私たちと別れた後、すぐじゃないですか」

頭から血の気が引いたナオは、ふらふらと自席の背もたれに身を寄せた。

「ジャブイーユの野郎、俺たちの動きをどっかで見張ってやがったな」

ザルネルは肘掛けを平手で打った。

「もし、エリックが帰らぬ人となってしまうたら、お次は僕らなんだろうね」

ヘイズが言うと、ナオは叫んだ。

「不吉なこと言わないでください！」

「ともかく今はエリックの回復を祈ろう。僕らの身の安全のためにもね」

宇宙規模のネットワークを誇る国際警察、ISPOを敵にまわす。それは犯罪者にとって運命の広がりを持ったも同然のことだった。逃げるか捕まるか二つに一つ、安住の地などないに等しい。エリックが回復し、組織が動きだせば、敵は孤狼のようなスモーキー一味にかまっている暇などないだろう。

その日の午後、警察の同僚を装って入院先に問い合わせてみると、エリックはまだ手術中とのことだった。

次の日の午後、再び電話すると、手術は無事に終わったが意識は混濁しており、面会不能だと言われた。

そして三日目の朝、依然として重体であると回答を受けたヘイズたちは、強行面会を企んだ。それほど容態が悪いのなら、せめて死ぬ前に撃った者の特徴を聞きだして、エリックの仇を取ってやろうというわけだ。

「これは依頼の仕事じゃねえし、俺たちの身を守るためでもある。敵になにかあつても目をつぶってくれよ」

ザルネルが言つと、ナオは男たちに冷たい視線を送った。

「なぜ私に断る必要があるんですか？　今までだってそうしてきたんでしょ？　個人的な果たし合いなんか私は知りません。でも今後いつさい、あなたたちと口をきくことはないでしょうね」

コクピットを出ていく女の背中を見送った男二人は、そろってため息をついた。

スモークー一味は宇宙港を後にすると、エリックの入院先へ向かうべく、車輪のない『地下鉄』を乗り継いでいった。

風を切るかすかな音しかない閑散とした昼時の車内で、シヨコラは声もひそめずに言った。

「ねえ、ナオちんってなんであんなに怒ってるの？」

「るせえ！　寝坊したてめえが嫌われ役になりやがれ」

ザルネルの怒声も、となりの車両の奥に一人すわるナオには聞こえないようだった。

「だいじょうぶだよ。ちゃんと急所ははずすから」

シヨコラは背中 of 可愛いリュックから自動拳銃を取り出した。
オートマチック

「わーっ！」

すぐ横にすわっていたヘイズは、シヨコラの体めがけてダイブし

た。

幸い、まわりにいた乗客の目には、『白昼堂々、いたいけな妹を襲った変態お兄ちゃん』に映ただけですんだようだ。

探るような視線に気づいて、三人がとなりの車両に目をやると、ナオはぶいっとなつちを向いてしまった。

駅の階段を上がって出口を抜けると、そこは大きな都市公園の西口だった。エリックが入院している病院は、公園をはさんで向こう側、東口を出てすぐのところにある。公園のど真ん中を横切る大きな砂利道の左右には、背の高い木々がすき間なく茂っており、ちょっとした森林浴コースになっていた。天気予報ではこれから大雨が降るということで、人通りは疎らだ。

横断する道も半ばにさしかかった頃には、ナオは心の整理がついて機嫌を直していた。エリックはまだ生きているのだ。いつの間にか悪いほうの予想に浸って腹を立てている自分が、ひどく身勝手な人間に思えてきて、熱が冷めてしまったのだった。

ナオは怒りのあまり耳が疎かになっていて、強行面会の段取りについてよく聞いていなかった。それをヘイズに訊こうとしたとき……。

不意にシヨコラが股間をおさえた。少女は前のほうへあごをしゃくった。

「あのでっかい木の向こうに、誰がいる」

彼女が尿意をもよおすのはピンチのサインだ。ナオは身を固くした。

「伏せろ！」

ヘイズが叫ぶ。

百戦錬磨のシヨコラとザルネルはすでにそうしていたが、素人同然のナオは反応できなかった。優男はナオを押し倒してかばった。無数の光線が四人のすぐ上を走り、木々の皮を焼いた。

ザッザッ……レーザー小銃をかまえた黒ずくめの男は、砂利を踏

みしめ進み行く。

「教授じゃない！ 殺し屋を雇ったか」

ヘイズはナオを抱えて木陰に逃げこんだ。一瞬はためいた男の白スーツは、裾が穴だらけになっていた。

フェイスガードをした殺し屋が若い男女に気を取られている隙に、シヨコラとザルネルは道をはさんで反対側の木陰に隠れていた。

「パルサーL16か。やつかいだな」

ザルネルは一目で敵の武装を言い当てた。

「あれって散弾モードにも切り替わるんだっけ？」

「てめえ、よくそんなに陸軍なんかいられたな」

「大事なものは、ボクより速くて正確かどうかだからね！」

シヨコラは言うつと、道の真ん中に躍りでた。

反射的に銃口がそこを向く。

まんまる顔の少女の微笑みに、黒ずくめは目を細めた。

幼顔の奥になにを見たのか、男は息を荒くしてき、かつと目を開いた瞬間、指先に力をこめた。

カラスが三羽、どさりと道に落ちた。

男は小銃を取り落とし、砕けた右手の指を押さえてうなっている。あまりの早業にナオは目がついていかなかった。銃声は二度、あったような気がした。

「いつもながら大した腕だよ」

ヘイズは拳銃をかまえつつ、傷ついた男に近づいていく。

「さて、誰に頼まれたのかな？ 聞くまでもないけど」

黒ずくめはフェイスガードのなかから口ごもった。

「じ、人類は宇宙の……ゴミである。わ、我々が神に代わって、掃除を行うのだ」

「なんだって？」

ヘイズが聞き返したとき、シヨコラが叫んだ。

「さがって！」

男は爆発した。

後ろに跳んだヘイズは間一髪、砂利で顔を擦りむいただけで難を逃れた。

黒い煙はいつまでも燻っていたが、男の肉片や骨はどこにも落ちていなかった。

「けっこうやるじゃない、教授」

ヘイズはうつすら笑みを浮かべて立ち上がった。しかし拳は固く握られ、ナオが声をかけるまで、落とした拳銃のことに気づかなかった。

「頼まれたっていうより、ありゃあ、『教え』に従っていたって感じだったな」

ザルネルの言葉に、ナオはうなずいた。

「私もそう思いました。なにかカルトじみた匂いがしますね」

そのとき、ヘイズの小さな端末が懷でふるえた。取りだしてエアスクリーンを開くと、ジミー・リーベックの名曲に乗ってエアカーを運転する、エリック・ホワイトモアが映った。

「ど、どうなってるんだ!？」

『なんだ転送か。まあいい、そこで聞いてくれ』

エリックは事のカラクリを語った。

スモーキー一味と別れた後、真夜中の海浜公園を出口に向かって歩いていると、暗がりから男が現れていきなり銃撃を受けた。二発目のトリガーを引く前に、その男は自殺事件をほのめかす思想的なことを口走った。エリックは防弾ベストを着ていたが、無傷というわけにはいかず、反撃は難しいと見るや欄干を越えて海へ逃げた。殺し屋は泳ぎが不得手なのか、追ってこなかった。対岸に逃れたエリックはそのまま行きつけの警察病院へ向かい、無線で同僚に応援を頼むと、重体で入院したことにしてほしいと院長を説得した。あの殺し屋はなにか得体の知れない力で操られている。命を惜しむことなく、必ずトドメを差しにやってくるだろう。そう悟っていたエリックは、玄関や中庭に人員を配して敵の追撃を待ちかまえた。やがて『ISPO刑事が重体』の報が世に流れると、狙撃隊はいよいよ

よ緊張したが、反撃を警戒したのか殺し屋はなかなか現れなかった。そうしているうち、支部からアラン・シエクターらしき似顔絵似の男を発見したと応援要請がかかり、現在エリックは宇宙港へ向かっている、というわけだった。

病院を砦にするなんて無茶苦茶な人たちだとナオは思ったが、その警察病院に限って入院患者は、上司の命令を無視して怪我をした突貫野郎ばかりが送られているのだと知って、少しだけ納得がいった。

『殺し屋を逃したのは悔しいが、黒幕を捕まえちまえば後は……』

エリックはそこまで言って、エーカーの無線に耳を傾けた。

『なにい？ 宇宙へ逃げられた？ 馬鹿野郎！ なんて宇宙港を閉鎖しなかった！』

刑事は横のドアガラスを叩いた。

ヘイズはさりげなく言った。

「その、ジミーはシロだったということで、報酬の極秘ファイルのことなんだけど……」

『ああ、すまん。これからすぐ奴を追って、宇宙へ出なければならなくなった。その話はまた今度な』

「あ、ちよつ……」

その後いくら呼びだしても、エリックは電話に出なかった。

刑事たちが宇宙へ飛び立ってから十数日後、アラン・シエクターことジャン・ジャック・ジャブイーユの追跡は、別の惑星支部へ引き継がれることになったと、雇った情報屋から連絡が入った。エリックのほうは相変わらず音信不通で、ヘイズたちはあれこれと手をつくしてみたが、彼の足取りをつかむことはどうしてもできなかった。

エリック・ホワイトモア恐るべし……コクピットの窓に広がる赤い星雲を眺めていたナオは、紅茶をすすりながら心の中でそうつぶやいた。

連日のただ働きにとつと疲れたのか、ヘイズとザルネルは自室でふて寝しているようだ。シヨコラだけが一人大きな声をだして張りきっていた。少女はザルネルの部屋の前にすわりこみ、この間の約束を果たせと今もドアを叩きつづけている。

食べ物の恨みもまた恐るべし……ナオはカップを置くと、クスと笑った。

第六話 深海にねむる悪魔の舌

1

ナオ・シーダースは知らない国の言葉で書かれた歴史図鑑を閉じると、それを枕にしてテーブルへ突っ伏した。

「いつまで待たせるつもりなんでしょうかね」

スモーキー一味は、とある大学図書館の片隅で長机を囲んでいた。約束では朝の開館時間くらいにということだったが、腹の虫はもう二度もないでいる。それだけならまだしも、見慣れぬオヤジや子供連れの団に、来る人来る人が奇異の視線をなげかけてくることは耐えがたいものがあつた。

「俺はかまわんよ。興味ねえもんに囲まれてたほうが予想に集中できるとは、ちよつとした発見だったぜ」

ザルネル・ウレバスキンは、ローマ神話や三国志などの全集がならぶ書架にはさまれた場所で堂々と競馬新聞を広げていた。

シヨコラ・ビーメイは古代の武器が載っている絵本をながめながらも、来たときからずっと貧乏ゆすりをつづけていた。館の入口にいた巨漢の女司書が、少女必携の小さなゲーム機をとりあげてしまったのだ。あの人の勤務時間にはパソコン一つ持ちこめないと、学生たちの迷惑がる声がちらほらと聞こえてくる。

そして我らが代表ヘイズ・スモーキーJrは、依頼人がやってくるまでの退屈な時間をどう過ごしているかというところ……ナオは冷たく細めた目を、書架の縁のほうへ流した。

育ちのよさそうな黒髪の女が、何冊もの本をかかえて閲覧コーナーへやってくる。

白スーツの男はさりげなく言い寄った。

「あつ、どうりで探してもなかったわけだ」

女はどきまぎして本の背表紙をたしかめた。

「ご、ごめんなさい。どの本でしたか？ お急ぎなら先に……」

「そうじゃないんだ」

「えっ？」

「どうりでキャンパスを探してもなかったわけだ。僕の人生を薔薇色に変えてくれる、君という天啓の書がね」

ばささ！

女は真っ赤になって本を取り落とした。

まずい……ナオは顔をしかめた。朝から放ちつづけてきた下手な鉄砲も、一発くらいは当たりそうな気がしてきた。

こっちへ引きずり戻してやろうと席を立ったときだった。

学生の後ろにいた女が、分厚い本に目を通しながら言った。

「ウチの研究生に手え出さないでくれる？ 今はいてくれないと困るんだから」

「き、君はまさか……ずっとそこにいたのかい？」

「えっ？ あ……」

四角いメガネをかけた年頃の女は、あわてて本を閉じると書棚に収めた。

「ごーめんごめん、開館前からいたんだけど、読みだしたら止まらなくなっちゃって……」

依頼人の名はロゼッタ・シャンポリオン。ヒエロ大学文学部で准教授をつとめる『自称』新進気鋭の考古学者だ。

ナオはため息をついた。

「ヘイズさんこそ、ナンパに夢中で気づかなかったようですけど？」
いたたまれない顔で立ち去る黒髪の女。

ヘイズは白メガネのブリッジに手をやった。

「ま、大事なことを忘れるほど夢中になれる『なにか』があるってのは、いいことさ」

「その大事なことが、あなたの生業だつてことをお忘れなく」

ナオの厳しい言葉に、男はそそくさと席についた。

ロゼッタ准教授は革ベストのポケットから布きれを取りだすと、

メガネをふいてまたかけ直した。

「で、依頼のことなんだけど……」

ロゼッタは宇宙に散らばるオーパーツ——その時代の文明では（あるいは現代においても）製造不可能とされる人工物——について研究していた。なかでも、証拠はちらほらあっても未だ発見されていない、『宇宙の七大オーパーツ』を追いかけていた。

カルカンという惑星全体が遺跡化した星がある。研究者たちの間では『悪魔の舌』と呼ばれる特級オーパーツがそこに埋まっているらしいということは、先人たちの努力のおかげですでに判っている。問題は遺物が惑星のどこに眠っているかだった。

独自に調査を進めていった結果、『悪魔の舌』は深海の底にあると、若き考古学者は誰よりも早くつきとめた。そこまではよかったのだが、お宝の反応がある海域のまっ暗な深みでは巨大海洋生物が幅をきかせていてどうにも近づけないため、ロゼッタは助っ人を求めているのだった。

話を聞き終えたヘイズは素っ気なく言った。

「僕らは便利屋じゃあないんだけどね」

「もしかしたらその怪物たちの宝物なのかもしれない。そしたらお望み通り『盗んだり奪ったり』することになるわよ？」

「それじゃますます気乗りがしないね。誰かの宝を盗むなんてさ」

およそ強盗らしくないヘイズの言葉に、ナオは心を震わせた。彼は罪もない人から大事な金品を奪うという依頼だけは絶対に受けない男だった。のぞき常習のヘンタイだけど、かかげたポリシーからブレないところだけは気に入っていた。のぞき常習のヘンタイだけだ！

ロゼッタは微笑んだ。

「さっきのコ、紹介してあげてもいいんだけどなア」

「えっ？」

ヘイズの鉄の誇りは、いともあっさりチリ紙と化した。

ザルネルには数学部のギャンブル理論第一人者による個人授業を、

そしてシヨコラには家政学部の試作菓子食べ放題を確約して、ロゼッタは一味の心の牙城を次々と切り崩していった。

「ナオさん。我が考古学研究室は今、調査助手を若干名募集してるんだけど、どう？ お給料はそれなりだけど、誰かに注目されたり、恥をかいたり、危険な目に遭ったりってことは滅多にないわよ？」

「い、いえ、その、私……」

調査と甘言の達人を前に、ナオはたじろいだ。この人、メンバー一人一人の弱みを完全に把握してる。

ヘイズたちの視線が痛い。ああ、そんなオモチヤを取り上げられて悲しんでる子供みたいな目をしないで……。

調査助手のポストは、宇宙の荒波にもまれてきたナオにとって、砂漠に現れたオアシスだった。

だけど……そのオアシスに、彼らはいない……。

「私は代表の決定に従います。ですから、そのような特典は必要ありません」

「そ、そう？　じゃあ決まりね」

ロゼッタは一目置いたような顔をした。

前のめりになっていたヘイズとシヨコラはどつと背もたれに崩れた。ザルネルは新しいタバコを口にくわえたものの、ここがどういう場所か途中で気づいてさっと箱に戻した。

砂漠をさまよう暮らしも悪くはない。彼らと一緒になら……ナオはひとり微笑んだ。

「ところで」ヘイズは准教授に訊いた。「宇宙の七大オーパーツというのは、他にどんなものがあるんだい？」

ロゼッタは得意げに語った。

「まず『過去へ行くタイムマシン』でしょ、それから『未来を写すカメラ』に『変身用コンパクト』に『超能力養成ギプス』……んで『蘇生の秘薬エリクサー』に『不老不死の妙薬』と。えーとそれから……『一定時間無敵キノコ』とか『天使の翼』とか『矛盾の矛盾^{ほこたて}セット』とか『動物語大辞典全百万巻』ってのもあったわね」

ザルネルは言った。

「七つ以上あるじゃねえか」

「そ、そうだった？」

ロゼッタはぶつぶつ言いながら指折り数えた。

今度はいったいどんな災難に巻きこまれることやら……ナオは知らない国の言葉で書かれた歴史図鑑を枕にテーブルへ突っ伏した。

2

惑星カルカンは地表の九十五パーセントが海という、宝石アクアマリンのような美しい星だ。以前はもつと陸地が多かったのだが、ある時期に気温が急激に上がって極地にあった大量の氷雪がすべて溶け、海面が五百メートルも上昇、オーパーツといわれる『悪魔の舌』を創りだした地球系外高度文明のほとんどは、数日のうちに水没してしまったのだという。宇宙各地の考古学者は小さな陸地に残されたわずかな遺物から、今のところ有力とされるこれらの説を導きだしたのだった。

果たして『悪魔の舌』とはいったいなんなのか。古代カルカン人は劣化しない特殊な紙に記録を残していたようだが、肝心なページは何者かが破り去ったのか、失われていた。専門家はその地に伝わっていた神話や詩から、それは現代科学を超えた恐ろしい武器である、なかに悪魔が住んでいて黒い舌のようなものが飛び出す、最後に保管されていたのは海沿いの尖塔である、ということを読み解くのがやっとだった。

場所については諸説あったが、新進気鋭（自称）のロゼッタ・シヤンポリオン准教授はそのどれにも同調せず、独自の根拠を頼りに海洋調査をくり返していった。そして、ある日ある沖で、探知器の奇妙な反応に気づいた。船の真下はるか海底に、生物とも金属ともいえない数値を打ち出す『なにか』があった。ロゼッタはそれが『

悪魔の舌』であると確信して潜水艇を下ろそうとしたが、思わぬ障害にぶつかった。お宝が眠っている深海域は、全長五十メートルから百メートルはあるうかという、海獣たちのなわばりのど真ん中であつたのだ。

天地海万能型宇宙船　ヘリオドール　をもつてしても、行くことができない場所がある。その一つが水圧のかかる深海だ。

別の惑星に寄つて借りてきた黄色い潜水艇　サンダースⅤ世　は、三人乗りだった。航海長は当然ザルネルで、兵装とロボットアーム操作はシヨコラ、あと一人を誰にするかでヘイズとナオがもめた。

結局、ヘイズと依頼人のロゼツタが、海上に浮かぶ黄金のクジラ　ヘリオドール　で指揮をとることになった。依頼人は危険に遭わせるわけにはいかないからいいとして、「実は閉所恐怖症なんだ」というヘイズの言い訳が、ナオは気に入らなかった。どうせロゼツタにちよっかいを出すに決まつてる。でも、まあいいか。彼女が愛しているのはきっと、土や石や青銅でできた男だろうから……。

そういうわけでナオは今、サンダースⅤ世　の一席に収まっている。球形をした耐圧殻のなかは、計器類や酸素タンクや食料庫などがスペースの半分を占め、三人は互いに背を向けるかたちで、バスの補助席のようなシートにすわっている。居心地はとても快適とはいえないが、それでもイスがそろっている分、昔に比べたらマシなのだそうだ。今から数百年も前に革命的な宇宙航法を生んだ地球人類は、次元の架け橋を渡して何千万光年の深宇宙さえ旅するようになったというのに、なぜか深海への興味は未だ薄いようで、技術が進歩せず、謎も多いままだった。

航海長ザルネルは、深度計の赤いデジタル数字やCGによる海底断面図を確認しながら、操縦桿を動かしていた。

現在の深度は二〇三メートル、大陸棚の底をちょうど真横から見るかたちになっている。海底はそこから一気に数千メートルも落ち

こみ、その先の海溝へとつながっていた。

ロゼッタが見つけたオーパーツらしきものは、海底崖の中腹、深度約四千メートルのところで反応を示している。通信係のナオは『悪魔の舌』が発見時と同じ場所にあることを海上に伝えた。

ナオの手元にある小さなモニターには、ヘイズとロゼッタが並んですわる姿が映っている。ヘイズはこちらに生返事をしただけで、白メガネ越しの視線はロゼッタに釘づけだった。

『そのメガネ、取ってみてくれないか？』

『え？ これ？』

ロゼッタは言われた通りにした。

『やっぱりだ。僕の目に狂いはなかった』

『なにがよ』

『せつかくのいい素顔を隠してしまうなんて、もったいないと思っ
てね』

女は上目遣いで男を見つめた。

『もしかしてあたし、口説かれてる？』

『そんな……僕はただ本当のことを言っただけさ』

海の底にいる三人はこの様子を、深夜のB級恋愛ドラマを見るような、しらけた目で見守っていた。

『遺跡に入り浸ってるあたしと一緒にいたって、ちつとも楽しくないと思うけど？』

ヘイズはロゼッタの手を取り、言った。

『もう充分に楽しんでるさ』

『ふーん。じゃ、いいわよ』

『は？』

『聞こえなかった？ あなたとつきあってあげてもいいと言ったの
「えーっ！？」「ウソお？」「マジかよ！」』

小さなモニターを前にひしめく三人は叫んだ。

あまりの呆気なさに、ヘイズ本人もどう言葉を継いでいいかわからないようだ。

ロゼツタはメガネをかけ直すとつづけた。

『ただ、条件が一つあるわ』

『殺し以外なら、なんなりと』

『あなたのその白いメガネ、さつきからずっと気になってたのよね。それを外して調べさせてくれたら、あたしを好きにしてもいいわ』

謎を解くためなら、大して好きでもない男にさえ身を捧げるなんて、なんという研究者根性だろうとナオは思った。

『そ、それだけは……』

ヘイズはうめいた。好みの女が手に入る幸運と、秘中の秘を明かさねばならない不運との間で揺れているようだ。

『あたしのこと、欲しくないの？』

今度はロゼツタがヘイズの手を握った。

『ほ、ほし……いや、でも……』

たじろぐヘイズ。

海底のナオたちは生唾を飲みこんだ。これまであえて触れないようにしてきたけれど、本当はヘイズの不思議なメガネのことを知りたくてたまらなかった。心の隅っこに妙な引っかかりを感じながらも、ナオはヘイズが誘惑に負けることを期待した。

『すまない。それだけは、どうしてもできない』

男は女の手をそつと外す。

ロゼツタは微笑んだ。

『それは残念。でも、その気になったらいつでも声かけてね』

「はあーあ」

海底の三人はため息をつく、のろのろ持ち場へ戻っていった。恋が叶わなかったばかりだというのに、気軽に仕事の話を進めていく二人。それをモニターでながめながら、ナオはあることを思いだしていた。チャンピオンベルトを奪ってほしいという依頼で、宇宙最強の格闘家と闘ったとき、ヘイズは腹をがら空きにしてでも顔を打たせなかった。

まさかとは思うけど、瞳に強い光が入ると自爆する仕掛けになっ

ている……とか？

ドガン！

「ひっ！」

ナオは頭を抱えた。

どこかでなにかが爆発したようだ。

「ごめんごめん、ポリュームのとこ触っちった」

シヨコラは、もはや考古学の域に入ろうかという携帯ゲーム機『ディーエスファイトDSF』で『ボンバーさん』という、爆弾で敵を追いはらうゲームに興じていた。

「海上に出るまで預からせていただきます」

ナオがゲーム機を取り上げると、少女は泣きついた。

「だって武器係、やることなくてヒマなんだもん！」

「いや、そうでもなさそうだぜ」

ザルネルはうめくように言った。

3

深度計は二五〇〇メートルを示していた。

サンダーSEV世は、異様に首の長い海竜のような生物の群れに取り囲まれていた。その様子を三次元グラフィックレーダーが俯瞰的に映しだしている。自分のことなのに他人事のように見えてしまふそれは、誰にとってもあまり気持ちのいいものではなかった。

全長十五メートルの潜水艇の五倍はあるうかという首長海獣の群れは、ナオたちを囲んだきり沈黙を保っていた。

シヨコラは耐水圧魚雷のレバースイッチに手をかけると、艇の真正面にいるボスらしき大きな一頭に狙いを絞り、いつでも迎撃できるかまえていた。

ナオは不安でならなかった。深海の水圧をものもしない体をもった異端の怪物たちのことだ。これまでに知られている生き物の常

識が、果たしてこの場面で通用するだろうか。

両者のにらみ合いが十分ほどつづいた頃、正面の巨塊が大きな口を開けた。

どんな吼え方で威嚇してくるのかと思いきや、出てきたのはモールス信号を甲高くかすれさせたような、可愛い音ばかりだった。

ナオたちはそろって席からすべり落ちそうになった。海の生き物の鳴き声としてはまともな部類に入るのだろうけど、あの巨体にある声はどうなのか。

「奴は怒ってんのか？ それとも笑ってんのか？」

ザルネルが首をかしげるのも無理はなかった。ほとんど信号を聞いているようなもので、音の調子だけでは感情が読みとれないのだ。

「どっちかかっていうと、お説教してるように見えるけど？」

シヨコラが言っていると、ナオもそんなような気がしてきた。激しく怒りちらすというよりは、くどくど小言をたれているような口の動きをしている。

『ウソ……信じられない』

小さなモニターのなかで、ロゼッタは言った。

艇の内外の様子は、そのまま ヘリオドールのコクピットにも反映されるようになっていく。

ロゼッタは鼻息を荒くして、ボロボロの手帳をめくりはじめた。

「ど、どうしたんですか？ 急に」

『わかる……わかるのよ！ 彼らの言っていることが！ ああ、それもわかる！』

考古学者のくせに動物の言葉がわかるというのか……ナオは眉をひそめずにはいられない。

ともかく、ロゼッタは海獣の言わんとしていることを標準語でまとめた。

群れで一番大きな、ボスにして長老の『ピークック・キュツピー・ピクピー』——訳すと小海老原さんシュリンプフィールドといったところか——が言うに

は「人間よ、いい加減に文明を捨てて、あるがままに暮らしたらどうか」とのこと。

古代カルカン人による遺伝子研究の果てに、彼らの先祖は生まれた。ある嵐の夜に生け簀から逃げだした実験海獣たちは、海の底でひっそりと暮らしながら世代を重ね、地上の盛衰を見守ってきたのだった。

海獣たちは人間によって人間並みの知能を手にしたが、愚かな創造主を悪い手本として生きる道を選び、決して消費社会を築こうなどとは考えなかった。考えなかったというよりは、先祖から受け継いできた遺伝子に刻まれた『なにか』がそれを許さなかった、と言うべきかもしれない。

ロゼッタが海獣の言葉を解したのは、考古学研究のたまものだった。彼らは創造主である、古代カルカン人の言葉を母語としていたのだ。

『文明を捨てたいのはやまやまんだけど、今のあたしはそれどころじゃないの。大事な落とし物を拾うだけだし、なわばりを荒らしたりしないから、そのずんぐりした黄色いやつを通してあげてくれない？』

ロゼッタはカルカン語で言った。その音を受信した潜水艇は、円盤形の水中スピーカーからそのまま海へ伝えた。

長老の目もとがぴくつと跳ねた。

「なんだ、話せる者がまだいたのか。無駄と考えることも一度はやってみるものだな」

『えっへん』

ロゼッタは偉そうに腕を組んだ。それこそ無駄なのだが……。

「愚か者のなれの果てを拾って、どうしようというのだ」

『どうってことないわ。それがなんなのか、知りたいだけよ』

「ほんとうに変わった生き物だな、人間というやつは。この世にもし神とやらが存在するのなら、とんだ見落としがあったものだ」

『見落としかどうかは、もっとうんと先になってみないとわからない』

いわ』

「まあよい。勝手に持っていくがいい。ネズミの子は所詮、ネズミか」

『それをいうなら蛙よ』

「皮肉の通じない娘だ」

シュリンプフィールド長老はそう言い残し、向こうへ去っていった。他の海獣たちもそれぞれの居場所へ散っていった。

サンダースⅤ世 は『悪魔の舌』が待つさらなる深みをめざし、潜行をはじめた。

4

「深度四〇一メートルか。そろそろ見えてくるはずだが……」

海底崖に向けられた船外カメラの映像を、ザルネルは食い入るように見つめていた。

海草一つ生えていない絶壁のわずかなでっぱりに、へばりつくようにしてうごめく白い生き物がある。カニの仲間だ。他にも、ウニやエビやヒトデに似たものがうようよいる。こんな暗黒の荒野で、彼らはいったいなにを食べて生きているのだろう。ナオは小さな丸窓に顔を寄せ、夏休みの子供のように海中を観察していた。

ふとした瞬間、サーチライトの光にキラリとなにかが反射したような気がした。

「あそこになにかあります！」

ナオは窓の向こうを指さしながらふり返った。

目標がカメラの正面にくるよう、ザルネルは艇を進めた。

石斧のようでもあり、壊れたブーメランのようでもあるが、それにしては小さすぎる。ともかく、白っぽい石灰質のようなものがこびりついていて、ここからではよくわからない。

「むむ……これは銃だね」

モニターを見ていたシヨコラは、白石のベールはくせきの欠けた部分をさして言った。

映像を拡大してみると、たしかに銃口の先端とおぼしきものがわずかに見えていた。

銃と知って急にはりきりだしたシヨコラは、苦手なコンピュータ画面をどうにかやつつけてロボットアームを動かすと、石の皮をかぶった遺物を崖からきれいに引きはがしてみせた。

「ようし、今度の仕事も一丁あがりだ」

ザルネルはロボットアーム下の採取物用バスケットに獲物を入れるよう、シヨコラに命じた。

「ちよつとまって」

シヨコラは言うつと、アームの手先を細かく動かし、化石の不要物を取り除いていった。

「そんなのは後にしろ！」

「だって、早く見たいんだもん！」

少女が怒鳴り返したとき、よそ見をしたせいで手元が狂った。

「あーっ！」

機械の手からこぼれた拳銃らしき遺物は、海のさらに深いところへ沈んでいった。

「クソ！ 潜行する！」

ザルネルはバラストタンクの注水レバーを引いた。

謎の銃は比重が大きいのか、どんなに潜ってもなかなか追いつかなかった。

もどかしい時間がしばらくつづいた。

やがてナオは、小さなモニターのなかで緊張する二人に告げた。

「深度七五〇〇です」

ヘイズは言った。

「急いでくれザルネル。その潜水艇の限界深度は八〇〇〇メートルなんだ」

「んなこたあわかってら！ だから安もんは借りたくなかったんだ

！」

白メガネの男は眉尻を下げた。

『払うべきものを払った後じゃ、それで精一杯だよ』

「……悪かったよ」

ザルネルはぶすつとして、それきり大人しくなった。

ナオ以外の三人は、返済やら支援やらで多額の資金を必要としていた。それについては互いに干渉しないことになっているらしく、詳しいことはナオにもよくわからない。

それはともかく、サンダーSEV世には圧壊の危機が迫っていた。

「深度七八五〇……七八七五……」

ナオのコールは、発するたびに小刻みになっていった。

「深度七八八七・五……」

5

ザルネルは口笛をならした。

「嬢ちゃんよ、俺はやっぱあんたが幸運の女神だってことを信じるね」

ナオは海底断面図が映ったモニターを見つめた。

大陸棚から落ちこんできた海底崖は、ちょうど深度八〇〇〇メートルのあたりでいったん緩やかになり、その先の海溝につながっている。『悪魔の舌』らしき謎の銃は、艇の限界深度のほんの少し先にある、幅三メートルほどの岩棚の縁に引っかかっていた。

「し、深度七九九八・二七五……」

圧壊を恐れるナオは、いつしかミリ単位まで口にするようになっていた。

ザルネルもシヨコラもそのことに気づいておらず、ロゼッタが海上からツツコンでくれなければ、さらに細かくなるところだった。

下手くそなチェロのような艇のきしる音に囲まれた三人は、生きのびるため、自分のやるべきことに全神経を傾けていた。

「深度八〇〇四、限界深度を超えました」

サンダーズⅤ世 は『悪魔の舌』の正面、手をのばせば届くところにいる。

「わかつてるな？」

ザルネルが低く言うと、シヨコラはうなずいた。

わがままもおふざけも、今回ばかりはフォルダにしまっておくしかないようだ。

サーチライトを浴びて青光りする古代の遺物。シヨコラは左右のスロットルレバーを動かしてそれを拾い上げた。あとはロボットアーム下のバスケットに入れるだけだ。

アームを引こうと、少女がスロットルを手前に倒したときだった。

『悪魔の舌』は機械の手をするりと抜け落ちた。

「あつ！ バカ！ ちよっ！」

シヨコラはレバーをがちゃがちゃいわせて遺物をお手玉する。

お宝は狭く切れこんだ海溝へ沈んでいった。

間髪入れず、ザルネルは予備のバラストタンクに海水を入れた。

『なにしてる！ 引っ返せ！』

モニターのなかでヘイズが叫ぶ。

ザルネルは笑った。

「へへ……こういう艇のスペックには遊びがあるもんなのさ」

『それはもう諦めるから、無茶はダメ！』

さすがのロゼッタも動揺を隠しきれない。

「深度八〇五〇！ 海溝の幅が二十メートルを切ってます！」

ナオは叫んだ。

手元にあるランプの多くが、緑から赤へと変わってしまった。それがなにを意味するのか、素人にはわからない。わからないだけに、かえって恐ろしい。

遺物は海溝の岩壁にあたって回転、沈むスピードが一瞬遅くなっ

た。

「きたっ！」

シヨコラは『悪魔の舌』をつかまえ、今度こそバスケットに収めた。

「よっしゃ！ 上昇^{あが}ぜ！」

ザルネルはレバーを引き、船体下の重り（ウエイト）を一切り離した。

轟音。

アラートが鳴り響く。

「ああっ！」

ナオは両手で顔を覆った。

「なんだ？ どうした！」

「浸水多数。バラスト用の圧搾空気が漏れてます。重り（ウエイト）の連結器も……破損しました」

サンダーズⅤ世 は限界深度のなかで浮力を失った。

6

「こんな海の底が、俺たちの墓場になっちまうなんてなア」

艇のあちこちがきしり、潰れる音がするなか、ザルネルはタバコを一つふかした。

「けほ、けほっ！」

ナオはタバコを取り上げると、壁ぎわに収まる酸素タンクの丸みにおしつけた。

「マニュアル、ちゃんと読んでなかったんですか？」

「読書はやるが、あいにくそういうのは苦手だね」

「読書って……」

競馬新聞しか読まないクセに……。

「で、なんかいいこと書いてあったのか？」

「この潜水艇は耐圧殻やロボットアームのある『コントロールパーツ』から、バラストや推進機のある『パワーパーツ』を解離できる
そうです」

「浮力はどうする」

「コントロールパーツには、非常用のバラストと圧搾空気が付いて
ます。その赤いボタンを押すと、隠し扉が開いて操作できるよう
になってます」

「そ……そんなところに凝ってんじゃねえよ！」

ザルネルは艇の設計者を罵ると、あわててボタンを押した。

コントロールパーツは小さいダメージを負っていたものの、どう
にか潰れずに安全深度まで上昇してくれた。パージしたパワーパー
ツはあつという間に小さくなって、永遠の闇のなかへ沈んでいった。
あと数分、マニュアルの存在に気づくのが遅れていたら、今頃ど
うなっていたことが。そう考えるとナオはめまいがした。

7

ヘリオドール は潜水艇の前部を回収すると、水しぶきをあげて
空へ、そして宇宙へと飛び立った。

惑星カルカンの深く青い光をバックに、コクピットの小さな広場
では、クリーニングしてきれいになった『悪魔の舌』のお披露目会
が行われていた。

ロゼッタが手にするトレイの上にあるものを見つめながら、ヘイ
ズは首をかしげた。

「これが悪魔の舌、ねえ」

ナオは苦笑いした。

「なんか可愛いですね」

それは恐ろしげな名前とは似ても似つかないものだった。見かけ
の形はスパイが好む小型拳銃のようでもあるが、よく見ると細部は

省かれていて、実弾などはどこにも入りそうになく、まるで駄菓子屋に売っているオモチャだった。その毒々しいメタリックブルーの輝きがまた、大量生産の二セモノっぷりを遺憾なく主張している。

青い銃を見つめるロゼッタの目に、落胆の色はない。見た目の迫力と考古学的価値は別物ということか。

「で、これのどこがオーパーツなんだ？」

ザルネルの問いに、ロゼッタは答えた。

「文献によると、武器のなかには悪魔が住んでいて、そいつの舌は持ち主の意思に反応して飛びだすらしいのよ」

「それだけか？」

「現時点でわかってることはね」

ザルネルは興味が失せたらしく、自分の席に戻っていつもの競馬新聞を広げた。

「しかし、それが本当なら、じゅうぶん科学の域を超えてるんじゃないかな」

ヘイズの言葉に、ナオも賛成だった。

「そうですね。持ち主の意思に反応するなんて……悪者の手に渡ったらどうなることか」

ロゼッタは言った。

「その心配はなさそうよ。これはある意味、失敗作なの」
「？」

ヘイズとナオは顔を見合わせる。

考古学者はボロの手帳をべらべらめくった。

「『悪魔の舌』について語ったであろう神話を読み解くとね、それを扱う者は純真な子供に限られていた、ということがわかるの」
「た、たしかに失敗作のようですね」

ナオは脱力した。

「どうやって創ったのかは知らないけど、ま、天使と悪魔は紙一重ってことなのね」

「変にまとめないでください！」

『悪魔の舌』の真相はともかく、スモーキー一味は契約を果たした。話が報酬のことに移ると、ロゼッタは急にもじもじして筋の通らないことばかり言いはじめた。

「まさか、今頃になって払えないっていうんじゃない……」

ヘイズが迫ると、女は下を向いた。

「キャツシュでは……その……ちよつと……」

「星域一の名門大学だから、予算は潤沢にあるって……」

ヘイズとロゼッタは図書館を出る前に、契約料の話をつけていた。

「それは理系学部の話。あたしら文系はずつと後にできたから、まだ名前に追いついてないのよ。考古学^{ウチ}科の研究室は特に、ね」

雀の涙よりは少々マシな程度の予算しかまわってこない上に、ロゼッタがあちこち出かけて一人で使いこんでいるため、彼女の研究室はいつも赤字だった。

「どうしてくれる？ 体で払うか、あ？」

シートをまわして競馬新聞を傾けると、そこにザルネルの血走った目があった。

「ぼ、僕としてはそっちのほうか……げふ!?」

鼻の下を緩ませるヘイズに、ナオは尖った肘を食らわせた。

ロゼッタは青い武器の銃身を持ち、シヨコラに手渡した。

「ボクに？」

「あげるわ。それを扱えるのはきつと、あなただけだと思う」

果たして『悪魔の舌』が報酬に見合うものかどうか、今の時点では誰にもわからなかった。

「世も末だな、研究中の発掘品^{ブツ}を売っちゃまう考古学者とはよ！」

ザルネルの厳しい言葉にもめげず、ロゼッタは話を進めた。

「研究はつづきたいの。だから、データを送ってくれたり、どうしても必要になったときにちよつと貸してくれたりすると、うれしいんだけど。もちろんお礼はするわ」

「ふざけんなよ。そんなもん闇市かなんかで売っ払うまでだぜ」

「考古学的に、いや科学史においてさえも、それがどんなに貴重な

ものか、ぜんぜんわかってない……」

ロゼッタの目尻に光るものがあつた。

「こうして会つたのもなにかの縁ですし、レンタル制にしてあげる
つてことでいいじゃないですか」

ナオがなだめようとすると、ザルネルは新聞を放りだして怒鳴つた。

「嬢ちゃんは無言でな！ こっちも生活がかかってんだよ！」

「大人げないぞ、ヒゲジイ！」

珍しくシヨコラはしかめ面をしている。

そう思つた瞬間、シヨコラの手もとからどろっと黒いものがのび
ていつて、ザルネルの顔をぐるぐる巻きにしてしまった。

「ん！ んん！」

ザルネルは息ができずに悶えている。

「ん？ なにこれ？」

シヨコラは手にしていた『悪魔の舌』を見た。

すると黒いものは、あつという間に銃口の奥へ引っこんでしまつた。

「ハアハア……今のが……舌つてやつなのか？」

ザルネルは真つ赤な顔で肩を上下させている。

シヨコラは微笑んだ。

「ハハン、なるほどね」

「な、なんだよ」

「ヒゲジイをやっつけたいなア」

シヨコラはつぶやいた。

すると青い銃身から黒い棒のようなものが飛びだしてきて、にゅ
っと太くなると、ひげ男の顔を激しく突き飛ばした。

どうやら報酬に見合う品のようだ——ザルネルだけは断固反対し
たが——ということで、スモーキー一味はロゼッタを許すことにし
た。

以後、『悪魔の舌』は『ブラックエンジェル』と名を変え、シヨコラの主力武装として活躍することになる。

8

スモークー一味はロゼッタを大学まで送った後、宇宙空間へ戻り、次の依頼が入るまでの退屈な時間をコクピットですごしていた。

「ったくよ、死ぬような思いまでして手に入れたのか、そんなオモチャだったとな」

ザルネルはあれからずっとご機嫌斜めだった。

「でもまあ、なかなか面白そうな飛び道具じゃないか」
ヘイズは言った。

「弾丸をぶちまけるよりはマシでしょうけど、武器は武器ですよ」

平和主義のナオとしては、あまり首を突っこみたくない話だった。
「おいおい、二人ともなんでそんなに落ちついてられんだよ。レנטアルした潜水艇を潰しちまったんだぜ？」

シヨコラの『ブラックエンジェル』が黒いものを噴いた。

「すんだことをグチグチいわない！」

「ん！ んん！」

第七話　ディープ・パープル・ヘイズ

1

まっさらなデスクの上。なにもない空間を、真夏のビーチの映像が占めていた。

画面が暗転する。男は立ち上がり、窓壁のほうへ歩んだ。

部屋がひとりでに暗くなる。頬のたれかけた男の顔は、瞬くことのない星々へと変わった。

男は唇の左右に深い溝をつけ、笑った。

「やっと見つけたぞ、坊主^{ボーイ}」

デスクにすわり直し、隣室に控えていた部下を呼び寄せる。

髪を結い上げた軍服の女が敬礼し部屋に入った。

男は組んだ手にアゴを乗せて言った。

「又ジャンカ大佐と連絡をとりたい」

タイトスカートの下にのびる白い脚がきゅっとひきしまった。

「司令……」

軍服の男はシートをまわし、大きな星図を見上げて言った。

「たまには労ってやらんとな。万が一、あの男が寝返ったりでもしたら、この戦争はあと五十年は長びくぞ」

女はほつと息をつく、敬礼して部屋を出ていった。

ドアが閉まり、自動でロックがかかると、男は口もとを緩めた。

「だが……坊主^{ボーイ}、おまえの『ディープ・パープル』が発動すれば、五年どころか五日で終わるのだよ」

2

スモーキー一味は、とある惑星のリゾートビーチでバカンスを楽しんでいた。

「たまに休むとなんか、かえって疲れちゃいますよ」

ビキニ姿のナオ・シーダースは大きなパラソルの下でゴロゴロしていた。

「売りだし時の女が、そんなことでどうするよ」

ザルネル・ウレバスキンは、ビーチチェアの上でくつろぎながら競馬新聞をめくった。年中スタジャンを着ている彼でも、さすがにここでは暑いらしく、今はＴシャツ姿。それでも『ベアトリックス』と刺繍された赤い帽子とおそろいの公式グッズという徹底ぶりだ。

「いったいどんなスポーツのサポーターなのか、ナオは未だによくわかっていない。」

「別に、売りだしたいからこんな格好してるわけじゃないんですけど……」

このビーチでは『ワンピース着用禁止』という、とんでもない条例があった。なんでも、競泳と区別するためとか……。市長も市長だが、それを許した市民も市民だ。やせて胸のない異星の黄色人種のことなんか、これっぽっちも考えてないんだから……。

「そういや、あの極北の田舎もんはどうした？」

「シヨコラさんはあつちです」

ナオはうつぶせのまま陸^{おか}を指した。

シヨコラ・ビーメイは老人用の避暑小屋で一人、トロピカル色のかき氷をはべらせ、満足そうにしていた。極寒の惑星に生まれた少女は、冷房の効いた部屋から一步も動こうとしない。

そして我らがリーダー、ヘイズ・スモーキー^{ジュニア}Ｊｒはというと……。「あれ？ さっきまでそこで黒いビキニの娘^こをナンパしてたのに……」

「物好きな雌魚を手網にかけて、その辺の生け簀に連れこんだんだろっよ」

ザルネルは記事にそう書いてあるかのごとく、カサリとも音を立

てずに言った。

「もう！ みんな休みのときぐらい、違うことすればいいのに」

「嬢ちゃんに言われる筋合いはねえな」

「うー」

ナオは悔しそうになると、汗ばんだ体をゴロリをまわし、仰向けになった。気持ちは青い海で水しぶきをあげているのだけれど、体のほうがついていけない。

「ジムにでも通ったほうがいいんでしょうかね」

「いらんいらん。この仕事をつづけてりや嫌でもタフになる。あのヴィヴィアンって赤毛の賞金稼ぎみてえにな」

「あんな海賊の頭目みたいな女と一緒にしな^{ひと}いでください！」

「黙ってりや、いい女なんだがなア」

ザルネルは期待の牝馬の写真を見つめながら、そうつぶやいた。

3

ヘイズ・スモーク^{ジュニア}は、ビーチの外れにある岩場の陰で一人たたずんでいた。ナンパをしている最中、急に頭が痛くなり、喧噪をきらつてここまで歩いてきたのだった。

「なにか思いだせそうな気がしたんだが……」

ヘイズは暗い笑みを浮かべた。

偏頭痛にも似た、目がくらむような痛みはもうなかった。無理をすれば、もしかすると思いだせるかもしれない。だが、そうしたところで得することなどあるだろうか。仲間が一人増えてから、男の自問は一層強くなっていた。

「さて」

ビーチに帰ろうと岩の段差に足をかけたときだった。

「あら、行ってしまうの？」

「！」

半裸の男はさつと身を翻した。

ブロンドの美しい女が、ビキニ姿で立っている。

ヘイズは訝しんだ。ビーチから崖が上がってこの狭い入江までやってくるには、それなりに体力が要る。この女は息一つ切らず気配もなく、背後から近づいてきた。

長い髪の女は顔をしかめた。

「なによ、まるであたしがマフィアの刺客だ、みたいな顔して」

「どうやってここへ入った」

「地元の人間ならワケないわ。この入り江には、古代の兵隊たちが掘った抜け道があるのよ」

「そいつは気づかなかったな……」

仕事でやってきたわけではないので、細かい地理までは調べていなかった。

「こんなところでなにしてるの？」

女は腰に手を組むと、上目遣いで男を見つめた。

「い、いや別に……」

ヘイズの視線は柔らかかそうな谷間に釘付けだった。

「変なメガネしてるのね」

女は近づき、男の顔に手をのばした。

ヘイズは反射的に払いのける。

「痛い……」

女は顔を歪めて手をさすった。

「すまない。これはちよつと外せないものなんだ」

「そんな真っ白でよく見えるわね」

「僕も不思議でしょうがないよ」

女はため息をついた。かと思うと、くるつと背を向けた。

「ま、そのままでいいわ」

さざ波の音だけがしばらくあった。

「？」

わけがわからず、男は眉をひそめる。

女は肩越しにふり返った。

「なにしてるの？ 背中が焼けてしまっしょ？」

「え？ あ、ああ……」

ヘイズはあわてて駆け寄り、女を背中から抱いた。

いつもと勝手が違うせいかわかめない。ふと気づくと、
なにもかも女のなすがままだった。

唇を放すと、女は微笑んだ。

「楽しかったわ」

「……」

ヘイズは女を見据えたまま動かない。

女はあごの先に手をやり、顔の厚い皮をはぎとった。

「あ、あんたは……」

男はそれ以上口がまわらず、岩の上にへたりこんだ。

「そう」

女はその場にかがみ海水で髪を洗った。黄金の糸束は魔法が解けたかのように色あせていき、カールした赤いものへと変わっていった。

ヘイズは薄れゆく意識のなかで、女の高笑いを聞いていた。

「悪いわね。懐が寂しかったから仕方なかったのよ」

4

ヘイズが姿を消してから三日。チェックアウトを済ませてホテルの玄関を出たナオたちは、宇宙港に戻るべきかどうか決めかねていた。

各自の端末から発信される位置情報の履歴をたどっていくと、ヘイズはホテルの部屋に帰っていることになっているはずだが、ベッドの下をのぞいても、クローゼットを開けても、誰もいなかった。ザルネルは海岸線を見つめながらタバコをふかした。

「痴漢で逮捕^{バク}られたか、テロリストに拉致されたか、でなければマフィアに殺^やられちまったかだな」

「嫌なこといわないでください！」

ナオの叫びに動じることなく、キャンプの男はもう一つふかした。「ま、手のこんだやり口を見た限りじゃあ、生かされてる可能性はあるな」

殺しが目的で、ヘイズほどのやり手を倒す腕があるのなら、こうして時間を稼ぐ必要もない……か。

ナオは顔を上げた。

「探しましょう！」

「どこを？」

「不自然な点が一つあります。ヘイズさんはなぜ、わざわざ入り江のほうまで足をのばしたんでしょうか」

「ダブルベッドより、青空の下のほうがいいんだろうよ」

「……」

ナオはむっとしてザルネルを睨みつけた。

「な、なんだよ」

「別に」

なんでこんなことに腹が立つんだか、自分でもよくわからない。

ともかく、ナオたちはビーチの外れにある岩場へ向かった。息を切らして小高い崖をよじ登り、ぬるぬるした緑色の斜面を下って、黒っぽい貝がびっしりへばりついた岩棚に出た。手がかりになるものは何一つ落ちていなかった。

ザルネルは狭い入り江を囲む岩壁を見上げた。

「こりゃあ、襲うにはもってこいの場所だなア」

ナオはすかさず言った。

「ふ、不潔な話はもうやめてください」

「ああ？ なんのことだ？」

「で、ですから……」

そこまで言ってナオはハッとした。

「ハハン」ザルネルはニヤと歯を見せた。「さては嬢ちゃん、ムツツリなほうのクチか？」

「ち、ちが……」

そのとき、ナオの胸が激しく揺れた。

「……はんっ！」

ナオは切ない顔で短くあえいだ。

「ほう？ 言葉だけで感じるとは、なかなかいい筋してるじゃねえか」

「ちがいますっ！」

ナオは真っ赤になつて、シャツの胸ポケットで震えている端末を取りだした。そこまではよかったのだが、あまりに激しく暴れるので、両手で包まないと持っていられない。こんな設定にした覚えはないのに……。

「ど、どどうなつててるんでしょうかねね？」

「かして！」

シヨコラはナオから端末を奪った。明滅するカラフルな光。その組み合わせからメッセージを読みとっている。

「今行くから」

少女が言つと、端末の震えは止まった。

宇宙船 ヘリオドール で控える人工知能（AI）ファイからの緊急連絡だ。コミュニケーション能力に大きな障害を抱える彼女は、言葉を使って意思を伝えることができなかった。

「きつとヘイ兄^{にい}の居所^{にい}がわかるんだよ」

ナオたちは入り江を後にして、宇宙港へ急行した。

宇宙船 ヘリオドール を陰から支えるAIファイは、口がきけず姿も見せられない状態がつづいていたが、他のAIにはない不思議

議な能力を持っていた。ファイは船主であるヘイズが宇宙空間のどこに飛ばされても見つけることができ、自動操縦で船を現場へ導いてくれるのだった。

ヘイズとファイの関係は気になるところだが、今は恩人を見つけだすことが先決だ。彼がいなければナオは今頃、峡谷の底で白骨化していたことだろう。

いつもなら『次元の架け橋』からワープアウトしてしばらくは、五感がおかしくなって席から動けないのだが、今日のナオはちがっていた。

シートベルトを外して立ち上がると、窓の外の闇を指さした。

「あの船っ！ 見たことありますよ！」

「んん……ああ、そうだったか？」

ザルネルは気だるそうな顔で言った。

「なんだっけなあ……」

シヨコラもぼんやりした目でつぶやいた。

さすがの二人も、跳躍後の何分かはまともに口がきけなかった。

「ほら……ペ……ペ……なんだっけ」

草色の鏝のような姿をした船を前に、ナオは地団駄を踏んだ。

「ペ？ ペ……ペ・ドンヨル？」

シヨコラが答えると、ザルネルは鼻で笑った。

「そりゃ、アンタレス賞の映画俳優だろうが」

「ペリドットよ！」

ナオが叫んだときだった。

コクピットまわりの機械が小さくうなりをあげ、エアスクリーンが起動した。

あ然とした顔でふり返ったばかりの男女が映った。

『な！？ なんだと？』『どうしてここがわかったのよ！』

銀髪を短くした強面の男と、カールした赤毛の女は同時に言った。「それはこっちが聞きたいくらいなんだが……」ザルネルはうなじをかいた。「ともかくだ、そっちにヘイズ・スモーキー・^{ジュニア}Jrってい

う色男が世話になつてゐるはずだぜ」

バリス・アズーリは強ばった顔のまま答えた。

「奴はもうここにはいない」

「気前のいい軍服さんたちが連れていったわ」

ヴィヴィアン・ローズはふっと笑った。

ザルネルは舌打ちした。

「賞金稼ぎめ！」

「撃墜つちやおうか？」

シヨコラはアーケードゲーム風の画面を起ち上げ、ジョイスティックを握った。

「まあ、待てよ」バリスは両手を見せた。「今、あんたらとやり合う気はないね」

ヴィヴィアンは腕組みして言った。

「彼がどこへ連れていかれたのか、あたしらは知ってる」

「あいにくだが、ウチにはやけに鼻のきく御犬様がついてるんでね」ザルネルの言葉に、バリスは顔をしかめる。

一方、ヴィヴィアンは落ちついていていた。

「なら、そのワン公はなぜ、こんなところでぐずぐずしてるのよ」
「そういえば……そうですね」

ナオたちは顔を見合わせた。

ペリドット の背後をよく見ると、もやつとした半透明の壁がどこまでも広がっている。ナオはヘイズの席に移り、透けた天球儀の縮尺を変えていった。中心の ヘリオドール がどんどん小さくなっていき、やがて薄い雲のようなものが一つの星系を包みこんでいる様子が映った。あれが川の役目をしてヘイズの手がかりを吸い取ってしまった、ということも考えられる。AIFアイの鼻は——もしあればだが——なにもない宇宙空間でしか力を発揮しないのかもしれない。

「今後の態度によっては、教えてあげなくもないけど？」
ヴィヴィアンは微笑んだ。

要するに彼らの沙汰は金次第というわけだ。

「残念だが、払うもん払った後なんですね。ない袖は振れねえな」
ザルネルはトラック風のステアリングに手をかけた。

「あの船、スクラップにしてもそこその値段で売れそうだね」
シヨコラは主砲の発射ボタンに手をかけた。

パリスは苦笑する。

『おいおい、『雲』の向こうに惑星がいくつあるか知ってるのか？』
ナオは手もとの星系データを黙読した。数にして太陽系の十倍。
ずいぶんと子たくさんな土地だ。

「知らんな」「しらない」

ひげオヤジと丸顔少女は笑顔で仕事にかかった。

6

ふと目が覚めると、天井のまん中に裸電球のうす暗い光があった。
男は仰向けのまま左右に目をやる。小麦粉の大きな袋、肉や果物の缶詰、ミネラルウォーターの箱などが、スチール製の棚に所狭しと積んである。

「スーパ―の倉庫にしちゃあ、狭すぎるかな」

男は上半身を起こした。背中の凝りに小さくうめく。

こんな固い床に寝かされたのは、久しぶりのような気もするが……
ヘイズは寂しげに笑った。

立ち上がった男は、棚につまった食料の輸送用ラベルに目をやる。

「やーれやれ、とんだ場所に連れてこられたもんだ」

倉庫の鉄扉がずっと開き、モスグリーンの軍服を着た男が一人入ってきた。白髪混じりの縮れ毛をした黒人は、後ろ手にドアを閉めると言った。

「あいにく、ここには専用の監房というものがなくてね」

「一軍のお偉いさんが、僕のようなケチな盗賊になんの用かな？」

軍人は暗がりでも光らせたヘッドライトのような目で男を見据えた。
「ヘイズ・スモーク^{ジュニア}」……だったな。おまえに一つ任務を与える。それが終わったらどこへでも消えるがいい」

「依頼なら話は聞くけど、任務とはねえ」

「おまえはこれからしばらくの間、私の命令に従うしかない」

軍服の男は自分の腹を二度叩いて微笑んだ。

「ちえっ、カプセル爆弾か。古い手を……」

「その古い手にかかったおまえはどうなんだ？」

「……」

ヘイズは声をつまらせ赤くなった。ヴィヴィアン・ローズめ……。この頃のカプセルは、胃壁にくっついて長く滞留させることができるらしく、下剤や催吐剤で無理やり外に出すことは難しかった。最低でも七日間はこの黒人男の奴隷になるしかないと悟ったヘイズは、投げやりに言った。

「で、僕になにをやれと？」

「私の部屋で話そう」

軍人は出口に向けてあごをしゃくった。

ヘイズはドアを開けて狭い通路に出ると、男の前を言われるがままに歩いていった。

男の名はローラン・ヌジャンカ。階級は大佐。惑星国家セレスティンの宇宙軍に属しているという。

大佐の私室に通されたヘイズは、客用ソファにかけるなり言った。

「ここはあんたたちの故国じゃないようだけど？」

ヌジャンカはデスクにかけると小さく笑った。

「フン、輸送用ラベルの隠語を読み解くとはさすがだな。その通り、ここは惑星国家ジャスパーの首都。我々は敵国のまっただ中にあるというわけさ」

セレスティン国とジャスパー国は、その星系では二大国と呼ばれ、何十年も前から戦争をくり返していた。

「スパイの手伝いなんて、まっぴらだね」

ヘイズは三人掛けの長イスに移って、ごろんと横になった。

「なあに、仕事は簡単さ。五日後、この間の選挙で圧勝した新大統領の就任式がある。おまえは最高裁長官に化けて就任宣誓をやってくれればいい」

「変装は無理だと思うよ。僕はこの白メガネをかけていないと、まともに歩くこともできないんだ」

ヘイズはハツタリをかました。

「そのままでかまわんよ。現長官の目は光過敏症でね、サングラスをかけることを公認されている。そのメガネは黒いフィルターで被うとして、背格好はほぼ同じ、特殊メイクも変声器もある。なにも問題はない」

ヘイズは口をつぐんで顔をしかめた。

「できすぎている……」。

「で、僕が長官の二セモノをつとめることに、どんな意味があるのかな？」

「さあな。私にもよくわからん。そうせよと、上からの指示だ」

「食えない男だ……ヘイズは思った。この男、なにもかも知っているとしたら、天地がひっくり返るようなことをしでかすかもしれない。そのときは……覚悟が必要だ。」

ヘイズは大きく息を吸い、そして吐いた。

「遺書を書かせてくれないか？」

又ジャンカの眉がぴくつと跳ねた。

「怖がることはない。おまえの命は私が保証する」

「どのみちなにか騒ぎを起こすつもりなんだろう？ あんたが優秀な作業員だとしても、万が一ってことはある」

「好きにしろ」

大佐はデスクの引き出しを開けると、紙とペン、そして光沢のある丈夫そうな封筒をヘイズに手渡した。

奇妙な強盗団のリーダーは、遺産の分配について短くしたためる

と、紙の縁で指の皮を切つて血判した。

「ヘリオドル宛だ」

又ジャンカは封筒を受け取る。

「思っていたより気の小さい男だな」

「だからこれまで生きのびてこられたのさ」

「フフ……おまえなら、私より優れた指揮官になれる」

「軍事国家に生まれなくてラッキーだったよ」

自由人の言葉に、又ジャンカの笑顔が陰った。

「そうか……本当に覚えていないんだな」

「えっ？」

ドアをノックする音。

「もうそんな時間か」と大佐は立ち上がる。「作戦会議だ。ジョー・ミラー長官、君にも出席してもらうぞ」

7

三百天文単位（AU）（一AU＝地球から太陽までの平均距離）もある星系一つをまるごと包んでいる『雲』を抜けたヘリオドルは、大きな恒星をとりまく百余の惑星を前に途方に暮れることなく、ある目標に向けて直進していた。

狂気じみた迫撃戦の末に白旗をあげた賞金稼ぎは、ヘイズを連れていった軍人たちは、セレスティン星の者だと自白した。バリスとヴィヴィアンは、軍の機密に関わったとして消されることを恐れ、ヘイズの髪の毛に極小の盗聴器をしかけていた。

量子信号をたどっていったその先には、『二大国』の一端である惑星ジャスパーがあった。ナオたちは今、六つある衛星のさらに外側を漂う、大豆のような形をした岩石の陰に隠れ、様子をうかがっているところだ。

ヘイズは惑星国家ジャスパーの首都のどこかにいる。おそらくは

地下に。そこまではわかったのだが、宇宙軍がばらまいた『ラマヌジャン粒子』の影響でノイズがひどく、それ以上のことは聞きとれなかった。

なにしろジャスパー星のまわりには、戦争に明け暮れた精鋭艦隊がうろつろしている。切り札を一枚しか持っていないナオたちは、じつとして、通信妨害粒子が薄まる一瞬を待つしかなかった。

衛星とはいえない岩塊の裏側に潜んでからまる二日、ジャスパー標準時で五十時間後のことだった。

コクピットから緊急呼びだしがかかった。シャワーを浴びていたナオは、髪もろくに拭かず、バスタオルを体に巻いただけで通路を駆けていった。

とぎれとぎれではあるが、音声が聞きとれるようになった。

『……戦をいま一度、確認する。君は最高裁……ジョージ……ラーとして青の……場で行われる……統領就任……で宣誓を……。原稿は暗……たかね？』

『命……かかれば……だつてできるさ』

『結構。次に我々……部隊は……衆に……れて……を……』

ノイズの波がひどくなり、なにを言っているのかわからなくなってきた。

「ヘイズさん！　こちらヘリオドル、応答してください！」

ナオは声のするほうに向かって叫んだ。

ザルネルは機械の素人に悲しげな視線を送った。

「嬢ちゃん、そもそも盗聴器つてのはよ……」

「それ以前の問題だと思うけど」

シヨコラは首を横にふった。

ナオは『スピーカー』に向かって叫んでいた。

「ヘイズさん！　応答してください！　ヘイズさん！」

ジョージ・ミラー最高裁長官に扮したヘイズ・スモーキー・Jrは、
『黒メガネ』のブリッジに手をやり、これから起こることに思いを
馳せていた。

『青の広場』のはるか彼方まで広がる人の海原。演壇の向こう側で
控えるヘリデル新大統領。落ちくぼんだ瞳の奥にたたえる暗い光。
前任の男は彼の父親だそうだが、写真で見た限り、血は争えないも
のだと感じた。この特別なセレモニーには、ジャスパー国民だけで
なく、軍の要人も多く参列している。事件を起こして敵の戦意をく
じくには絶好の機会だった。それにしても又ジャンカという男は大
したものだ。彼はセレスティン軍の大佐であると同時に、ジャスパ
ー軍の大佐でもあった。就任式会場の警備を取り仕切っているのは
彼であり、要所に配置された兵士たちの多くは大佐の部下、つまり
セレスティン軍の工作員だった。

近くの教会で、正午の鐘がなった。

それまで楽隊の演奏や国民的歌手の熱唱に沸いていた『青の広場』
は、津波の前触れのように静まりかえった。

ミラー長官が短い階段を上がると、反対側のヘリデル新大統領も
歩きだした。二人は壇上で向きあい、右手を胸にあてた。

最高裁長官は言った。

「宣誓の準備はできていますか？ ヘリデル議員」

額を光らせた男は小さくうなずいた。

「わたくし、ハンス・ピーター・ヘリデルは厳粛に誓います」

そのとき、長官は遠くでなにかが鈍く光るのを感じた。あれは…
…ライフルの銃口？ 青空の就任式が血の葬儀に変わるのを見届け
なければならぬと思うと、吐き気がしてきた。

ヘリデルが次の句を口にしようとしたとき、予感したヘイズはく
つと目を伏せた。後頭部に一発……か。

そう思った瞬間、頭に激震が走った。

黒メガネは碎けて飛び散り、こめかみの辺りから赤いものが噴き出す。

なにが起きたのかわからなかった。

近くの聴衆から悲鳴があがり、ヘイズはようやく、ミラー長官である自分が撃たれたのだと気づいた。

軍事に関係のない長官がなぜ？

思わぬ狙撃に我を忘れていたヘイズは、騒いでいる人々のほうへ本能的に素顔を向けた。

ハッとした。

そうか！ セレスティン軍が僕を必要とした真の目的はこれだったのか！

新大統領ファミリーのそばにいたヌジャンカは、広場に背を向けると母国語でつぶやいた。

「コードネーム『ディープ・パープル』……か。ゴルゴンの末娘でもこんな手は思いつかなかったろうよ」

9

「準備はいい？」

ガスマスク姿のシヨコラは言った。

「ど、どっちのですか？」

同じくマスクをつけたナオは、船倉に下りたときからずっと足を震わせていた。

「もち、こっちのほう」

少女は貧しい胸を両手で寄せ上げた。

「片方で充分ですっ」

心の準備など永久にできるはずがなかった。開いたハッチのはるか下界には、ジャスパー国の首都が同心円状に広がっているのだ。

ラマヌジャン粒子のわずかな晴れ間について、スパイたちの企み

を知ったナオたちは、大統領就任式にあわせてヘイズ奪還作戦を実行に移そうとしていた。

大軍のなかへまともに突っこんでいっても多勢に無勢。ヘリオドールは『マジックマント』を身にまとい宇宙艦隊の脇をすり抜け、大気圏で赤い玉となり、ここまで降下してきたのだった。

「早くしないとバレちゃうよ」

シヨコラが腕を引っぱって急かす。

ナオはその場で踏んばり、小さな手をふりほどいた。

「わ、わかってます」

ヘリオドールの高機能シールド『マジックマント』は、レーダーからも目視からも身を隠すことのできる優れものだが、まだまだ未完の品で、透明でいられるのはわずか十分間だった。次のバージヨンへ上げるためには、ある忌まわしき発明家が鼻屑にしている『インテル・ガラクシア』というサッカークラブが、オフシーズンに入るのを待たねばならなかった。

しびれを切らしたシヨコラは、天井カメラに向かって手をふった。するとヘリオドールは別のハッチを開いて、爆弾を一つ投下した。

「ああ、もう行かなきゃいけないの？」

この奇妙な強盗団に入るきっかけとなった『あの時』と逆の立場になるとは、夢にも思っていなかった。

ナオとシヨコラは、小さくなっていく黒い塊を追うように、青の広場めがけてダイブした。

男は懷に手をのばした。スパイ団の武器庫からひそかに盗みだした拳銃。ヘイズは長官に扮したまま、銃口をこめかみに当てた。

二十二歳より前の記憶はほとんどなかった。自分がどこで生まれ

誰に育てられたのか、なにも覚えていない。ただ一つだけ、強烈な戒めの言葉だけが、なにかの拍子に何度も再生された。「そのメガネを外してはならない」と。その後、襲ってくるイメージは恐ろしいものだった。自分を取り囲む大勢の者たちを見まわした瞬間、人々はまるで波にのまれた砂の城のように崩れていくのだ。

狙撃され、騒ぐ聴衆を見たとき、それまで頭の隅でもややもや渦巻いていた疑問が一つに重なった。

僕は改造されたんだ、決戦兵器として。

会場につめかけたのは、血に飢えた獣たちではない。一握りの野心や悪徳におどらされた犠牲者なのだ。なんの罪もない、数百万の市民を巻きこんでしまった……。

ヘイズはトリガーにかけた指先に力をこめた。ナオ……すまない。橋から飛び降りた君を無理やり生かしておきながら僕は……。

空から黒い塊が降ってきて、広場の噴水のなかで爆発した。

辺りは一面、真っ白な煙に包まれた。

人々の叫び声が飛び交うなか、ヘイズは体が浮き上がる感覚を覚えた。気づくと、両脇の下からサイズの違う手が二組にゆつと伸びて、体を支えていた。

「ナオ!? ショコラ!？」

男は叫ぶと特殊メイクを引っぺがし、ヘイズ自身に戻った。

「えへへ、なんか『あの時』と逆ですね」

逆さぶりの女はガスマスクの下でささくなく微笑んだ。

煙で視界はほとんどないものの、みしみしとうなる特製ゴムの音を耳にして、二人がなにをしかしたのかすぐに想像がついた。

敵地のまっただ中めがけてバンジーとは……彼女もずいぶん変わったものだ。ヘイズは苦笑した。

「うわ、変な色の目。メガネの下ってそんなだったんだー」

ショコラの言葉に、ヘイズはハッと顔を固くした。

「二人とも、僕の目を見るな!」

「えっ?」

シヨコラが聞き返す間はなかった。
ゴムが一気に縮んで、三人は空高く舞い上がった。

11

男と女と少女は、船倉のあちこちでのびていた。
帰還の様子をコクピットのモニターで見守っていたザルネルは、
ため息をついた。

「バカがほったらかしにしてった体育マットが、こんな時に役立つ
とはな……」

シヨコラは女たちをつるすゴムの長さをまちがえていたようだ。
ナオの握力が最後までもたず、三人が変な回転をしながら空中分解
したせいで逆に助かったのだが……。となると、少女が設定をまち
がえなかったら、どうだったのか。

「幸運の女神はやはり健在か」

ザルネルは一人笑うと、宇宙へ向けてアクセルを踏んだ。

最初に目覚めたのはシヨコラだった。少女はぬつと立ち上がり、
ふらふらマットの上を歩き、柔らかいものを踏んづけたところで、

「あつ」と目を開いた。

「うぐっ！」

腹を踏まれたナオは不愉快そうな目でガスマスクをとった。

「ヘイズさんは？」

「あっち」

シヨコラが指さした先に、男は大の字になっていた。

二人が左右から揺すっても、ヘイズはただ呼吸をくり返すだけで、
深い眠りからは覚めそうになかった。催眠ガスを吸ってしまったの
だ。無理に起こすと体に触るだろうと、少し待つことにした。

シヨコラは言った。

「ねえ、さっきの見た？」

「え、ええ。深い紫色……でしたね。瞳全体が」
「もっかい見てみようよ」

少女はヘイズの閉じたまぶたに手をのばした。

ナオはとっさに引きとめる。

「だ、だめですよ！ 見るなって、すごい顔で言ってたし……」

「もろに目え合ったけど、なんにも起きなかったよ？」

「で、でも……」

ナオが言ったときにはもう、少女は男のまぶたをべろんと剥いていた。

「ほえー、宝石みたいだ」

神々しいというべきか、禍々しいというべきか、アメシスト紫水晶の色合いを深くしていったような目玉が二つ。白目の部分がないだけに、恐い話にでてる魔猫まびょうのような感じが、ちよつと不気味ではあった。

彼はムキになってその目を守りつづけてきたようだけど……ナオは首をかしげた。単に変な色をしているから恥ずかしかった、というだけのこと？

しばらくして、ヘイズはゆっくりと目を開けた。瞳の色が一様で、どこを見ているかよくわからない。

「大丈夫ですか？」

ナオが声をかけると、男はさつと腕をだして目を隠した。

「あっち向いて、早く！」

シヨコラは笑った。

「さつきまぶたひん剥いて、さんざん観察したし」

ナオは言った。

「なーんにも起きませんでしたよ？ 例の『大変なこと』っていうのは」

ヘイズはおそろおそろ腕を下ろし、身を起こすと、顔を背けた。

「じゃあ、なんだったんだ……あの戒めは」

「あの……よくわからないんですけど、セレスティン軍は、ヘイズ

さんをどう利用しようとしていたんでしょうか？」

「……」

「知っているなら、聞かせてくれませんか？」

「……」

「今後の仕事に関わる情報なら、共有すべきだと思いますけど？」

ヘイズはふつと口もとを緩め、自分のことを少し語った。

話を聞き終えたナオは眉をひそめた。

「決戦兵器……ですか」

「おそらく僕はもう何年も前に洗脳されていて、前大統領の就任式の日、あの広場へ行き、作戦を実行しているはずだった。だが、それを望まない誰かが僕の記憶を奪い、軍の手の届かない辺境の惑星へ逃がした……と、何分か前にひらめいて、そう違いないと信じていたんだけどね」

「ブランクの間に、兵器としての魔力がすでに失われていた、とか？」

「可能性としては無視できないし、そうあってほしいものだね」

「それとも、開発者は大量殺人兵器の乱用を望んでいなくて、できたフリをしていただけ、とか？」

「研究組織には必ず一人や二人、裏切り者がいるものさ。フリだけではすぐにバレてしまうよ」

「じゃあ……」

「もういいじゃないか。とにかく……」

ヘイズは両手で女たちを抱き寄せた。

「君たちは最高だ」

それからしばらく、ナオはぼーっと上の空でなにも覚えていなかった。

ヘリオドール に帰ってきたヘイズは、ジャスパール星での事件の後も、いつもと変わらぬ仕事ぶりであり、発情ぶりでもあった。ただ、その見慣れない瞳の色のせいで、若い女性からの依頼はめっきり減ってしまい、そういう意味では大きな打撃を受けていた。

今日も、青い髪の美女から「キモい」と仕事を断られ、ヘイズはコクピットの自席でしょんぼりしていた。

ナオは隣席の男にぎこちない笑みを送った。

「こ、この頃の男性は気前がいいですから、そっちの線でいきましよう。世の中、やっぱりお金です」

「……」

ヘイズは窓の外に広がる巨星の残骸に向かって、ぶつぶつ語りかけている。

「ややっ！ ああ美人はいつたいどこからやってきたのかしら？」

ナオは叫ぶと、コクピットの入口を指した。

「……」

ヘイズは動じない。

これは重症だとナオは思った。

新しいメガネを買おうとしたこともあったが、彼はどれも気に入らないと言つて、三百万ドラ（ードラ＝約一万円）もしたオーダーメイドの品さえ、手に入れたその日にネットオークションで売ってしまった。例の白メガネと同じものをどうやって手に入れたものか、ヘイズ本人でさえわからなかった。

彼にとつての『色』は、普通の人の糖質や脂質やタンパク質に匹敵するものらしく、欠乏したとたんに元気がなくなってしまうのだった。

かくなる上は……ナオはすぐと立ち上がり、言った。

「次の仕事が終わったら、デートしてあげます」

「！」

ヘイズのつぶやきがぴたりと止んだ。

ナオは内心ぞっとした。でも、うるさい二人が仮眠中で助かった。

「二言はナシだよ?」

ヘイズはぼそと言った。

「なにしろケチな盗賊の子分ですから、どうでしょうかね」

ヘイズはシートをまわすと、ひざまずき、ナオの手にキスした。

「どんなわがままでも聞きますから、どうか」

「さて、どうしましょう」

ナオはじらした。

「どうか!」

姫の気分にのぼせたナオは、さらにじらした末、偉そうに言った。

「ま、いいでしょう」

これで少しは元気になるだろう。ナオはそう思っていたが、ヘイズはうつむいたまま喜ばなかった。

むっとした姫は笑顔をひきつらせた。

「なにか不満でも?」

「……」

ヘイズは動かない。

ちよつとやりすぎたかも……ナオは不安になってきた。

「怒っちゃいました?」

「……」

「ちよつと偉そうに言ってみただけですよ」

ナオはひざまずく男の肩に手をやる。

男は横向きに崩れた。

「ヘイズさん?」

ナオは男の腕を揺すった。返事はない。

顔を見ると、瞳と同じ深紫色をしていた。

「ヘイズさん!? ヘイズさん!」

突然意識を失ったヘイズ。どうすればいいのかわからず、ナオが助けを呼ぼうとしたときだった。

血相を変えたザルネルとシヨコラが、コクピットに駆けこんできた。

まだなにも言っていないのに、誰が仮眠中の二人を起こしたんだろう……ナオは訝しんだ。声も姿もないけど、この船にはもう一人クルーが存在する。たぶん彼女の仕業だ。

三人は男を抱き起こしてシートにすわらせると、誰に助けを請うべきか話し合った。

「こういときは医者だろ？」

ザルネルは言った。

ステイカルアナライザー

「でも、医療分析器の数値は正常の範囲でしたよ？」

ナオは小さな端末を掲げてみせる。

「なんか苦しそうだよ？」

シヨコラはうなされる男の手を握りながら言った。

「やっぱ医者だろ」とザルネル。

「医者は専門には強いですが、そこから外れるとただの人ですよ」

「そりゃ言い過ぎだ」

「いいえ。検査で異常がないと、なんでもストレスとか歳のせいにしますから」

ナオはOL時代、そういった裏話を給湯室でよく耳にしていた。

二人の熱い議論はしばらくつづいた。

「ねえ、苦しそうだよ？」

シヨコラが大きな声をだし、ハツとした二人は口を閉じた。

「とりあえず、博識で通ったドクターに診せましょうか」

ナオは折れた。

ザルネルは虚空に声を張る。

「ファイ、頼むぜ」

そのとき、船体がぶるつと揺れた。誰かから通信が入ったようだ。エアスクリーンが起動し、黒い長髪をおさげにした少女が映った。

「ティーコ……さん？」

ナオはすぐに思いだした。忘れもしない。忌まわしき発明家の孫にして自称天才助手の……。才能はあるのだが、お調子者のところが玉にきずの……。

『こんにちは。シヨコラさんのD S F治ったよ』
ディーエスファイト

シヨコラは調子の悪くなった骨董ゲーム機を修理に出していた。

「サンキュー！ い、いや、そんなことより、ヘイ兄^{にい}が大変なの！」
『うわー、でっかい宝石。なんのコスプレ？』

ティーコは深紫色の光に包まれたヘイズの顔に見とれている。

ナオは声を荒げた。

「病気なんですっ！ たぶん……」

『なんだなんだ、騒々しい』

部屋の奥でサッカー中継を見ている青い頭巾に黄色い胴衣の男は、画面から目を離すことなく言った。

セルジオ・サントス・ゴメス・アル^{II}ジャベル博士。珍奇な機械を生みだすこともそうだが、サッカー中毒^{バカ}として特に有名な、稀代の発明家だ。

「ヘイズさんの具合が変なんです！ こっちへ来て診てもらえませんか？」

『まあ、待ちたまえ。ロスタイムはあと四分だから』

「その間に彼が死んでしまったら……」ナオはうつむき、やがて顔を上げた。「私はあなたを殺します！」

セルジオはテレビを消し、カメラの前にすっ飛んできた。博士はヘイズの顔を見るや「あっ」と声を上げた。

『こ、これは……』

「なにか知ってるんですか？」

『すぐにそっちへ行く。患者も船も動かしてはいかんぞ、いいね？』

ナオは息を荒くして何度もうなずいた。

セルジオの姿が消えると、ナオはよたよた後ろへさがった。いや違う。背中を引っぱられたという感じだった。いったい誰に？

シヨコラとザルネルは離れたところで話をしている。ヘイズはシートでぐったりしたままだ。近いのはヘイズのほうだけれど……変な病気にかったせいで念動力でも備わったんだろうか？

ナオは男の様子を観察しようと、前屈みになって顔を突きだした。男は女を胸に抱き寄せた。

「え？」

予想外の反応に、ナオは為す術なく顔を埋めていた。

「ちよつと、やめてくだ……？」

よく見ると、ヘイズの両腕はだらりと下がったままだ。

「そういうことは治ってからにしろよ」

ザルネルが近寄ってきた。

「ちつ、ちがいますっ！ わわ私はただ、脈を診ていただけですっ！」

「わかったわかった。ともかくそれは専門家の仕事だ。そつとしときな」

ナオは男から離れようと両手を突きだす。二の腕の筋肉がふるふるいった。

「ふん！」

両足で踏んばり、気合いもろとも体を引いてやつと離れ、勢いあまって尻もちをついた。

「一人でなにやってんだ？」

ザルネルはメガネの女を見下ろした。

「ハアハア……そつとしておくどころか、近づくことさえしない方がいいと思います」

なぜだと訊かれても、ナオは上手く答えられなかった。

の横につけた。サッカーシューズのような形をした船。その中腹から飛びだしたボール型の輸送艇^{ランチ}が近づいてくる。ヘリオドールは下のハッチを開いて、丸いエサをぱくつと飲みこんだ。

コクピットの自動ドアが開き、ひげがちな頭巾男が現れた。男は顔を歪め、額をおさえている。

「相変わらず、手荒い歓迎だな」

ザルネルは言った。

「あんたのイカレた発明品ほどじゃないさ」

彼をはじめとする三人は、部屋の出口にかたまっていた。

セルジオ博士はそれを気にかける様子もなく、シートでぐったりするヘイズのほうへ歩んでいった。

「やはりな」

言ったきり、男は黙ってしまった。

博士はどうして平気で近づけるんだろう……不思議でならないナオは訊いた。

「あ、あの……強く引っぱられる感じとか、ないですか？」

「そんなことはいいから、このままにしておくんだぞ。ちよつと行ってくる」

セルジオは出口へ向かう。

ナオは道をさえぎった。

「悪い……んですか？」

頭巾男は血の気のない顔で言った。

「来るのがあと一日遅れていたら、なにかも手遅れだった。二年つづいた銀河チャンピオンズリーグが明日で終わってしまうところだったよ」

不思議なセリフを残し、セルジオはいったん ターコイズ へ戻った。

気になって調べてみると、博士のごひいきクラブ『インテル・ガラクシア』も順当に勝ち残っているその大会は、窓の外に小さく見

えている赤い惑星で行われていた。ヘイズの症状とサッカー大会の終焉、いったいどんな関係があるというのか。

「ったく、戦争ってやつは……」

ザルネルはいつになく恐い顔をしていた。

ナオは体育座りの格好で目覚めた。いつの間に眠ってしまったんだろう。頭をもたげ、床に落ちていた伊達メガネを拾ってかけると、あたりを見まわした。

シヨコラはナオと同じようにして、こっくりしながら眠っていた。壁を背にして地べたにすわるザルネル。まわりには吸い殻の山が、できあがっていた。

不安になったナオは、なにか訊かずにいられなくなった。

「あ、あの……」

「噂で聞いたことあるんだけどよ」ザルネルは最後の一本をもみ消し、つつけた。「あのジジイ、昔はセレスティン軍の兵器開発に携わってたって話だぜ」

「じゃあ今回の事件にもなにか関わりが？」

「さあな。あくまでも噂だ」

「セレスティン軍は、捕まえたヘイズさんを決戦兵器として敵国へ送りこんだ。一方、セルジオ博士は彼の変な引力に弄ばれることもなく、症状を一目で見抜いた」

「クサいな……」

ザルネルは口ひげをさすった。

「ボク、してないよお？」

シヨコラは首をもたげ、虚ろな目で言った。

「なにをだ！」

「オナラの話じゃないの？」

「てめえはイモ畑の夢でも見てる！」

コクピットのドアがさっと開いた。

セルジオ博士ともう一人、修理した携帯ゲーム機を手にするティ

「コだ。」

セルジオは急ぎ足でシートに近づくと、手にしていた白メガネをヘイズにかけてやった。なくしたものと瓜二つのやつだ。

「ふう」博士は額の汗をぬぐった。「これで大丈夫。あの世で後悔せずにすんだよ」

「そんな……サッカー大会が一つ終わってしまうくらいで大げさな……」

ナオは言つてすぐ、失言だったと身を固くした。

頭巾男は小さな笑顔をこちらに向けただけだった。

あれ？ 怒つてない？

ザルネルは笑いをこらえていた。

ナオは口を尖らせる。えーえー、どうせ私はなにもわかってませんよ。

「二日くらい安静にしていれば、動けるようになるはずだよ。じゃ、私はこれで」

博士はさっさと行ってしまった。

置いていかれた黒髪の少女はぽかんとしていた。ハッ和我に返つて修理品をシヨコラに手渡すと、苦笑いを残し、祖父を追いかけていった。

「クサイぜ……」

ザルネルは口ひげをさすった。

「ほんとだ」

いつの間にか男のすぐ後ろにいたシヨコラは、顔を歪めて手をふった。

それからしばらく、コクピットではいろんなものが飛び交った。

15

体調が戻ったヘイズは、その日の朝から落ち着かなかった。手鏡

を取りだしては髪を気にしたり、スーツや靴が汚れていないか
チェックしたり、マウスウォッシュを噴いたり、目薬を差したり……。

騒がしさに目を覚ましたナオは、パジャマ姿のまま自室の入口に
立ち、通路を行ったり来たりする男を一本線の目で追っていた。

なんだろうと思いつながらたよたよた洗面所へ向かい、歯ブラシを動
かしていると、浮かない顔のヘイズが入ってきた。

「僕のリップクリーム知らないかい？」

「さあ？」

ナオはブラシをしゃしゃこいわせながら答えた。

「おっかしいなあ」

白スーツの男は腕組みする。

「合コンでもやるんですか？」

男は両手を広げた。

「なに言ってるんだよ。約束したじゃないか」

「？」

ナオは大きな鏡を見つめたまま首をかしげる。

「次の仕事が終わったら、デートしてあげます。君は確かにそう言
った」

カラン！

ナオは歯ブラシを取り落とした。

ヘイズが安静にしている間に小さな依頼が一つ入り、ナオたちは
彼抜きでどうにか仕事を片づけたのだった。

「病人の僕をひざまずかせておいて、それはないと思うなあ」

「はう……」

やっぱりあの時、調子に乗りすぎていた。元気づけるための方便
のつもりだったのに……。

ナオは口をゆすごうとして、何度もむせてしまった。

「で、どこへ行きたい？ 天の川が見える公園？ 無重力遊園地？
ダイエット中華街？ それとも……」

ナオはため息をついた。

「二人きりにならないところなら、どこでもいいです」

「ええっ？ 人目があつたら恥ずかしくないかい？」

「……」

ナオは男を睨め上げた。あくまでも『そういう』筋書きへ持っていくつもりなのね……。

「普通に、お散歩がいいです」

「お散歩ね」

ヘイズは微笑んだ。

数時間後……。

人目もはばからず、ナオはヘイズの腕のなかにいた。

「く、空中散歩なんて、ズルいですよ！」

双子の超高層ビルをつなぐ長い渡り廊下は、どこまでも透き通っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2535g/>

スモーキー & ザ・ストレンジラバーバンド

2010年10月14日14時52分発行